



登場人物紹介。

登場人物紹介

ゴードロック 退役軍人 能力 リトル・プリンス

栄光の手、グレート・オーダー支部のリーダー。

ズンボ 巫女

『鬼憑きの巫女』。栄光の手、バーバリアン支部のリーダー。

ベレト 能力 マスター・ウィザード

ウェディング・ドレスの上にビスチェを身に付けた、美しき女装の男。

パラディア ライダー・ジャケットを着て、バイクに跨るオールバックの男。

エーイーリー ミュータントの王、クレーターを統治している。

メビウス・リング 能力者ギルド『ドーン』の主。

真っ黒なドレスを身にまとった、人間大の生きた球体間接人形。

+++++

作品協力 『御使い』キャラクター原案・矢崎美月様

<https://twitter.com/uran235u>

「此処にアメフトのスタジアムを作るんだってさ」

初老の傭兵が、テンガロンハットの男に告げる。

十数メートルの鉄壁によって囲まれている。

壁の上には有刺鉄線が張り巡らされていた。

「イカれてやがるぜ。何を考えてやがるんだ」

「中にいる連中はどうなっているんだろうな。そもそもどんな姿をしているんだ？」

二人共、あくまで企業の構成員として、此処にいる。

あくまで、仕事の為だ。

だから、あらぬ同情など、持たないように務めていた。

……………。

『設計図』を元にして作った、核爆弾が此処に撃ち込まれて、半永久的な放射能汚染地帯へと変わっていた。中には捕えた難民や重度精神病患者、重度薬物中毒者、終身刑の者、政治犯などを放り込んでいられると言われている。此処は各国の“人間の捨て場”なのだ。初老の傭兵は、此処を警備している者だった。彼はガイガーカウンターを手放さない。いつも揺れ動いている。金の為とはいえ、ろくでもない仕事を選んだものだと思う。

だが、そろそろこの仕事も辞め時だ。

新しい仕事の目処は考えている。

「軍産複合体や原子力マフィアの馬鹿どもの頭は人間としての大切なモノが足りないんだよ。最近では、クリーチャーが外側にまで出やがるんだよ。それを撃ち殺すのが俺の仕事だ。中の奴らはどれだけ生きているんだろうな。もう化け物どもに喰われているか、もしかすると、陰で武装を始めているのかもしれないな」

傭兵は、煙草の吸殻を地面に投げ捨てる。

「絶対に近隣付近の村に向かう前に始末しろ、って言われている。みな平和が一番だからな。こんな場所が存在する事があってはならないんだよ」

もっとも、この場所の周辺は荒野になっていて、更に森と山に囲まれている。

この場所の一带には、村や町などなく、傭兵達の駐屯地だけが存在していた。

「一度、爆弾を落としてから、窪地にして、そこでアメフト会場作りたかったよ。ああ、もうお偉いさんはどいつもこいつも考え方が分からねえ、客は入るのかよ。俺は気味悪くって、入りたくねえよ」

傭兵は、本当にウンザリしたような顔をしていた。

†

ホームレス達が、ガレキの山にて栽培したものを育てていた。此処には奇形の植物ばかりが生えてくる。それでも、それを口にして食べる。

「雨水がしばらく降ってないなあ、どうすっかなあ」

「どうしようもねえだろ」

垢塗れで、元の顔形が分からないホームレスは溜め息を吐く。

街の外に出れば、傭兵達の集団が銃を構えて撃ってくる。

どうすれば、此処を脱出出来るのか？ という問い掛けに対して、真っ先に思い浮かんだのは、地下に孔を掘る事だった。

そういう計画を、此処に住んでいる一部のホームレスの者達は計画していた。

……………、それは簡単に頓挫した。

ある事件が起こってから、此処の秩序は変わってしまった。

中央の、薬物がよく取引されている公園だった。

最初、そこには、神が舞い降りたと、多くの者が思った。

実際に、それに近い存在なのだろう。

それは、全身に包帯を巻いて、ズタボロのフードとマントを纏った男だった。

＜俺様はエーイーリー様の忠実な使者だ。これからはこの区域もエーイーリー様の植民地にさせて貰う。世界各地のあらゆる汚染区域を手中に収めようとしている＞

ホームレスの一人は呆けたような顔になる。

「なあ、あんた酒でも飲んでいるのか？」

そう言って、彼は酒瓶の先を口に入れる。

「まあ、待てよ。話を聞いてやろう」

他のホームレスが笑う。

＜此処はあらゆるものが捨てられているな。そしてデータを取る為の実験場だ。だが、もうデータの取得に興味は無いらしい。今後、都合が悪くなった為に、娯楽施設に創り変えるみたいだぞ。それも此処に何発か爆弾を落とすらしいぞ。クリーチャー達を殲滅出来るらしいからな。それに此処には凶悪な政治犯もいるらしいな。それも奴ら武器屋共にとっては都合が悪いらしい＞

フードの男はそんな事を一方的に告げていく。

「お、おい、そんな事、聞かされていないぞ？」

＜そうだろう。俺様が奴らなら、言うわけが無い。お前らはゴミ扱いだからな。あるいは害虫なのかな？＞

ホームレスの一人が、それを聞いて怒り、瓶を投げる。

瓶を投げたホームレスは、何処からともなく降り注いできたガラスの雨によって全身がズタズタになり、バラバラに刻まれていく。

フードの男は何の容赦もしなかった。

＜だから、お前達は我々が支配する事にした。今日から、此処は我々の管轄下になり、お前らは我々の下僕として働いて貰う。以前よりは待遇は良いだろう。可能な限りの安全は保障してやろう＞

「な、な、何が目的なんで？」

＜エーイーリー様は軍事産業の奴らとの全面戦争を考えておられる。あの御方は、造物主様の手によって、この世界に産み落とされた＞

フードの男は笑う。

＜お前にも分かるように簡潔にこの世界構造を説明してやろう。俺様は主人であるミュータントの王、エーイーリー様の派遣員だ。エーイーリー様は造物主様によって作られた。更に造物主様は、多次元世界の支配者に近い『霜のドラゴン』の傘下に入る事を画策しておられた。エーイーリー様と肩を並べ合っている権力者達が、核兵器や原子力プラント、爆弾、戦闘機、生体兵器、情報操作兵器、気象兵器などをビジネスにしている者達だ。この世界はピラミッド構造だ。お前達は最下層だ。シンプルだろう？＞

フードの男はとても愉快そうだった。

＜お前達を廃棄物から高級奴隷にしてやると言っている。毎日、飯が食えるし、適度な休憩、栄養、休日を与えてやろう。我々の配下になれ。もう一度言う。俺様は此処を植民地にする為に、派遣されてきた＞

†

此処は核の雨が降り続ける。

意外にも自殺する人間は少ない。……自殺するまでもなく、病死する事が出来るからかもしれない。

農作物を育てている場所もあるみたいだが、奇形化した植物や、あるいは外側の人間にとってはグロテスクな姿の物体ばかりだ。此処は遺伝子レベルで生命種が破壊されている。

この場所の名を、みな、クレーター、と呼んでいる。

1

「レイブリアン達の部隊は全滅したのか」

ゴードロックは、コーヒを口にしながら、コンピューターを眺めていた。

新たに派遣されてきたコンピューター技師であるズルトは、困惑したような顔をした。

「そのようです……」

ズルトは頭を掻き毟っていた。

「で、どういう死に方なんだ？」

「それがですね……」

パソコンの画面に、写真が映し出されていく。

そこには、何名もの死体が載っていた。

死体はどれも、身体が土の人形のようにになっていた。

「これが死体か？」

「………そうです。どうやら、この状態のまま生きて帰ってきた者達もいるそうです」

この技師の顔には、明らかに恐怖の色が浮かんでいた。

「メビウス様から“エーイーリー”に関して、調べるように言われ、部隊全てが全滅してしまった為に、調査は中断されたのか」

ゴードロックにそう言われ、ズルトは、頭を掻き毟り続ける。

「全員、化石にされてしまった。あるいは、土人形に。まだ生きている者もいます。何故、生きているのかが不思議なのだそうです。なれの果てを見せましょうか？」

「いや………、それはいい……。彼らからの情報は聞けそうか？」

「無理です。みな、発狂してしまっている……」

「仕方ない。俺達の支部が出向く。その場所の写真を映してくれ」

「……分かりました……」

その場所の写真が映される。

高濃度放射能汚染に晒されている場所だ。

世界中から、核廃棄物を中心とした、ありとあらゆる工場などの産業廃棄物が捨てられている場所だと言う。

そこは、クレーターと呼ばれていた。

そこに、人間大のサイズで、漆黒のドレスを纏った、金色の縦ロールの生きた球体関節人形であるメビウス・リングが、絶対悪としている“造物主”が創造した怪物が支配している。

メビウスが栄光の手のメンバー達に告げる命令は、ただ一つだ。

造物主の創り出したものは、それが生きている存在であれ、遺跡などの施設であれ、全て破壊し、殺害しろと。

ゴードロックは、特別任務を授けられた者達の一人だった。

†

ゴードロックは、栄光の手『バーバリアン』の支部へと向かう事にした。

そこは、ランキング上がりの者達や、何かしらの大きな問題を抱えて他の支部に回せない者達をメビウスが手心を加えて、自らの側近に参入させた者達だ。精神に異常を来たしている者や、未だ社会秩序や道徳を破壊したい者達ばかりが集っていると聞いている。

だが、強力な能力者もいると聞いている、支援を受けなければならない。

ゴードロックは駅近くの、龍の銅像の前で立っていた。

……正直、どれだけ信用出来るか分からないが……。

ゴードロックはメビウスにもっとも近い存在だ。

その立場として、任務を成し遂げなければならない。

「あー、軍服の人、目立ちますねー」

明るい声が聞こえた。

二人の女が現れた。顔立ちが似ている。一人はブレザーを着ていて、薄化粧を施している。髪の毛は茶色に染め上げていた。……付け根が黒い為に染めているのだと分かる。目立つようにピアスをいくつも付けていた。

もう一人は花柄の黄色の着物を着ていた。

「栄光の手の他支部のメンバーですよ？ “グレート・オーダー” を授けられる人、私達の方は、まとまりが無いので、酷い仕事ばかり回ってくるんですよ」

そう言って、着物の人物は笑った。

†

神社の境内だった。

どうやら、この二人の姉妹の敷地らしい。

ズンボは赤と白の巫女装束に着替えていた。

彼女はゴードロックに食事を出してくれた。

煎餅にお茶だ。

ズンボの方は、何かの薄く切った肉を食べていた。妹の方のグレースは、ブレザーをの上着を脱いで、チョコレート・スティックを食べていた。行儀悪く、スティックの粉を漆塗りのテーブルの上に落としている。

「何も入っていませんよ」

ズンボが、軍服の男に告げる。

「お前は何を食べている？」

「ああ？ 私のこれですか？ まあ向精神薬みたいなものですね」

不可解な事を口にする。

「臭いで分かる。……断っておくが、私は口にした事は無いぞ。それは人の肉だろう？」

「まあ、見える場所で食べるべきじゃないのですけど。……知って貰おうと思って」

天真爛漫なグレースに比べて、ズンボは落ち着いた性格をしているみたいだった。

「私は『鬼憑き』なんです。だからカニバリズム衝動を抑える為に、病院からあてがわれた、新鮮な肉を食べているんですよ。吸血鬼みたいなもんです……あれ、もっと気持ち悪いですかね？」

ゴードロックは首をひねる。

「どういう事だ？」

「えと、私の家系……というか、この辺りは狐憑き、蛇憑き、犬神憑き、猫憑き、蟲憑き、……色々な憑きものの筋の家系でして。私の家系の場合は鬼憑きだったんです。十四の時に、自分の家系の憑きものを身体に受け入れる事になったんですよ。身体に別人格や化け物の精神を降ろすんですね。……もっともらしい事言うようだけど精神病ですよ。D S M－Ⅳとか好きな医者は私達の家系に興味あるんじゃないかなって思います」

「……つまり、どういう事だ。頭が鈍い私にも、もう少し噛み砕いてくれないか？」

ゴードロックは正座し、背筋を伸ばし、お茶のみを口にする事に決めた。

「つまりですね。私は自らが人喰い鬼である、という妄想に取り憑かれているんです。……妄想、精神病、って言っても、それ事態が、邪悪な力の産物なんですけどね……。もう衰退し、絶滅しかかっていますが、他の家系も酷いらしいですよ。たとえば、猫憑きなら食事はネズミなどで、四足歩行で歩いているとか……………」

ゴードは、げんなりした顔になる。

ズンボは薄く切った肉を口にしていた。

「ゴードロックさん、真面目そうだから、この子にちょっと教育してくれませんか？」

ズンボは、妹の頭を鷲掴みにする。

「なによ、お姉ちゃんっ！」

「こいつ、遊ぶ金欲しさに、年齢を偽って性感マッサージ店で働いているんですよ。バイトするなら、コンビニとか喫茶店でやれ、って怒鳴りつけてやるんですけどね。……たまに、この神社内に私の倍近くの年の男連れてくるし、不浄を持ちこむな、って話なんです」

「お姉ちゃーん、何言っているの？ 私の友達は同い年なのに、A V女優で有名なんだからね。でもA V出演は危ないから、もっとリスクが低くて、お金が入る仕事しているだけじゃないー」

そう言いながら、グレースは通信機のチャット機能で、友人とやり取りしているみたいだった。どうやら、男のようで、彼女はとても嬉しそうだった。一回、寝ただけなのに、もう五カ月もストーカーしているきもいー、と口にしていた。

「おい、ズンボ。この人生を舐めているガキを、俺が直々に鉄拳制裁していいか？」

「……でしょう？ 私もたまに殴ってます」

ゴードロックは、しかめっ面をしながら、出された煎餅をようやく口にする。

ズンボは弓服を纏っていた。

そして、弓矢を手にして、的に射抜いていく。

「ゴードロックさん。私達、バーバリアン支部、もしくは他の支部の者達は、貴方達の支部を『グレート・オーダー』と呼んでいます。他の栄光の手はあくまで副次的なもので、貴方達、特に貴方と花鬱、それからオブシダンの三名が、実質、メビウス様の直属部隊なのだと考えています」

矢が、的に真ん中に命中する。

距離は十メートル程度だった。

「我々、バーバリアン支部。野蛮な者達は、ランキング上がりの犯罪者と言われているんですが。実態は少し違っていて、“病的に社会不適応集団”なんです。その社会ってのは、組織、って言い換えてもいいかもしれませんね。ちなみに私がリーダーのズンボです。妹はメンバーでは無いのですが、どうしても、と思い、私の仕事は伝えています」

彼女はまた弓矢を引いていく。

「メビウス様がいなければ、私はタダの人喰い鬼でした。何人殺して食べたのか、正確には分かりません。この気持ちはきっと貴方には分からないでしょうが」

また、別の的に中心に矢が刺さる。

「……………、分かれようとはするつもりだ」

長い黒髪の女は、結わえていた髪を下ろすと、少しだけ嬉しそうな顔をする。

「ゴード様、貴方が実質、ドーンのNo.2だとも言われています。アサイラム所長のケルベロスだと言う人も多いですが。会って見て分かりました。貴方には、どこか人を落ち着かせる力があります」

「俺は能力、強さ自体は大した事は無い。ケルベロスの方が遥かに優秀であるし、彼には遠く及ばないだろうな」

「そうなのですか？ でも、力には色々な種類があります。攻撃力、破壊力だけがあるなら、私達の支部にもいますが、人格に問題がある為に使い物になりません」

↑

軍服姿の男と、巫女姿の女。

二人は、不思議と似合うなあ、と、グレースは、通信機で複数の男達とチャットをしながら考えていた。

そして、庭園の鯉を見つめて、石を池に転がしては、鯉が混乱するのを無邪気に楽しんで見ていた。

↑

二人は、支部の中を散歩していた。

屋敷全体が、一つの美しい景観をしていた。中に小さな神社や祠などが並んでいる。

ゴードロックが話を聞く限りにおいては。

ズンボの“病気”は深刻なものだ。

彼女は基本的には、“肉”ばかりを食べて、生活していると言う。

そして、それは病院からである、と。

新鮮な人間の肉でなければいけないのだろう。

その病院というのも、おそらくは、野戦病院だ。生きた人間の身体から重傷の手足を切断して、それを冷凍保存して食べているに違いない。……しかし、頻繁に渡されるものなのか。

ゴードロックは、自らの血肉を彼女に提供しようかどうか悩んでいる処だった。

だがすぐに、自分の悪い癖だと思い、その考えを振り払った。

「心配しなくても、私は普通の食事口にもしています。でも、肉を食べるのは、私の“義務”なんです」

ズンボはそれだけ述べた。

ゴードロックは、それ以上の事は、彼女から聞くのを止めた。

「バーバリアン支部はおそらくは、貴方の支部よりも、今や数が少ないでしょうね」

彼女は少し、悲しげに言う。

「私も含めて、今や五人しかいません。少し前までは六名いました。メビウス様に、……いや、この世界の秩序に反逆しようとしたので、私が先月、元ランキングの男を、殺す事になったんです。彼は真っ先にリーダーである、私を殺そうとしました。彼は、はっきりと告げました、命令(オーダー)に飽きたから、メビウス様を殺してやる、と……」

「……………そうなのか。しかし、メビウス様のお考えは……。人間を信じ過ぎている……」

ゴードロックは、シシオドシを見ながら、溜め息を吐いた。

「どんな奴だったんだ？」

「巨大なハンマーを得物にし、素手でビルを粉々に出来る大男ですね」

「そんな奴だったのか。やるじゃないか」

「……………私の力で罫を張りました。それにかかって、彼は凄惨な死体になりました」

彼女は口元を押さえる。

「……………、死体は食べる事にしましたが。体重180キロで巨大ハンマーを振り回すのが好きな中年男性の肉を食べる、となると……。これも試練と思って、切り分けて食べました。中々、すぐには食べ切れず、死体はまだ大型冷蔵庫の中に入れてあります。骨は供養所で祀っています」

彼女は、元軍人の男の顔色を見て、自分が外の人間から見て、どのくらい嫌な事を話しているのか、気が付いたみたいだった。

そして、ズンボは大きく溜め息を吐く。

「私の事、狂っている、って、今、思ったでしょう？ ……………、仕方ない事ですよ……」

「……………すまない」

ゴードロックは、素直に謝った。

ズンボは、慣れている、といった顔だった。

「奥の部屋に行きませんか？」

彼女の神社の敷地は広かった。

池には、色とりどりの鯉が放たれている。

二人は橋を幾つか渡っていく。

一際、大きな池が見つかった。

彼女はその近くにいく。

そして、鶏肉を放り投げる。

中には、人一人程の大きさをした、何かが池の奥に潜んでいた。

「彼も含めれば、今の支部は、五名なのですが。彼は一人、と、人間扱いされるのを嫌がるので……。四人と一匹になるのかも……」

「彼は人間なのか？」

「……。人の姿はしていました。今は……」

彼女は辛そうな顔をする。

「もう一人、会って貰いたい方がいます」

彼女は、ゴードロックを誘導する。

「座敷牢みたいになっているんですが……」

しばらく、二人は歩いていく。

そこは、暗い地下室だった。

ズンボは電気を付ける。

「名前は付けて上げてください。私はハク、って呼んでいます」

それは。

檻だった。

動物などを入れる檻だ。

すべすべの肌をした少年が、檻の奥でうずくまっていた。

背中からは、白い翼が生えていた。

彼女は、格子の一つを強く握り締める。

「生体兵器実験をやっている国から逃げてきたらしいんですよ。彼はおかしな教育を施されたのか、こういう“家”じゃないと落ち着かないみたいなんです」

ゴードロックは頭を抱える。

そして、眩暈と吐き気を覚えた。

「彼の背中にあるものは、空の世界を現す美しさなののでしょうか？　彼は光を怖がり、この檻の中に閉じこもります。言葉も発しません」

彼女の感情が読み取れない。……。

「醜いでしょうか？　私達が。ゴードロック様……」

ズンボは感情の籠もらない声で言う。

安易な同情など……求めてはいないのだろう。

「貴方は気付き始めていますね。私が何を食べて生きているのか。病院からの新鮮な肉とは何なのか？ ……此処は、外れ者の中でも、更に外れ者が集って作られた場所なんです。おそらく、私が一番、おぞましい……………」

彼女の瞳は、深い、とてつもなく深い陰鬱を湛えていた。

「年間、数多くの堕胎される者が産まれるわけです。不妊をマトモにせずに、あるいは別の理由で、小さな命は廃棄されます。私はそれを口にしています」

「……………」

「もし、子が出来れば、私はその命を大切に育てようと思います。こんな醜い私でも、めとってくれる方が現れば、ですが……………」

ゴードロックは更に、訊ねる。

「他に何を食べてる…………？」

「悪性の腫瘍。癌化した部位。腐って切り落とさなければならなくなった手足。……人々の悲しみ、苦しみを感じます。私は不幸を食べているわけです……………」

「さぞや辛かったろう……………」

「そう言って下さるだけで、……嬉しいです」

しばらくの間、二人共、黙示していた。

「なあ、もしよければ、俺と外で食事でもしてみないか？ 展望台とかはどうだろう？」

「ありがとう御座います。私は一応、通っている大学では、友達もいなくて、こうやって遊んでくれる方がいないので……………」

大学に通っているのか…………。

ゴードロックは、更に驚いた。

「正常な世界で生きる人達が羨ましいです。メビウス様でなければ、きっと、私達のような化け物を価値あるものと見做しませんでしようから」

彼女はハクに手を振ると、座敷牢の外の階段へと向かった。

2

「以前、フルカネリの遺産を、自宅として使っただけで奴らに狙われたんだ。途中、異次元から、モンスターが大量に入り込んでくる仕掛けみたいだったからな」

ウェディング・ドレスのような服に、黒いビスチェを身に付け、美しい顔をした薄い化粧の男は、腰元まである金色の髪を櫛で弄っていた。

コンピューター・ルームだった。

赤いバンダナを巻いた、男が、コンピューターを熱心に弄っていた。

「僕もフルカネリの遺産を狙っていた為に、栄光の手の別の支部から狙われた。奴らの抹殺対象は、フルカネリの創造物だけじゃなくて、フルカネリの遺産を使う者、狙う者も該当しているみたいだ」

彼は椅子をくるくると回す。

そして、煙草をふかし始める。

「個人的に、ゴードロックって男には恨みがある。ベレト、喜んで手を貸すぜ。俺は戦闘じゃ無力だが、ハッキングとクラッシャー専門の仕事は出来る」

「奴らは何を嫌がると思う？ 親兄弟、この俺が殺してやろうか？」

「……………。クレーターを乗っ取ってしまおう、それが理想だ。奴らは、俺達のような人間が、フルカネリを利用する事を酷く嫌がっているんだ。だから、妨害し、殲滅したがる。ふざけてやる」

†

巨大廃棄金属によって、いくつも壁が作られているクレーター。

窪地になっている為に、金属廃棄物が無い場所は、急斜面の山によって塞がれている為に、此処を出る事は困難だ。

あらゆる場所に、ドローン(無人爆撃機)などが設置されていて、脱出ルートは封じられていた。

ベレトは、その場所を歩いていた。

地面には、地雷やそうでなくても、排気部品の山などでいっぱいだが、サンダルをはいている彼は、特に気も留めなかった。特に怪我もしない。

まるで、物見遊山で、この場所に訪れたような格好をしていた。

初老の傭兵が、彼を呼び止めた。

「おい、クレーターに入ろうとしているのか？」

「悪いか？」

「……………。俺の仕事はクレーターに流刑した奴らを銃で撃ち殺す事だ。俺個人は入ってくる奴らは問題にしない。しかし、門番が許すかな？」

「門番？ 知るか」

「……………一応、言っておくぞ。俺、個人は外部の奴らが入ってくるのは自由だと思っている。しかし、お前が出る場合、お前を撃たなければならない」

「俺に殺されたいのか？」

傭兵は、少し穏やかな口調だった。手を開け閉めするジェスチャーをしている。

ベレトは、そのジェスチャーの意味がよく分からず、少し怒り始める。

「おい、この俺は殺人怪盗ベレトだ。夜の陰の魔人だ。お前、解体されたいのか？」

「……………。ビジネスの話をしよう。俺は傭兵としての顔がある。お前が実力者だってのは、すぐに見て分かった。俺達じゃ束になっても適わない。だが、俺に、そのなんだ、少しだけ渡してくれていい。人は盗まずに何を必要としている？」

「……………。この辺りの紙幣でいいんだな？」

鈍感な性格のベレトも、ようやく、傭兵のジェスチャーを理解する。

そして、彼に数枚の紙幣を握らせる。

「少ないがいいんだな？」

「ああ、面子さえ保ってくればいい」

傭兵は紙幣を一瞬のうちに、懐にしまい込む。口元は愉悦を含んでいた。

「まあいいや。門は何処だ？」

傭兵は、丁寧に場所を教える。

彼は、途中、ベレトに対して、散々、中の人間に対する差別感情丸出しの言葉を吐いていた。いかに、彼らが生きるに値しない命であるか、など。

「俺が許す。好きなだけ楽にしてやれ」

「お前、本当に、中の奴らが嫌いなんだな」

「俺はミュータント共が、特に反吐が出る。それから、俺の友人は国家テロリストに殺された。俺の部下は難民に仕事を奪われている奴らばかりだ。せいせいする」

初老の傭兵は立ち止まる。

「じゃあ、俺は此処でオサラバするぜ。門番と俺達は管轄も、依頼主も違うしな」

そう言うと、彼は鼻歌を歌いながら、ベレトの下を過ぎ去っていく。

ベレトは数百メートル程、歩く。

すると、中へと入る門らしき場所が見つかった。

門番二人は、除染作業にあたる為のスーツに身を包み、銃を構えていた。リクビダートル・スーツとでも言うのだろうか。

汚染物質から、肉体を保護するスーツだ。

ガスマスクらしきものを身に付け、頭から手の爪先、足元まで、隙間なく完全に身体はゴム製に見えるもので覆われていた。

「立ち止まれ、それ以上、近付くと撃つ」

「撃てばいいだろ？ その門を通せ」

門番達は、問答無用で、銃の引き金を引く。

銃弾は、空中で停止していた。

不自然な事に、弾丸は何か命中したように、破損していた。

門番達は、威嚇射撃を止めて、ベレットを殺害するべく銃を乱射する。全て、空中で停止していた。止まった銃を、ベレットはすり抜けていく。

そして、門番二人の銃に触れる。

彼は困惑していた。

「う、う、うご、動かない？」

「命を助けてやってもいい。俺は中に入ってから殺す。そう決めてあるから。お前らはまだ外にいるからな。……質問があるが、お前らはこの中の住民か……？」

門番の一人が、思わず、混乱しながら話す。

「俺達は、中から特別に門を管理する者として、政府から選ばれて、此処にやってきた者達だ。政府から金を貰ってな……………」

ベレットは二人から、銃を取り上げる。

「門は高いな、二十メートル以上ある。しかもご丁寧に粒子鉄線まであるのか」

そして、彼は、地面に足を置く。すると、彼は地面の上に立っていた。そのまま、彼は何も無い地面を階段のようにして歩いていく。

彼はそのまま、空中を地面にして、門の中へと入っていく。

†

「さて、どれだけ壊してやろうか？」

民家があった。

中の人間の何名かは、殺気立っている。

銃で武装しているのが分かる。

彼が入り込んできて、露骨に警戒……、いや殺意を持っている。

「俺は殺したくて仕方が無いんだ。いいよ、やってこいよ」

ベレットは、懐から、二本の小刀を取り出す。

彼の眼は、血に飢えていた。

小屋の一つから、蛇が飛び出してきた。

ベレットは、意表を突かれる。

緑色に光っており、肌や鱗は漂白されたように白く、瞳は赤く、頭が二つあった。

ベレットは、即座に背後に飛ぶ。

蛇は二つに分かれた、赤い舌を伸ばす。

「そいつはラルドって言うんだ。此処の区域の守り神をしている」

綺麗なソプラノの声だ。

子供が出てきた。

ボロボロの服を身にまとっている。

顔は怯えと、哀しみが滲み出ていた。

ベレトが攻撃性を削がれる人種……。自分では無い、別の何かに怯え続けている顔をした人間……。しかも、子供……。

「なあ、あんたに頼みがあるんだ」

「何だよ？」

「あんたの眼はよく分かる。殺人鬼だろ？ 外の傭兵達も同じだよ。ただ、あんたの場合、少しだけ毛色が違うみたいだけど、殺人鬼なんだろう？」

「そうだよ。それがどうした？」

ベレトの声は裏返っていた。

小刀で、首をはねる事に戸惑ってしまっている。意味が分からないからだ……。

「なら、依頼したい。殺して欲しい奴が二人いるんだ。俺達は少しだけ自由を獲得したんだ。でも、奴らは自由を与えてやる、って言って、住民達の多くを、さらっていった。俺達の区画も、もうじきやられる、時間の問題だ」

子供は懸命で、そして、真剣だった。

彼の瞳は、今、此处でベレトの気まぐれで殺されても構わないといった表情をしている、それよりも憎い存在がいるのだ、と。そして、その表情は、ベレトにとっても、もっとも苦手な態度の一つだった。

……殺しても、あまり面白そうじゃない……。

「ベリーアとトゥルーセの二人を倒して欲しい」

子供は、ベレト刃物を持った手を握り締める。

「怪物退治を行って欲しい、奴らは……、本当に人間じゃないんだ……」

†

ベレトが人間を殺害する目的は、自身のアートを創造する事だ。

以前、栄光の手のメンバー達によって破壊された展示場は新たに作っている。

人間の骨を収集して、それを加工する。

そして、部屋に飾り立てる。

それが、彼にとっての至上の喜びだった。

「何で、あんたに依頼したかは、あんたは本物の悪人じゃないって思ったからさ」

十にも満たない子供は言う。

「節穴だな。俺は女を拷問も強姦もする。解体して凌辱する。何人もだ。人の命を何とも思っていない」

「何か目的がありそうだね」

少年は、酒を進めていた。

他の食べ物は、申し訳なくて、客人には上げられない、との事だった。

ベレトは酒を飲む気分にはなれない、と答えた。

「お前には分からないかもしれないが、俺は最高の芸術品を創りたい。その素材が人間だってだけだ。だから……」

「ねえ、聞いて」

少年はベレトの言葉を遮る。

「ベリーアとトゥルーセの二人は、最初、俺達、というか、別の区画の奴らを、高級奴隷にする、衣食住を保障する、って言ってきたんだ。でも、実際にはそうじゃなかった。見方によっては、確かにそうとも言えるかもしれない。でも、対価として、改造手術を要求してきたんだ」

少年は喋り続ける。

「俺達は生きるのは苦しいけど、自分達で人生を勝ち取りたい。この前、ここの裏側にリンゴの木が生えたんだ。放射能汚染塗れで、きっと奇形の果実になるだろうけど。それでも、一歩、進めたと思っているよ」

そして、突然、少年は発狂したように泣き始めた。

ベレトは、彼の挙動が理解出来なかった。

「ねえ、お兄さん。放射能は怖くないのかい？」

「知らん。俺は銃だろうが、この辺りに撒かれていた地雷だろうが怖くも無い。そんなものは、この俺に届かない。能力を何重にも張り巡らせているからな」

「気を付けなよ、放射能は眼に見えないし、臭いも無い。それから、内部に滞留する。適切な処置を行う方法は発明されていない。能力者やモンスターはちょっと分からないけど、少なくとも、俺達普通の人間には対処不可能の毒物なんだ」

少年は訴えるように話続けていた。

「ミュータント達は、放射能によって進化した人類らしい。全貌は分からないよ。だからこそ、気を付けて欲しい。それから、これ上げる。みんな持っている」

ベレトは、変な機械を渡される。

何か、まるで分からなかった。時計や体温計に似ているが……。

「なんだ？ これは？」

「ガイガー・カウンターだよ。危険な場所には近寄らないでね。此処では一時間立ってただけで、死亡する区画だってあるんだよ」

「立っているだけで、一時間で死亡する場所だと？」

さすがのベレトも、それに関しては、強い関心を持つ。

「此処はどんな場所だ？ 俺はある組織の奴らが、此処を探索しようとしていると聞いて、そいつらを返り討ちにする為に、此処に潜入する事に決めたんだ。そいつらは俺の創った芸術品を奪ってブチ壊してくれたからな」

「……………よく分からずに来たのかい？」

「俺には関係無いしな」

「ムチャクチャだね……………」

少年は、薄く呆れたように、それでいて、物悲しげに笑っていた。

「政府の連中は、どうも此処にミサイルか核爆弾を落として、スポーツ・スタジアムを作りたいらしいんだ。あんたは悪人かもしれないけど、この世の中には、あんたが理解出来ない程の悪人が存在するんだよ。あんたは女を凌辱する、って言ったけど、俺達は日々、政府の奴らから凌辱

され続けている」

「俺は人間が屠殺場の豚にしか思えない」

「政府の奴らは、多分、村単位、国単位、人種単位でそんな事を考えている」

ベレトは、苛立ちながら、黙る。

この少年が、一体、何を考えているのか理解が出来ない。

魔人は深呼吸し、心を落ち着かせると、あくまで自分のスタンスのみを話す事に決めた。

「俺は芸術品を創ればいい。栄光の手の奴らがそれを邪魔した。ミュータント共の骨には興味がある。どんな骨格をしているんだろう？」

「ねえ、後はカリス・ビーストに気を付けて、四足歩行の化け物で、口から毒物と炎の吐息を吐く。そして、もう一つ……おぞましい能力を持っている。奴はベリーアとトゥルーセ達の王様である、エーイーリーに忠誠を誓うモンスターで、番犬であり、乗り物らしいんだ」

彼は、ベレトのドレスのすそをつかむ。

どうしても、見せたいものがある、という素振りだった。

男の子が、小屋へと案内する。

「カリス・ビーストの餌食になって、送られてきた人達だよ。エーイーリーが見せしめによく使うらしいんだ」

ベレトは、中の人間を見て、息を飲む。

みな、身体が土の人形へと変わっていた。

どんな攻撃を受ければ、このような状態になるのだろうか？

彼は小屋の扉を閉じる。

「もうお前の話はいい。さっさと先に進ませて貰う」

ベレトは男の子の手を振り払う。

少年はベレトが歩いて向かっていく方角に気付いて、叫んだ。

「あ、そこから先の地区に行くと危ないよ」

ベレトは少年の話に耳を貸さないように決めた。

「レッサー・トロールって、俺達が呼んでいる住民達に会う事になるよ」

猟奇殺人鬼は、しばらくの間、車のスクラップなどが積まれた場所の間を通り抜けていく。割れたガラス瓶なども敷き詰められている。

相変わらず、足にはサンダルを履いていた。

壊れた電子部品などが積み重なるように山になっていた。

地面には尖った鉄骨などが姿を覗かせている。

サンダルのような靴をはき、剥き出しの素足をさらけ出しているベレトだが、そんな事は関係が無かった。地面に何があろうが関係が無い。

突然。

何かの群れが、何処からともなく、姿を現していく。

そいつらは、全身にコブなどが生えて、顔や皮膚が醜く変形した灰色の肌をした住民達だった。彼らは獣の瞳になって、ベレトへと襲い掛かっていく。

……何だ？ こいつら？ 現地住民か？

全身の灰色の肌から、青と赤の血管が脈打っている。

走る速さは、犬程度だったが、人間だったような者達が、四足歩行で走り、歯茎を剥き出しにしていた。中には、女や老人らしきものも混ざっている。

ベレトは、ナイフを一本取り出すと、それを宙に投げて、くるり、と、回す。

かつて人間だった者達らしき怪物の首が、次々と飛んでいく。

全部で何体いたのか分からない。少なくとも、ベレトは数十体は確認した。彼らはベレトが強い脅威であり、勝てないと分かると、すぐに身を引く。

そして、首を切られたり、落とされたりした仲間達の死体へとむかっていく。

そして、彼らは次々に仲間達の死体をつかんで、取り合いをしながら、貪っているみたいだった。

さすがの殺人犯も、この見た目のグロテスクさと、行為に対して、口元を押さえる程の、言い知れない、生理的嫌悪感に襲われる。

おぞましい……。

ベレトは、直感的に、これ以上、進む事のヤバさに気付く。

少年の処に戻る事にした。

気付けば、二千メートル程度は歩き続けていた。

何度か、岩場を飛んだり、下りたりして、少年のいた小屋に戻る。

少年は彼を待っていた。

「おい、何だ？ あいつらは……？」

「放射能で頭に腫瘍が出来て、独自に進化を遂げた住民達……。俺達は近付かないようにしている。見たでしょう？ 仲間の肉も平気で食べていた」

ベレトは彼ら自体は、大して脅威に感じていなかった。

問題は……。

これから先、進んでいくと、一体、何がとび出してくるか予測がまるで分からない、という事だ。こういう場合は絶対に対策を立てなければならない。

能力者同士の戦いをやってきたから分かる。

対策を絶対に立てないと、簡単に死ぬ。

油断慢心をしてはならない。特に自分の性格は、そういう部分がとても強いから、なおさらだ……。

この場所は、このクレーターは、自分が想定している以上に、危険な領土なのだ。

「分かった、分かったよ、なあ、一通り、教えてくれ。お前が知っている、このクレーターの知識をだ。全部だ」

「うん、分かった。喜んで」

ぼさぼさの頭をした少年は、満面の笑顔を浮かべていた。

きっと、話を沢山、聞いて欲しいのだろう。

ずっと、聞いてくれる相手がいなかったのだろう……。

「レッサー・トロールは可哀想な人達だよ。あんただって、しばらく高濃度汚染地帯に入れば、頭が熱くなって、思考能力が停止する筈だよ。彼らはもっと悲惨な形で頭や色々な箇所ダメージを負って、独自に進化を遂げた奴らだよ」

「……………、仲間の臓物も漁っていたぞ、取り合いしていた」

「そういう“種族”なんだよ。もう、人間じゃないんだ」

「そうか」

ベレトは、男の子の自宅にて、ソファの上に座っていた。小汚い場所だな、と思った。だが、マトモな清掃員も少なそうだ。

「正直、俺も腹が空いた。マトモな食べ物は無いのか？」

彼は酒は飲まない、と断った。

「そうだね。何か食べるかい？ もっともどれもこれも汚染されていて、セシウムとか、プルトニウムとかストロンチウムとか色々、身体に溜まるけど。外の世界の人には口に合わないかもしれない」

「知らねえーんだけど、放射能ってそんなに危険なのかよ？」

ベレトは溜まらず訊ねた。

「やっぱり……、事情は分からないけど、貴方は下調べをせずにやってきたんだね。この一帯の汚染数値は年間200ミリシーベルトくらいかな。比較的安全な場所である筈だよ。貴方は外の世界の人だから、言う義務を感じているんだよ。汚染物質を食べると、徐々に放射性物質が堆積していくから、癌や白血病、他のもろもろの病気にかかる確率も増える」

「実感ねえな。毒ガスとかと違って、臭いも何もねえぜ。車の排気ガスの方が、よっぽど気持ち悪い」

子供は、困った顔になる。

そして、必死の形相になった。

何かを伝えたい、けれども、伝わらない、といった表情だ。

「甲状腺癌で半分近くの子供は死ぬ。癌は全身に転移しまくるし。みな、覚悟はしているよ。俺はクレーターの子だ。クレーターで生まれた奴らは、俺も含めて、運命を受け入れている。人は自分の運命を受け入れるしかないんだよ」

「それはお前の言葉か？」

「父がよく言っていた」

……自分以外の誰が死のうが、自分には関係が無い。

ベレトは、面倒臭そうに、少年から、汚染物質の説明を聞いていた。ベクレルが放出量で、シーベルトが被曝量だと丁寧に説明していく。

おそらく、彼の根底には、外の世界の者達に、話を聞いて欲しい部分があるのだろう。

ベレトは、欠伸混じりに、彼の長い話を聞いていた。

ああ、カメレオンの舌よりも長い……。

こんな子供の話なんて、聞いてもらえない。ただ、それでも聞かざるを得ないのは、所謂、”

ヤバさ”を感じ取っているからなのだろうか。

無知は死を意味する。

「おい、ガキ。いいか？ 俺は無政府主義者だ。お前らが敵視している、軍事産業の経済利益とやらにも、興味が無い。此処が絶滅収容所の一モデルだとか、俺には関係が無い。俺は他人の死には、何の興味も無いからだ」

殺人鬼は吐き捨てるように言う。

ぼつり、ぼつり、と。

雨が降り出している事に気付いた。

核の雨だね、と、少年は言う。

ベレトはおとなしく、外を眺めていた。

このクレーターの中は、やはり異常なのだろう。その異常さが分からない……。

「何が食べられる？」

「ウサギの肉はどうか？ 無頭ウサギの肉だけどさ。ねえ、図鑑で見たんだけど、外の世界のウサギは耳や眼があるんだってね」

「……………、おい、マジで何だか分からないから、止めておくぜ」

そして、ふと、彼は思い至って、訊ねる。

「お前……、本当は外で育っていただろ？ なんか不自然だ」

「……………、ははっ、やっぱりバレちゃった？」

「ガキ、お前の名前はまだ、聞いていなかったな。なんて呼べばいい？」

少年は、満面の笑顔を見せた。

「シゼロイ。白蛇のラルドが無二の親友だよ」

そして、少年は語り始める。

外は少しずつ、闇に包まれていく。

「俺の親父は俺が産まれてから、此処を脱獄したんだ。でも、それから数年逃げ続けたけど、捕えられて、此処で公開処刑された。俺も此処に放り込まれた。親父は政治犯として此処に放り込まれて、政治犯として死んだんだ。母親は此処で出会った人だった、母の方は最後は悪性腫瘍が全身転移して死んだよ。俺は生まれて数年間は、世界を見れた。外の世界だよ。安全な食品も水も空気も手に入る。そういう場所だ。さっきは嘘付いてごめん。本当は本来のウサギの姿を見た事もあるし、牛があんなに何本も脚があったり、ニンジンやジャガイモがあんなに巨大でブドウみたいじゃないのも知っている」

シゼロイ……、この少年の言葉は長い。

今まで、誰にも聞いて貰えなかったのだろう。

「放射能に対抗する手段とか無いのか？ 効く薬とか」

「残念ながら、人類が未だに開発していないって聞いている。ミュータントになるとか、モンスターになるとか、サイボーグとかどうだろう？ とにかく人間を止めるしかないって聞いているよ」

「とにかく、化け物になるしかない、ってわけか」

此処にいる人間が、順化して言った姿は凄惨だ。

だが、自分はいくまで自分だ。

だから、自分の思考をする事にした。

彼らの骨を、骨格を覗き見て、並べてみたい……。

ベレトは、クレーターにいる人間全員をバラバラに解体するのに、どれくらいの日にと労力があるのだろう？ というような事を考えていた。

生きた汚物は消毒しても構わないだろう、別に。

少しだけ、気分が高揚してきた。

此処で、何を破壊出来るのだろう？

†

シゼロイからボロ布を渡されて、それを身に纏って、彼からクレーター内を案内して貰った。布で姿を覆い隠すのは、ベレトの容姿が余りにも目立ち過ぎるからだ。

血と腐臭の臭いが、鼻に入り込んでくる。

所々で、レッサー・トロールと住民が呼んでいる者達は、屍を食べていた。どうやら、彼らには縄張りがあるらしくて、そこに近付かなければ襲ってこないみたいだった。

他の場所も眺めてみた。

ドラム缶に火が焚かれて、色々なものが放り込まれて焼却処分されていた。

遠巻きに見ると、色々な構図が理解出来た。

白い肌、黄色い肌、黒い肌、髪の色、瞳の色、色々な人種達同士での縄張りがあるみたいだった。どうやら、この場所においては、縄張り意識というものは強いみたいだった。彼らは時折、街中で銃撃戦を行っていた。

死体は、レッサー・トロールのいる地区へと投げ捨てられる。

どうやら、住民は変異した怪物達と、なるべく共存するようにしているみたいだった。

というよりも、共存の道を探っているように見えた。

シゼロイは基本、自給自足だが、買い出しも行っているらしかった。

此処の地区は、物々交換が基本みたいだった。

どうしても、金が無い者は酷い労働に駆り立てられる。男女共に、売春を行っている者達も多いみたいだった。働けない者達は、必死で物乞いをしているみたいだった。

その反面、物乞いの近くでは、人の肉らしきものが吊り下げられている。

暗い空を見ながら、椅子に座って、ぼうっとしている者がいた。

重い精神病を抱えている者の瞳だった。

このクレーターは、元々、精神病患者を捨てる為の場所でもあったのだろう。

鬱症状の顔で、空を見ながら、幻聴と幻覚に苛まれている者達もいた。推測するに、彼らは、日々、仲間達から、しなびた料理を貰って生かされているみたいだった。眼が見えなかったり、両脚が無かったりする身体障害者もいた。意外にも、そのような者達も、丁重に生かされているみたいだった。

ベレトは少し感心する。

「弱肉強食だけだと思ったら、そうでも無いな。もっとも、仲間以外は敵、って感じに見えるが」

「うん、なんか派閥がとても強いんだよ。此処では略奪も当たり前だから、気を付けてね。それから、良い部分もあるけど、小さな権力を持って、取り仕切っている勢力が日々、変わっていくんだよ。精神障害者や、俺のような子供が殺される勢力が権力を持てば、俺は死ぬと思う」

結局は、住民達の気分次第って事か。

ベレトは鼻を鳴らす。

「約束してやるよ。ベリーアとトゥルーセと言ったか？ 名前、覚えているぜ。殺してやるよ」

「他には関心が無さそうだけど、名前覚えるの得意なの？」

「標的に関してのみ、はな……」

ベレトは、シゼロイの所有物である畑をまじまじと眺めていた。

↑

ベレトは、シゼロイから色々な話を聞いていた。

このクレーターの混沌は、日々、景色のように移り変わっていくのだとも聞かされた。

そして、この少年は、ひたすらに彼に対して、自分の事を知って欲しいみたいだった。きっと、話す人間がいなかったのだろう。何故、こんなに強い好意を持たれているのか分からなかった。

他人の事なんて考えるだけ無駄だ……。

「お兄さん、ベレトさん、貴方、本当に強いんだね」

「そうでもねえよ。俺は負けている。栄光の手から敗走した事があるからな。奴らが此処に来るのを踏まえて、俺は此処に来たんだ。此処がどういう場所かどうかなんて関係が無い」

「人権が無い場所だよ」

シゼロイは笑顔で言った。

「何故笑っている」

少年は頭をぼりぼりと掻いた後に、しばし沈黙して答えた。

「ねえ、お兄さん。苦しい事が起こり過ぎると、悲しい事が起こり過ぎるとね。……………、もう笑うしかなくなるんだ。笑って過ごすしかないんだよ。他の人は違うかもしれないけど、俺はそうなっちゃったんだ……」

ようやく、分かった。

この少年は、死と共に生きているのだ。死が身近過ぎて……。覚悟し過ぎてしまっている。…だから、ベレトの殺意ごときでは、もはや感覚が麻痺してしまっているのだろう。

「俺、お兄さんの事が好きだよ。優しいから」

人懐っこい顔だ。

ベレトは少年の煤などで汚れた顔をまじまじと眺めながら、しばし考えていた。

そして、訊ねる。

「貴様、一体、何を考えてやがる」

「何、って……？」

「一体、何を思い付いたんだって聞いている。貴様とは二日の間、此処での色々な事を教えて貰ったが。貴様自体は俺に対して、一体、何を考えてやがるんだ？」

シゼロイは、本当に困ったような顔をする。

そして、思い切って、言った。

「お兄さんになら、喋ってもいいかな、って。……うん、それ処じゃないよ。お兄さんなら、最初の相手にいいかな、って」

ベレトには、彼が何を言っているか分かった。

ベレトは首を横に振る。……本当に困った。

シゼロイは窓を閉める。

そして、ズボンを脱いでいく。

「見て貰っていいかな？」

「なんだよ……………」

少年のやる事は理解不能だった。

ベレトは、しばし言葉を失っていた。

少年は下着も全部脱ぐ。

「それ、どうなってやがる……？」

ベレトは、思わず、まじまじと、少年の股の付け根を眺めて、首をひねっていた。

「お前はオトコなのか？ それともオンナなのか？ この露出狂がっ！ 何を考えて俺にこんなもの見せやがる？」

「何度でも言うよ、放射能だよ。俺はこういう風に生まれた……、俺もどっちの性別なのか分からない。フリークスだよ……………」

シゼロイは泣いていた。

そして、瞼を指でこする。

「初めて、お兄さんを見た時に思ったんだ。ああ、この人が最初がいいな、って」

「……………、馬鹿じゃねえの？」

「俺は売春宿で働く事を考えている。地区の権力者達に身体を提供する仕事さ」

「何故だ？」

「借金があるからだよ。それも随分と。俺が自給自足が出来たのは、此処の持ち主がかなり溜め込んでいたからさ。汚い仕事で。でも、それも無くなった」

ベレトはやはり嘲笑し、首を横に振る。

「俺は凌辱した女は、殺して作品にする事に決めている。そういうポリシーなんだ。これが俺の美意識だ。俺が強姦するのは、支配の為だ。……なあ、俺はお前を殺害する事に興味が無い。少なくとも、今は、だがな」

「お兄さん、……愛する事を知らないんだね」

「知らんな。俺が歌うラブ・ソングは、そいつが死ぬ事によって完成されなければならない」

シゼロイは泣き続けていた。

「好きだよ。お兄さん、俺を抱いて欲しい」

そう言うと、少年は、ベレトのドレスをめくり、白い肌を強く抱き締める。

ベレトは、彼の顔を軽く蹴り飛ばす。

「やかましい、豚どもに掘られている。俺は女にしか、興味が無い」

少年は……、少女の半身を持つ、両性具有の子供は、とても悲しそうな顔をしていた。

†

「何で、この俺の事が好きなんだ？」

「一目惚れ。お兄さんの美しさが好きになったんだと思う」

「俺の美学は、犯した相手は殺さなければならない。お前も同じだ。犯った後は、合意だろうが、お前を殺害して、解体する。アートにする。俺のこれからにとって、お前は必要だろう。だから、俺はお前と行為に及ばない」

「本当は怖いんでしょう……？ 俺が」

ベレトは黙った。

この黙示に対して、こいつは何を思うのだろう？

「とにかく、俺はブチ殺してくるぜ。愛の詩篇にしてやる。肉片でメロディーを作ってやる。二人の全身を削いでやる。もう、それは本当に楽しいだろうな」

そして、ベレトは人差し指をシゼロイに向かって、突き付ける。

「いいか、俺は放射性物質なんて怖くないぜ」

殺人鬼は鼻歌を歌い始めた。

「もう、今まで何を聞いていたんだよ。……とにかく、ガイガー・カウンターだけは持っていつてね？」

「あー、分かったよ。分かった」

†

ベレトは、少し興味があった。

自分の『マスター・ウィザード』は、放射性物質を防御する事が出来るのかをだ。それから、ドーンの主であるメビウスの能力にもだ。彼女の『ウロボロス』は、どんな物質も遮断すると聞く。光だろうが、熱線だろうが、細菌だろうが、電気だろうが、冷氣だろうが、何だろうが、だ。

マスター・ウィザードという、この力を、極限まで成長させたい。

そうすれば、ドーン中枢、栄光の手を操っている、メビウスを倒す資格が得られる筈だ。

いつかは、メビウスを倒したい。

その野心は、彼の心の底には渦巻いていた。

……リクビダートル・スーツ並には、防御出来るかな？

仮説はそうだ。

自分の能力の成長の果てには……。

最終的には、核攻撃でも防御出来るようになれるのが理想だ。

だが、現状、マスター・ウィザードは、硬い盾程度にしか機能していない。

3

ゴードロックは、クレーターへと入る事を考えていた。

この奥に、エーイーリーがいるのだろうから。

グレート・オーダーとしての使命を果たしに行くのだ。

バーバリアン支部のズンボ。

彼女の事を考えると、胸が苦しくなる。

彼はいつだって、胸が苦しかった。

きっと自分一人では背負いきれないものを、荷物にしてきたのだ。望んで。

それが、自らの宿命だと信じ込んで……。

出来る限りの情報を持って、クレーターの中には入る事になった。

此処には、医療が殆ど存在していない。

マトモな医療を受けられずに、核物質の粉塵や、病原菌、遺伝子組み換え食品などによって、此処の者達が蹂躪されているのだ。此処は世界の廃棄物特区だ。

あらゆるものが捨てられている。

あらゆる、……命が捨てられていつている……。

情報によると、軍産複合体のメンバー達は、此処を平らにして、スポーツ競技場にしようと画策しているらしい。

人間の想像力の欠如は、彼の理解を完全に超えている。

それが、ゴードロックが頻繁に思い知らされる事だった。

そして、自分自身さえ、等身大は懦弱な精神を有している個人に過ぎない。

弱い者を守りたい、を当たり前にしたい。

この世界は餓えている者達を、簡単に切り捨てていく。弱いマイノリティーを簡単に踏み潰していく。

それが生命の本能なのだろうか？

理性よりも、欲望の方が勝るのだろうか？

理想よりも、不条理の方が正しいのだろうか？

人間らしく生きる生き方を模索しなければならない。

戦場に行って、戦場に慣れなくて良かったと思う。

この軍服は勲章でもなんでもなく、罪の十字架として身に付けている。

嫌悪する者も多いだろう。

それでも、彼は退役軍人として軍服を身に纏う。そうでなければ、見えない世界があるだろう

から。

この世界は美しいのだろうか？

何も分からない、自分の戦いは、殺す事や壊す事だけを解決にしたい。

違う可能性を探りたい。

弱い人間、人よりも劣っている人間、多種多様な才能、可能性が認められる社会であって欲しい。人は生まれる場所を選べない、それは否応にも自覚せざるを得ない事だった。

自身の可能性も、選べない……。

……………。

彼の能力では、医薬品を届ける事が出来ない。

あくまで、銃火器限定だ。

応用すればいい。

たとえば、銃器に包帯を巻く。爆薬に医薬品をくくり付ける、そうすると、能力が適応される。

自分の能力で、どこまで銃器と判断されるのか？

たとえば、注射器なども、麻酔銃などと共に小型化する事が出来た。しかるべく相手に渡して、使って貰えばいい。

部品単位にまで分解して、他の武器と接合すれば、医療品などを小型化して持ち運ぶ事が出来る。それはゴードロックにとって、自身の才能への大いなる希望になった。

それから問題となるものは、まず、荷物検査を潜り抜けなければならない。

それは、ハッキングによって可能になった。

何重底にした、いくつかの小型の箱の中に、それらは詰め込まれて、運び込む事になった。内部の人間に届けるのは禁止されている。

だが、権力を牛耳っている側なら違う。

自分も“武器商人”側、そう権力に思わせる必要があった。

表向きは権力交渉と生じて、内部に入る必要があった。

やるべき事は、ただ一つだけだ。

栄光の手の任務は、エーイーリーの始末。

ゴードロック個人の使命は、可能な限り、人々をクレーターの外に出す事だった。

1

この辺りは、トゥルーセが管轄する地区だ。
彼の“家畜”とも言うべき人間達が住んでいる。
シゼロイからの情報を思い出す。
トゥルーセは仮面を被っている。
彼は“宗教”によって、自身の部下と家畜達を統治しているらしい。
ベレトには、さっぱり分からない事だった。

†

「売春宿か」
娼婦独特の仕草というものはある。
こんな荒廃している場所においても、彼女達は、一種、独特な異様な雰囲気を出していた。それは、露出した肌だったり、香だったり、男への視線だったり、立ち方だったり、場所によって多少の違いはあれど、彼女達の行動はあまり変わらない。
肌を多く露出させた女達が、男達の呼び込みをしていた。
ベレトは、姿が女に見えるのか、娼婦達から気にも止められない。
ただ、彼の強い異様さは伝わっているみたいだった。
彼を見て、何かを囁いている者達がいた。
ベレトの方も、女達の姿を眺める。
中には、年の頃、十歳程度の女もいた。……幼児性愛者の為に、身体を売っているのだろう。
「おい、お前、何者だ？」
二人、いや、後ろに五名程の者達が、建造物の上から、ベレトを見下ろし問い掛けていた。二階建ての建造物のバルコニーから、二人が彼を見下し、一人が問い掛け、背後にある部屋の奥に、三名隠れている。
彼らの服装は、僧衣服のようだ。
「お前こそ、何者だよ？ 俺はたまたま、此処に迷い込んだんだ」
「たまたま？」
彼に問い掛けた者とは別の僧衣服のものが、腹を抱える。
「お前は客に見えない。何か別の意図があるんだろう？」
「……………客だぜ」
ベレトは、面倒臭そうに返す。
シゼロイから、何か必要になるだろうと、此処の紙幣を貰った。厚紙を切り取って、ペンで直接、数字が書かれた紙幣だった。
「さっきいた、上等な娼婦を買いたい。それでいいか？」

僧衣服の男達は二人で話し合っていた。

†

ベレトが選んだのは、肌の所々に、アザのある娼婦だった。髪の毛は灰色のようだ。

「貴方、男なのね。わたしよりも美しいわ」

強い香水で隠しているが、皮膚が爛れているかのような異臭がするなあ、と、彼は思っていた。そもそも、この部屋自体の臭気が酷い。

こんな場所で欲情する連中の気が知れない、と、ベレトは心の中でほくそ笑んでいた。

「此処に何しに来たの？」

「此処はトゥルーセってのが、仕切っているそうじゃねえか。お前達は楽しいのか？」

女は、困ったような顔をする。

「トゥルーセの事が知りたい。教えてくれないか？ お前が知っている事、全部だ」

女は苦笑する。

「駄目よ、殺されるわ。拷問されて、殺される」

彼女は陰鬱な顔になる。

「ねえ、さっさと初めて」

女はミニワンピースのスカート部分をめくる。下着は穿いていなく。局部が露になっていた。ベレトは性器の周辺を見る。

「なんだ？ その赤い湿疹は？」

「……………、聞かないで。分かるでしょう……？ ねえ、さっさと済ませて」

「避妊具は必要ないのか？」

「わたしは産めないの。ねえ、冷やかしだったら、帰って。……早く休憩時間を取りたいから」

女は、あらゆる事に失望している声をしていた。

ベレトは。

ナイフを、彼女の喉元に突き付ける。

「なあ、今すぐ死ぬのと、少しだけ祈る時間を考えて、トゥルーセに殺されるの。どちらがいい？」

彼女は、嗚咽を漏らしながら話す。

恨みと恐怖の表情が、ベレトを見据えていた。

「ありがとう。だが、やっぱり殺す。俺が拷問して殺す。お前の骨格が気に入った」

ベレトは有無を言わせなかった。

ナイフは振り下ろされる。

†

地下通路は、強い悪臭を放っていた。

ベレトは、異物に触れないように、空中を歩いていく。

この先の奥には、トゥルーセの館の中へと通じる排水溝へと繋がっているのだ。彼は鼻を押さえながら、道を進んでいく。生活排水の他に、かなり不味い物質も捨てられているらしい。

「汚染によって生まれたミュータントとかいるのかなあ？」

彼は鼻歌を歌っていた。

彼は新たに作った首飾りをぶら下げて、とても嬉しそうな顔をしていた。

奥歯と胸骨、脊髄、顎で作ったアクセサリーだ。

「しかし……、身体の中、ボロボロだったな。放射能か？ それとも別の有害物質か？ 栄養も足りてなさそうだったしなあ。まあ、脊髄は綺麗で良かった」

彼はアクセサリーを愛しそうに撫でていた。

彼女は性病に感染していた。

推測するに、頭にまで進行するタイプの奴だ。

楽にしてやれる、そんな気分だ。

今はとても楽しい気分だった。

地下道の中には、野犬達が溢れていた。

彼らはどうやら、此处を巣にしているみたいだった。

死体が投棄されている場所があった、犬達は、そこに群がっていた。

†

それは、暈だった。

扉の代わりに障子があり、生け花が生けられ、掛け軸が飾られている。ベレトにはよく分からない文字が掛け軸には書かれていた。

ベレトは障子の紙を、ぷすぷすと破って、遊ぶ。

ベレトはとても楽しい気分だった。

最高の気分だった。

どんな相手が出てきても、同じようにしてやろう。そんな気持ちでいっぱいになっていた。

「何者だ？」

声は囁く。

「遊びに来てやったぜ！」

ベレトは、とんとん、と、ナイフの柄で壁を叩く。

「ああ、バラバラにしてやるよ。さっさと刻んでやる、さっさと顔を出せよ」

ずずっ、と。

襖が開く。

一人の男が現れる。

僧侶服のようなものを身に付けていた。

顔には白いマスクを身に付けていた。人の皮を模したようなマスクだ。

明らかに異様な雰囲気のを漂わせていたが、ベレトは楽しそうな表情を止めなかった。

「貴様の名は？」

男は訊ねる。

「ベレト。お前がトゥルーセか？」

白いマスクの男は頷く。

そして、まじまじとベレトを見ていた。

「美しいな。なんとも羨ましい事だ。その心はこの俺のように、ドス黒く汚れているが」

トゥルーセは笑う。

ベレトも、つられて笑っていた。

余りにも、的を射ていたからだ。

白いマスクの男は指を弾く。

奥の部屋から、トゥルーセの兵隊らしき者達が現れる。彼らは僧侶服に身を包んでいるわけではなく、上半身裸で、眼球が無く、まるで悪魔のような二つの角を生やした者達だった。鋭い牙を有していた。彼らは手に、銃火器を持っていた。

「お前の相手などしたくはないっ！」

トゥルーセは、後ろの部屋へと下がっていく。

手下達に、ベレトの始末をさせる事に決めたみたいだった。

異形の者達が手にしているのは、火炎放射器だった。

部屋に炎が盛大に広がる。

畳に火が移る。

「……何を考えている？」

彼は煙が顔にかかり、鼻を押さえる。

「自分の屋敷ごと、この俺を燃やすつもりか？ イカれているのか？」

ベレトの顔から、笑みが消える。

何かのスイッチが押される。

部屋全体が、カラクリ屋敷のように、変形しているみたいだった。

天井から、ガスが散布されてきた。

†

「なんだと、トゥルーセ。お前の処にくせ者が入り込んだのか」

電話を手にして、ベリーアは大欠伸をしていた。

「そうか、そうか。可愛がってやるのか。殺せたら、頭だけはくれないか？ 俺がコレクションに加えたいから」

サメ顔の顔ををしたベリーアは、ギャンブルに熱中する客達を見て、不正が無いか監視している処だった。小さなものは見逃すが、大きな場合は、尋問しなければならない。

ベリーアの配下である、ジュガルジュガリは、頭部の無い女を自らの愛人にしていた。彼はベリーアの頭部コレクションを毎日毎日眺めていて、それに発狂して、自らの愛人に“ヘッド・

レス”という製品を選ぶ事にした。これは人造生命体、アンドロイドだった、彼らは、召使いやある特殊な性癖の持ち主の為に作成された者達だった。

ジュガルは、とても愛おしそうに、頭の無い女に着物を着せて、首の欠落した平たい部分を愛撫していた。

†

「しかし、何でもアリな場所だな」

彼は即座に、逃亡の判断を決めた。

ベレトは、トゥルーセの兵隊達をバラバラにした後に、再び、彼を襲撃する事を考えていた。

しばらく、この辺りには近付けない。

身を隠す必要があるだろう。

彼が解体した娼婦は、ベリーアのアジトまで吐いてくれた。

ベリーアの方は、元々はスーパー・マーケットだった場所を改造して住んでいるらしかった。今は巨大カジノになっているらしい。

ふと。

背後から気配が現れる。

ベレトは、すぐに戦闘態勢に入る。

「なあ、お前は何を探しているんだ？」

一人の低いハスキー声の男が、彼に訊ねた。

「お前は何だ？」

男はライダーズ・ジャケットのデザインをした、皮鎧を身に付けていた。腰に銃を携帯している。髪型を黒いオールバックにしている。首には深緑色マフラーを巻いていた。

中々の美青年だ。

「俺はベレト。自称だが、怪盗、と名乗っている」

「そうか、俺はパラディア。灰騎士と名乗っている」

妙に友好的な男だった。

「貴様、男娼やゲイの類じゃねえだろうな？」

「まさか。俺は女が好きだよ。お前の容姿は限りなく、女に近いけど、男だろ？　ねえ、トゥルーセと戦っていたみたいじゃないか」

「何の用だ？」

既に、彼の能力であるマスター・ウィザードを、周辺に張り巡らせる準備を行っていた。現れた男は、態度によっては、首を落とさなくてはならない。

「トゥルーセとベリーアを始末したいんだろ？　お前、此処の権力者になりたいのか？」

それを言われて、ベレトは鼻で笑う。

「此処に、いつかこの俺を酷い目に合わせてくれた奴が来るんだとよ。そいつはヒューマニストの人間大好き野郎だ。俺はそいつをケリを付けなければならねえ。トゥルーセ達はついでに殺害したいだけだ」

「ついでに、か。それにしても、さっきは、相当な苦戦を強いられたみたいじゃないか。もう、この辺りでは、君を探し回っている」

「お前には関係無いだろ。それともアレか？ お前はトゥルーセの部下か、なら容赦はしねえ、もう準備は整っていい……」

「もしかして、栄光の手のメンバーかい？」

ぴくり、と、ベレトの額が動く。

意表を突かれた。

「おい……、何で知ってやがる……？」

「此処にやってくる許可を取っているそうだ。俺はハッキング技術を有している。あちら側にもそういう技術を有しているみたいだしな。此処にある情報は一通り見るつもりでいるよ」

「お前は……何が目的だ？」

「俺はエーイーリーの秘密を知りたいんだ」

パラディアは、少しだけ、高揚しながら言った。

「奴は“造物主”の作り出した怪物だ。俺はそいつに会ってみる必要がある。トゥルーセかベリニアのどちらからか、エーイーリーに、そして造物主に辿り着くヒントが手に入るかもしれない」

……………ベレトはその言葉を聞いて、思考を巡らせる。

……トゥルーセ、あるいはエーイーリーの部下じゃないのか？

「造物主か。俺は奴の遺跡を使っていた事があるぜ。だから、栄光の手に狙われた。お前も、せいぜい、造物主の奴らの力を悪用して、栄光の手に狙われないようにする事だな」

パラディアは腰元に嵌めている筒状のものを握り締める。

「なあ、ベレト。この俺と組まないか？」

彼の声は、先程よりも、興奮しているみたいだった。

「はあ？」

「組んで目的を達成するんだ。俺はエーイーリーに近付きたい。その過程でトゥルーセとベリニアの二人を始末したって構わない。というか、あの二人が倒されれば、エーイーリーは何らかのアプローチを取ってくるだろうな」

†

「しかし、ベレト。お前は能力は強力なんだけど、どっか使いこなせていない処があるよな」

「うるせえな。俺様は不器用なんだよ」

ベレトは、気にしている事を言われて、腹立たしくなる。

「そんなら、お前はどうか？ お前だって能力者なんだろう？ どんな使い方をしているんだよ？」

「俺は能力者だけど、教えない。味方にだって教えない。お前は迂闊過ぎるよ」

パラディアは、何処か飄々とした態度だった。

「貴様の力はどんなだ？ お前は、遠くから俺の戦いを見ていた。なら、俺の能力を知っている筈だ。お前の能力の方も教えろよ。それが共闘だろ？」

パラディアは首を横に振る。

鼻歌さえ歌いかねない、立ち振る舞いだった。

「力の正体は教えない。味方にだって教えない」

ベレトは、今にも短刀を取り出しそうだった。

「それじゃ、不平等じゃねえか？ 畜生、この俺を舐め腐ってやがるのか？」

「……………舐めていない。お前の力は極悪だ。スコープで観察させて貰った。トゥルーセの悪魔兵二人が簡単に始末された。だからこそだ。だからこそ、俺は自分の力を少しでも教えたくない」

「それじゃあ、信頼出来ない」

パラディアは、少しだけ熟考しているみたいだった。

そして、溜め息を吐く。

「分かった、教えよう」

すらり、と。

パラディアは腰に帯刀した、剣を引き抜く。

それは、光を帯びる剣になっていた。

「これで斬ると、大抵の連中は爆発するように身体が切り裂かれる。それから、…………」

彼はビン、と、弾の入っていない銃の引き金を引く。

それを合図に、彼の背後から、小型の狼のようなものが現れた。

それはオレンジの混ざる赤色で、炎で肉体を形成していた。

「お前を追っている、トゥルーセの部下達なら、こいつで始末出来る」

†

次々と、銃火器を持った、トゥルーセの部下達が、パラディアの操る狼によって、喉を引き千切られていく。マスクに僧服、人間の姿をしている者達が多く、彼らは狼の一噛みによって、首を裂かれて死亡していた。

「流石に、悪魔型の生体兵器化した奴らを仕留めるのは難しい。……、ベレト、お前は凄いんだよ。そいつらを二体も倒した、お前は実力者になれる素質がある」

「ああ、言葉の端々にトゲを感じるな、今の俺は未成熟なのかよ？」

「そうだろ？」

ベレトは、短刀で、この男の首をもぐ事を思考する。

だが、少しだけ、警戒する事にした。

この男は何かを隠している。

ベレトはすぐに分かった。

もう少し、頭の回転が回る人間なら、その隠し事に気が付くかもしれない。

だが、今は敵対するのを止めよう。

流石に、トゥルーセ相手でも苦戦した身だ。

ベリアーも含めて、更に彼らの配下、背後のエイーリーも含めて、敵は強大だ。

パラディアは、ベレトの瞳を覗き込む。

「何か聞きたげな顔だな？」

「何故、俺に味方する？」

ベレトは返答次第では、彼を殺害する事を考えていた。

もし、曖昧な言葉で答えを濁し続けるのなら、こいつは始末するべきだ。

「それは……………」

彼はオールバックの紙に差したヘアピンをつけ直す。

「俺も『栄光の手』から狙われているからだ。俺は多分、お前よりも、もっとストレートに“造物主”と取り引きをした」

彼は不敵な顔をしていた。

ベレトは、それ以上は何も聞かなかった。

そのうち、答えてくれるだろうから。

↑

「このV C X地区が一番、安全だ。俺の知る処では」

パラディアは酒を飲みながら、バーのカウンターに座っていた。

彼はカクテルから、ストレート、どちらでもイケるみたいだった。ジャケットを脱いで、Tシャツ姿になっている。何処か猥雑な性格をしているみたいだった。

「ベレト、お前は酒は飲まないの？」

「……今はいい」

パラディアの友人らしき者達は、盛大に酒盛りをしていた。

「携帯している武器は何も無いみたいですね」

金属探知機などに、引っ掛からなかった。

ゴードロックとズンボの二人は、クレーターの中に入る事になる。

しばらくして、何羽もの鳥達が足首に小さな箱を括り付けて、二人の下に降下してきた。ゴードは箱をポケットの中に入れていく。小型化した、彼の武器だ。

ズンボは使い魔である鳥を手にする。

鳥達は、彼女の手の中に収められて、只の折り紙へと変わっていった。

箱の中には、ゴードロックの武器となる、銃火器、手榴弾などが『リトル・プリンス』の能力によって、小型化されて収められている。

その後。

しばらく、クレーターの中を、二人は散策していた。

強い悪臭が、周辺に漂っている。

しばらくして、ズンボは忌憚のない意見を、彼に尋ねる。

「ねえ、ゴード。貴方、何かやろうとしているわね」

彼女は、少しだけ、彼の暴走を懸念する。

「私達の命令は、エーイーリーを始末する事。此処の住民の避難じゃない」

「……知ってしまって、黙ってられる程、俺は冷酷な人間じゃない。……だが、安易に避難勧告を出す程、粗忽な人間でもない」

彼は迷っているみたいだった。

苦悩している。

「ズンボ。聞いてくれ。俺は辛いんだよ。戦場で何名も仲間を、同僚を、よくしてくれた上司を、可愛がっていた部下を失った。栄光の手に入ってから、仲間を失った……。俺は今、偽善で構わないから、殺人犯に殺された人間のメンタルケアや、フェミニズム運動、性暴力被害、虐待被害、AV出演によるPTSD被害者達の心のケアをする団体に携わっている……」

「貴方が個人的にやっている事は、そうみたいね」

「日々、勉強が足りないのと。しくじり、結果として暴言や不遜な言葉を吐いてしまう事も多い」

「ゴード、人に出来る事は限られている」

巫女は、元軍人の肩に手を置く。そして、少しだけ、強く握り締める。

エーイーリーと、可能ならば、その配下であるベリーアとトゥルーセの二人も始末するつもりでいた。それがメビウスからの命令だ。

だが……。

栄光の手、グレート・オーダーのリーダーは悩んでいるみたいだった。

「此処の者達は放射能汚染につねに、晒され続けているんだよな……」

「そう言うと、ゴードロックはリクビダートル・スーツを脱ぎ始める。
「何を考えているの？」
「此処の住民と同じ目線で、同じものを見たい」
「そう。私もそうするわ。スーツの下は巫女装束だけど、目立たないかしら？」
「俺の軍服で、充分だろうな。小奇麗だし、どうする？」
「流石に、草履じゃ歩きにくいから、ブーツを手に入れてから脱ぐわ。この辺りの通貨は持ってきているし」

†

汚い食堂だった。
壁の表面が剥げ落ちて、苔などに浸食されている。
二人は此処で夕食をとっていた。
料理が運ばれてくる。
ゴードロックは、ビールの瓶を開ける。
ズンボが料理を先に口にする。
彼女は少しでも不快そうな顔をした。
「放射能数値が高いわね。遺伝子を組み替えた製品が入っている。此処の住民はこのままじゃ、フリークスになっていくわよ。既に身体中に病気を持っている人達も多いんじゃないかなあ。それから、この肉は魚と言っているけど、ワニと……、変な変異怪物の肉ね」
「そうか」
ズンボの舌は毒見が出来る。
「俺が食べていいものなのか？」
「……覚悟があるなら……………」
ゴードロックは息を飲み、料理を口にする。
「あ、それから、貴方が開いた、ビールだけど。薬品に不味いものが入っている。瓶の蓋が閉まっていたからって、油断しない事」
「……分かった。迂闊だった」
小さな破壊音が聞こえた。
外が騒がしかった。
何か、抗争が行われているのだろう。
二人は聞き耳を立てていた。
どうやら、住民同士のいさかいらしい。
ゴードロックは、その中に、介入する事に決めた。
目の前で問題が起きている事を看過出来る程、彼は割り切れていない。
「おい、奴らを『井戸』に放り投げてやったぜ。お前達はどうする？」
もう一人の男達が、手に鉄パイプやナイフを持って、いきり立っていた。

「お前達は晒し刑だ。ふざけやがって、俺達の仲間を井戸に放り込みやがって」
今にも、殺し合いが始まりそうだった。
ゴードロックは、有無を言わせなかった。
背後に回り、鉄パイプとナイフを持っている男達の武器を、次々と、叩き落とし、取り上げていく。

男達は突然現れた強面の男を、剣呑な眼で睨み付けた。
「あのなあ、俺達は余所者だが。今、食事中だ。揉め事は止めて貰おうか？」
軍服の男は、眼の前にいる、斧などの農耕道具を手にした男達に告げる。
「あーあ？ 余所者。こいつらはな、金を滞納していたんだよ。俺達はベリーアの使いをしている。この借金漬けどもから巻き上げないと、ベリーアに殺されちまう。……金を出し渋るなら、こいつらの隠し持っている医薬品などをブン取れってさ」
「つまりなんだ？」
「ベリーアは、P地区のカジノを所有者だ。俺達は雇われのボディーガードってわけだ。……拳銃も持っているぜ。あんまり俺達に介入するな、迷惑だ」

「だよな、俺の悪い癖だ」
ゴードロックは、頭をかいた。
「で、こいつらの借金はどうくらいだ？」
ベリーアの使い走り達は、利子も含めた金額を言う。
ゴードロックは、ズンボに訊ねる。
「彼女が払ってくれるそうだ。今すぐ、現金でな」

ズンボは茶袋から、此処の紙幣を取り出して、ゴードロックに渡し、ゴードロックは、彼らにのし付けるように渡す。

「ああ、……………、これで俺達の首が繋がる。ありがとうよ、余所者。なあ、仲良くしようぜ？ 俺達だって、博打狂いの奴らを取り立てるよりも、すんなり金を上納出来た方が、安全なんだ、ありがとうよ」

そう言うと、斧や、拳銃を隠し持っていた者達は、この場から去っていく。
後には、ゴードロックから武器を叩き落とされた男達が、彼に対して手を合わせて拝んでいた。

「お人好しね」
「お陰で情報も聞けた」

†

ベリーアを何らかの手段によって強迫して、エーイーリーとの謁見を許可させるべきか。
それとも、別の手段を用いた方が良いのか。果たして、その手段は有効なのか。
軍人と巫女の二人は、その事について、話し合っていた。
出来れば、余り多くの血は流したくはない。

中枢であるメビウスからの命令(オーダー)による、抹殺対象は、あくまでも、エーイーリー、ただ一人なのだから。その障害となる、トゥルーセとベリーアは副次的なものに過ぎない……。

「ねえ、奇妙な情報が入ってきているの」

巫女は、何かを手に入れてきたみたいだった。

「売春窟とドラッグを扱っている、トゥルーセは、屋敷に侵入されて。彼と、彼の部下達が躍起になって、くせ者を探しているみたい」

「そうなのか？」

「ええ、似顔絵が出回っている。女装した、女のような姿をした、長い金髪の男と……」

そう言って、ズンボは、出回っている似顔絵を、ゴードロックに見せた。

「何者か知らないけど、あたし達が付け入る隙をくれるかもしれないわね。なんでも、トゥルーセの部下達を何名も返り討ちにしているらしいわ」

「こいつは……」

「……………。お知り合い？」

「ああ……………、少しな。何故、こいつが……？」

ゴードロックは、その似顔絵を、まじまじと眺めていた。

†

ゴードロック達は、巨大カジノへと向かう事にした。

住民達の心は荒廃していた。

娯楽に飢えているのだろうか。

みな、数少ない金をマシンに投資していた。

情報によると、出玉操作などが出来る機械が使われている。ある程度の金額まで溜まると、良い暮らしが出来る。そうやって、みなギャンブルにのめり込んでいるみたいだった。

スロット・マシンなどには、何処かで見たようなアニメキャラや、ハリウッド映画のキャラクターなどが絵柄として使われていた。この機械達は、外の世界から廃棄されて、この場所で使われているらしい。

外の世界と同じように、此処のギャンブルの支配人も、胴元のみが儲かるように仕掛けている。そうやって、知識が無い者達、依存症になった者達は搾取されていくのだ。

カジノには、何名ものボディーガード達がいた。

数少ない金を、マシンに吸われて、機械を叩き、唾を吐いている男もいた。ボディーガードの方は、特に気にもせず、その男を眺めていた。

三階に行くと、酒を飲みながら、ルーレットに興じている者達がいた。

一階と二階は、パチンコとスロット・マシンばかりがあった。三階から上に登るには、ある程度の許可がいるらしい。ゴードロックはそれを聞いて、すぐに勘付いた。

だが、おそらく、三階以降にある、ルーレットなどにも何か仕掛けがあるのだろう。

ゴードロックはさりげに、機械を叩いている男を気にとめないのか？ と、ボディーガードに訊ねた。すると、丈夫に出来ているから、あの程度では余り壊れない、壊せば、それはそれで、

その分の借金が、彼に加算されるから構わない、と、ガードは答えた。……そして、ああいう客に限って、更に高額を出してくれるから、つまみ出す事はまず無い、と。

下調べによれば、このカジノは臓器売買業者とも繋がっているらしい。

そして、幹部達は、元自警団のボスなどをやっていた者達なのだという。つまり、エーイーリーの支配される前にも権力があつた者達が、このビルの中でも良い地位にいるのだ。

ガードの中で、一番、古株そうな顔をしている者に、ゴードロックは訊ねる。

「ここらを仕切っている、ベリーアさんに会えないだろうか？」

「何か用ですか？」

「私は“外側”からの派遣員だ。名刺もある」

「少し、お待ちを」

ガードは名刺を隅々まで見た後に言う。

「ええ、ロッキー氏ですね。××工業の××国支部の重役ですね。そちらの女性は？」

「私の秘書だ。祓い師をしている。ビジネス・スーツでなくてすまない」

「構いませんよ。此処の者達より、余程、身繕いが整っている」

エレベーターによって、二人はカジノの最上階へと向かう事になる。

最上階の窓からは、クレーターの街並みが見えた。

どこもかもが、汚らしいスラム街のように見えた。

「私はベリーアです」

サメのような顔形の男が、椅子に座って、煙草を吸っていた。

彼の隣には、銃器を持った男が何名か佇んでいた。

「××工業の者だ。必要な書類を持ってきた」

そう言うと、ゴードロックは、懷から書類を取り出して、ベリーアの机に置く。

ベリーアは書類を見ながら、舌舐めずりをしていた。

「ふむふむ。パイナップル700個。シュガーケーン1200本。ポテトが850。メロンが130個。……ああ、良い値段ですね。いつ頃、届きますか？ 今日中には銀行に振り込んでおきますので」

「四、五日後に発注だ。しかし……、今回はパイナップルの収穫が少なくてね、すみません」

「いえいえ、ポテトの方が良いんですよ。みな好きですから」

ゴードロックと、ベリーアのやり取りを聞いて、ズンボは心の中で悪態を付いていた。

野菜やフルーツの比喻を使っているが、全部、銃や爆弾の事だ。

書類の表記にも、フルーツの名前などが記されている。

ポテトは地雷の事だ。

一体、何を考えているのだろうか。

……………。

パイナップルは手榴弾。

メロンは大型の爆弾だ。

「では、私はこれで」

ゴードロックは立ち去ろうとする。

「ああ、そうだ」

ベリーアは笑顔だった。

ゲスな性根の顔だった。

「ポテトを、後、三千個程、追加出来ませんか？　みな食糧難になると思いますので」

「……本部に伝えておきます」

……………。

約三カ月後には、ミサイルによって、クレーターは平らになる。

ベリーアとトゥルーセ、そして彼らの部下達は、それまでにクレーターを離れる予定だろう。

……地雷は……、脱出しようとした住民達の両脚を破壊する為に使われるのだろう。

†

パラディアの使う、フレイム・ウルフ達は、次々と、トゥルーセの兵隊達を喰い殺していった。

。

「悪魔型をした奴らは、お前が倒してくれないか？」

灰騎士を名乗る、この男は、相変わらずつかみどころが無かった。

敵なのか？　味方なのか？

敵だとすれば、途中で裏切るかもしれない……。

「トゥルーセの怒り狂っている姿が想像出来るぜ。なあ、ベレト、お前が奴の悪魔型生体兵器を倒すんだっ！」

彼は高揚しているみたいだった。

何処か、楽しそうだ。快楽犯的だ。

ベレトも、その部分がある。

だが、面白くないのは、ベレト自身が、彼のネタにされている処だ。

「しかしまあ、俺達が正面から戦ったら、負けないにしても、重傷は負うな、面白くない結果になる」

彼は小さく欠伸をする。

「しばらく潜伏して様子を見るしかないかもしれないなあ」

パラディアはスコープを覗きながら、悪魔兵達の狂乱ぶりを楽しんでいるみたいだった。

「なあ、お前の目的はなんだ？」

ベレトはライダー・ジャケットの男を上から、足のブーツまで、まじまじと眺めて、何処から解体してやろうか、と、そんな事を考えていた。

「エーイーリーに会ってみたいんだ。理由は無いぜ？　俺は自由人だからな。だからこそ、造物主フルカネリには近付いてみたいんだ。エーイーリーは、奴の創造物だ。だからこそ、会ってみたい」

「成る程」

この男は、造物主フルカネリに対して、強い憧憬を抱いているのだ。

そして、それは、何らかの取引をした事に起因しているのだ。

その事に対して、少しでも興味が湧いたが、ベレトにとっては、どうでもよい事だった。ベレトが、本当に憎悪している相手は、ゴードロックと栄光の手だ。

トゥルーセなど、取るに足らない相手に、このクレーターがどうなったって構わない。

ベレトは、核心に迫るような事を聞く事にした。

「お前にとって、造物主フルカネリってのはなんだ？」

ベレトは率直に訊ねた。

「俺の人生の救世主だ」

パラディアは断言する。

彼の瞳の奥には、確かな狂信があった。

「お前、栄光の手の抹殺対象にされるだろうな」

「ああ、そうだろうな」

「なら、俺達は利害が一致しているわけか」

「そういう事だ」

†

パラディアは無邪気に、廃墟の上から、レッサー・トロール達をライフルで撃ち殺していた。ベレトは、それをぼうっとした顔で眺めていた。

一、二キロ離れた先にいる怪物達の頭にも、弾丸の低速も考察して、正確に命中させていた。ただのライフルだ。スコープは付いていない。

彼は自身の腕をベレトに見せて喜んでいた。

「眼が良いんだな。多分、正確に急所に命中している」

「トゥルーセとバリーアの暗殺を考えているんだ、俺は」

パラディアは、更にクリーチャー化した住民達を、一方的に狙撃していく。

「いい考えだ。俺は必要か？」

「奴らは二人共、銃弾に反応する反射神経を有している。戦ったお前が分かるだろう？」

「まあな。しかし、お前程の腕前なら狙撃出来そうなんだけどな」

†

「あいつ……っ！」

ベレトはスコープで、よく知った軍服の男を見た。

「なんだ？ 知り合いか？」

「俺は、この俺は、奴を探しに、こんな場所に来たんだ」

「ほう？」

「殺してやる、解体してやる……」

「まあ、待てよ。お前の敵なら、おそらく栄光の手だろう？　なら、俺の敵だ。加勢してやる。だが、奴らの行動を見張るのも面白い」

3

彼女には名前が無かった。

名前が無く、この世界に落とされた。

” お前”　” アレ”　” こいつ”　そういった呼ばれ方をして、育った。

そういうものとして、彼女はこの世界に生まれたのだった。

ドブ掃除、下半身の世話、あらゆる事をやった。やらされた。

自身が汚物である、という事を彼女は自覚していた。

このクレーターに投げ捨てられた後も、彼女はこういう人生なのだと、何処か諦観したような趣だった。

何の為に、この残酷な世界に生まれてきたのか分からない。漠然とそんな事を頭に過ぎていたが、それを意味化する言葉を彼女は獲得していなかった。

昨日の事だ。

主人であるトゥルーセのお気に入りの娼婦、ヴァーリユドが殺された。

外側の者の手だと聞く。

胸が引き裂かれるような思いだった。

そして。

トゥルーセは、“アレ” といった“名” で呼ばれ続けた彼女の下に現れる。

まるで、神託を託された、神々しい預言者のようだった。

「お前には臭いを追跡出来る力があつたな」

トゥルーセは白い覆面の下で、いつになく、にこやかに和んでいるように見えた。

「ええ、あたしに出来る唯一の特技は臭いをかぎわける事です」

トゥルーセは、優しく、彼女の頭を撫でた。

「よしよし。なあ、お前、少し試したいものがあるんだ。俺がエーイーリーさまから貰った、注入液を試してみたいんだ。モードはどれが良いかな。……………」

彼の背後には、角の生えた大男達が武器を手にして楽しそうにしていた。何処か、その笑いの中に、彼女を憐れむようなものを、彼女は敏感に感じ取っていた。

しかし、彼女は抗う意思など持っていなかった。

そんなものは、彼女の中には初めから無かった。

「なあ、お前。少し食事をしようか。塩漬けのベーコンは好きか？　よく冷えたブドウ酒は飲んだ事は？」

僧服の男は、とても優しくだった。

彼女にとって、トゥルーセは、神のような存在だった。

だから、彼女は、彼の行為に従おうと思った。

従う事こそが、全てを楽にさせてくれるから。

一日半後、彼女は、ある場所に連れていかれた。

そこは、トゥルーセの僧院の地下から向かえる場所だった。

研究室だった。

様々な機器が並んでいる。

カプセルの中には、レッサー・トロール達が入れられていた。

トゥルーセの悪魔兵達は、知能の衰退したトロール達を嘲っていた。

同じ異形になった者故に、選民的な感情が働いているのだろう。

「なあお前、お前には、名前を付けようと思う。お前が姉のように慕っていた、ヴァーリユドは、無残に殺害された。ほら、この部屋の中に収納されている。見せてもいい」

彼女は、あるカプセルを見せられる。

そこには、人の姿をしていない、肉片が浮かんでいた。

だが、肉片の中には、確かにヴァーリユドの顔が浮かんでいた。頭蓋を開かれたらしかった。

「俺はこの娼婦を回収した。無残な姿だった」

悪魔兵の一人が、布切れを、彼女に見せる。布切れには黒い血痕が付いていた。

彼女は、その布の臭いを嗅ぐ。

「俺の兵隊達を何名も殺された。……ふざけやがって、ふざけやがって、畜生……」

彼女は、トゥルーセが、涙を流しているのが分かった。

不可思議な光景だった。

ただ、悔し涙なのだろうな、とだけは分かった。

レッサー・トロール達がカプセルの中で暴れ回っていた。

人の肉を素手で引き裂くこの怪物も、強度のカプセルには瑕一つ付ける事は出来ない。

「なあお前。この俺はとても悲しい。外側の奴らに、俺の兵が蹂躪されたんだ。こんな悲しい事があっては、堪らない」

トゥルーセは、ガリガリッと、面の下の皮膚を掻き毟っていた。

彼の顔の皮膚は、剥がれていた。

かつて、顔に重傷を負った時の傷が今も完全には治らずにいるのだった。

「お前に名前を与えよう。俺は知っている。お前が”能力者”の素質があり”兵器”としての素質もある事をなあ。素晴らしい事だ。本当に素晴らしい事だな。俺はお前に名前を与える者だ。お前はおそらく、親から廃棄されて、此処に流れ付き、不幸な運命だったんだろうが。お前は、今日から、幸福になるんだっ！」

トゥルーセは、狂ったように、電子機器を叩いて回っていた。

悪魔兵達は、主人の狂乱に、少し混乱していた。

「ふざけやがって、ベレトめっ！ 俺の部下達を、可愛い部下達を沢山、殺しやがって。僧侶達も……、信仰に厚い写経者だったのにっ！ 先程も、随分と死体を転がしてくれたじゃねえか。エーイーリーさまに、ベリニアに対して、面目がたたねえ。なあ、お前、そして我らが兵隊達、ふざけやがっているよなああああああああああああああっ！」

トゥルーセは指先で、何かを行った。

電子機器が音楽を鳴らすように、破壊されていく。

「ト、トゥルーセさま、お気を確かに」

完全に乱心していた、主人を、悪魔兵達が必死で抑え込んで、腕に鎮静剤の注射を打っていく。トゥルーセはぐったりと、うなだれる。

しばらくして、ぼうっとした眼で、白い面の男は、天井を眺めていた。

「おい、お前。お前の事をこれから”捕食者”と呼ぼう。そう決めた。それがお前の名だ。これから、エーイーリー様の意思をお前が継ぐのだ。お前には可能性がある。お前には希望がある。はは、はははははっ！」

トゥルーセの眼は血走っていた。

捕食者と名付けられた彼女は、その狂乱をただ、わけも分からず、眺めていた。

ただ、もうすぐ、自分の人生は変わってしまうのだろうか、と思った。今まで、自分に酷い事をしてきた男達や、娼婦仲間、薬物の売人、彼らを好きなだけ嫌えるのだ。

自分の人生が終わる……。

漠然と、来世が始まるのだと、彼女は予感する。

トゥルーセは、捕食者と名付けられた彼女に図鑑を見せる。

「何が良い？ 選ばせてやろう。お前が好きなデザインになるんだ。先程、嗅いだ臭いの持ち主を抹殺するのが、お前の使命だ。それが終われば、お前の好きにするがいいっ！ そうだ、なんなら、このクレーターの外に出てもいい。お前は憎いだろう？ この世界が、それは素晴らしく、崇高な感情なんだっ！」

図鑑は、動物図鑑でも、昆虫図鑑でもなかった。

怪物図鑑……。

様々な神話のモンスター達が載っている。

トゥルーセは、瓶を取り出して、中に入っている錠剤を、一度に口に流し込む。悪魔兵達は蒼褪めた顔をしていた。

「ト、トゥルーセさまっ！」

「それはどう見ても、致死量ですよっ！」

「止めてくださいiiiiiiiiiiっ！」

トゥルーセの眼は、恍惚としていた。

そして、ふらつきながら、酩酊し、機材に身体をぶち当てていく。

そのまま、トゥルーセは地面に倒れる。

彼女が図鑑の中で指差したものは、ドラゴンだった。

それを知って、朦朧としたトゥルーセは、満足そうな顔をしていた。

「素晴らしいアイデアだ。やはり、私が見込んだ通りだった。お前のセンスは良い。なあ、みなもの者、出来るだけ、そのデザインに近付けるように手術を施すんだ。遺伝子注入剤を使え。至上の傑作へと改造してやれっ！」

そう言うと、トゥルーセは意識を失った。

「トゥルーセさまの胃洗浄が終わった」

「あの方は薬物依存だ。以前はしきりに、ロケットに乗って宇宙を遊泳してきたと、うわ言のように話していた。他にもそこにいない人物に対して、何時間も説教しているのを、わたしは見た事がある」

悪魔兵達は、布団の中に入り、点滴を受けているトゥルーセを見守っていた。

僧侶達は、護摩壇を焚いて、トゥルーセの薬物中毒が治癒するように祈祷を始めていた。

僧兵達の王、トゥルーセは一向に意識を取り戻さない。

もう駄目かもしれない、と、僧兵の一人が嗚咽を漏らした。

「しかし『捕食者』、プレデター・サーヴァントは、クレーターの上空を飛び続けているぞ。今は“標的”が刷り込まれているが、いつ、我々に被害が飛び火するか分からない」

悪魔兵の一人が、おぞましそうに語った。

†

愛したり、愛されたりする、という感情を、彼女は生涯、持つ事は叶わなかった。彼女は滅びの使徒として、この世界に新たに生誕した。

聳え、高く見下ろす空の上で。

高いビルが聳え立つ、街並みだった。

栄光の手・グレート・オーダー支部の花鬱と、栄光の手・バーバリアン支部のガス・カル、そして、ゴードロックの友人カディアは、あるビルの一つに入る事になった。

その人物は、面会に対して、快く受けてくれた。

椅子に座っていたのは、髪を短く刈り、ぴっちりとした背広姿の男だった。

「此処は更なる建設を予定しているんですって」

そう言って、C電子工業、ウェブ会社の若社長である、ウキヨは、柔和な笑みを浮かべていた。

「僕、投資しているんですよ。原発には、ね。あ、それと、僕の創ったSNSが今、大きな収益を上げていて、広告代理店からよく仕事の依頼が入ってくるんです」

「はあ、成る程。私もそのビジネスに乗っかりたいですね」

「いつでもご参加をお待ちしておりますよ」

カフェテラスだった。

三人の男達が、コーヒーを手に使っていた。

武器商人であるウキヨと、ゴードロックの友人であるネゴシエーターのカディアは、他愛の無い雑談を行っていた。

部屋の外には、それぞれのボディー・ガードが待機していた。

ウキヨ側は、腰元に拳銃を押さえているスーツ姿の男が佇んでいた。

栄光の手側は、花鬱が赤い着物姿でキセルを吹かせていた。

ビルの62階だった。

此処のテラスからはプールが見え、ブランド物の水着を付けた男女が遊泳を楽しんでいた。

ウキヨとカディアの二人が、和やかに雑談をしているのを見て、面白くないと思ったのか、同席していたもう一人の男は話に割り込む。

その男は、ギラギラと、他人を見ていた。眼の奥に深淵を抱えていた。

「率直な意見なんですがあ。ウキヨさんは原子力プラントに関してどう思われます？ 俺は火力発電の方がコスト的に優秀だと思いますが」

バーバリアン支部のNO2である、ガス・カルは、単刀直入に訊ねる。

この男は、支部において、もっとも危険な存在だ……。

「ガス・カルさまですね。僕は貴方の著作を読んでおります。U大学経済学部卒業。元エコノミック・ヒットマンで、その後に、 коммуニストに転向したと……」

「まあ、今は更に裏稼業をやっておりますよ」

五十に手が届く男は、二回りも下の男に、くだけた口調で、牽制するように話し掛けていた。

「僕は原子力は必要だと思います。何よりも儲かりますし、各国が核武装も出来る。我々にとって良い事ばかりですよ」

「TL国の原子力発電所のメルトダウンと、SI国のメルトダウンに関してはどう思われますか？」

ガス・カルは敬語だが、何処となく言葉に獐猛さを孕んでいた。

「大丈夫ですよ。制御可能ですし。石棺で封じられる。それに抗癌剤の開発も行われていますし、それで更に医学界が儲かる。良い事づくめですよ」

「あー、そうか。とにかく金儲けが好きなんですねえ。市民が何百人、何千人単位で苦しんでいるですよ。暴動も起きている」

ウキヨの言葉にも、心にも感情が見えない。

ただ単に、事実を伝えているだけのようだ。

カディアは心の中で、冷や汗をかき始めていた。

あまりにも、ガス・カルは、露骨に聞き過ぎる。聞き過ぎている。

此処から、帰れるか分からない……。

いつ、銃の引き金が引かれてもおかしくない……。

「全然、問題ありません。それらの国の政府は、我々が資金を投じれば、メディアを使って汚染を隠してくれましたし。市井の人達が僕達を憎悪する事なんてありませんよ。その国の政府や首相を憎みますから。とても良い事尽くめです」

ウキヨは、まるで一人息子の誕生日パーティーを祝うかのような口調で、話を続けていく。

それを聞いて、ガス・カルは大笑いを始める。

そして、砕けた口調になる。

「あー、そうか。俺はなあ、貴兄のような人間は好きだぜ。俺と同じような人でなしの臭いがしてなー」

「まあ、苦しむのは、我々じゃありませんから。とても良い事です」

カディアは、心臓が鳴りっぱなしだった。

この二人は、本当にまったく、心を微動だに動かしていないのだ。

人間を何とも思っていない。……あるいは、自分よりも下の階級の存在があって、当然であるという思考を持っている。……サイコパス。そんな言葉が頭に浮かんだ。

カディアは、人の心の感情の動きを読む能力を持っていた……………。

この場にいる者達の心境が、ダイレクトに彼の脳の中に、周波として、あるいはイメージの映像として入り込んでくる。

「僕の方から貴方にご質問があります。何故、政府公認の殺し屋から、共産主義革命のテロリストに転向したんですか？」

「社会的に抹殺したり、毒殺したりするよりも、爆弾で殺す方を気にいったからだよ。堂々と銃や手榴弾を持つ方が、俺の性分にあった。その快樂に比べれば、どっち側に付いたって、どうでもいいじゃねえか。俺はより楽しめる方に付く。それだけだ」

そして、ガス・カルは、直球の言葉を口にする。

「クレーターの件について、噛ませてくれないか？」

ガス・カルは訊ねる。

「ああ。すみません、そっちの方はもう”連合”の方で、決まってしまって。240. ……いや、700とも聞いたかなあ？ 実験用も含めてミサイルとナパームで窪地にする予定なのですが

。連合がさっさと決めてしまっって、汚物洗淨する事になったんですね。実は、僕も噛みたかったんですが。……僕の方では、クレーターを亡ぼした後に用意出来る、スポーツ選手を探せなくて……………」

「そうか、それは残念だったな」

ウキヨは小さく溜め息を吐く。

「正直な話、面白くないですね。まあリアルタイムで花火の映像は見るつもりですが。僕は投資出来なかった」

「なあ……、情報によると、今、クレーター内部で抗争が起きていて、銃火器が大量に必要らしい。正直に話そう。俺の仲間は、クレーターの住民達に武器を売っている。それに関してはどう思う？」

ウキヨは眼を輝かせていた。

「ああ、面白いじゃないですか。儲けられる時に、儲けるべきです。……もしよければ、僕も介入して良いですか？」

「正気か？」

「ええ、もちろん」

「世界中の大企業、経済団体連合を敵に回すかもしれないぞ？」

「面白いじゃないですか。僕の会社を大きくするビジネス・チャンスですよ！ 是非、やりたいなあ。なんなら、クレーターの方々に、核兵器を売ってもいい」

「やはり、貴兄は俺と似ている。”面白き事なき世を面白く”。クレーターを平地に耕してやるのも良いが。それじゃあ、瞬間の快樂だもんなあ。残しておいた方にメリットがあると、俺も踏んでいる。なあ、俺はクレーターの奴らと経済連合の社長達の戦争の方を見たいんだ。そうすれば、もっと大きな花火が上がるかもしれないぜ？」

「ああ、とても良い事ですね。処でご不快でなければ、今、HG国内での内戦の映像を見ませんか？ ドローンに取り付けたカメラからリアルタイムで観れると思うので」

「是非、観せてくれ！」

カフェテラスの天井付近に付いてあった大型TVのスイッチが入る。

そこでは、軍事ヘリから大量のナパームが市街地に撒かれている処だった。

住民達が火達磨になり、蜂の巣にされていた。

「あれは、僕の会社が支援している部隊なんですよ」

「良い事をしているじゃねえか。ほら、あの地面に這いつくばっている奴らの顔を見ろよ、旧装備で最新式に勝てると思っているぜ」

「愚かですね」

「ははっ、愚かだな。さっさと諦めちまえばいいのに」

ガス・カルは濁った笑い声を上げていた。

歓談は和やかに終わった。

カディアは、他のみなに见えないように溜め息を吐く。

「処で、ガス・カルさん。貴方は癌に侵されて、転移も見つかっているとか……」

「煙草のやり過ぎでな。医者にはかからないよ。俺が最近、入信した宗教によると、病気を自然

の恩寵と捉えて、ありのままに任せるっていう戒律なんだ。だから、その宗教のルールに従って、俺は癌を治療しない。病気で天寿をまっとうするつもりだ」

「そうですか……、僕としては痛ましい事ですが……」

ウキヨが、本当に、ガス・カルの心身を労わっている事に、カディアは気付く。……この両面価値を、彼はまるで理解する事が出来なかった……。

……初めて会った、敵かもしれないガス・カルの命は、この若社長にとって、他国の、あるいは自国の数百万の市民の命よりも、はるかに重いのか……？

↑

カディアは蒼白な顔をしていた。

「まあ、正義なんかじゃ、世の中は動かないって事だな」

禁煙中のガス・カルは、レモン味のキャンディを口の中に放り込む。

「わたしは、時折、貴方達のような人種を見ると、首をくくりたくなってきました……」

「気にするなよ。短い人生、もっと楽しもうぜ？」

元殺し屋の、元革命家は不敵な笑みを浮かべていた。

花鬱は、相変わらずキセルから煙草を吹かして、携帯灰皿に灰を落としていた。

紫煙が灰色の空に溶けていく。

「本当に此処はバベルの塔ばかりねえ」

花鬱はふうっ、と、煙を吹かす。

巨大な高層ビルが大量に並んでいた。

1

「ベリーアには、エーイーリーの名前は迂闊に出せなかったわねー」

「ああ、もう一度、奴に会って、交渉を進める必要があるな」

ゴードロックは、軍帽を脱いだ後、ビールをあおっていた。

「お前は酒は飲まないのか？」

「私は焼酎がいい。此処には無いみたいだし」

二人はバーのテラスにて、話し合っていた。

二人の会話は、住民達に筒抜けだったが、誰も聞き耳を立てる者はいない。住民達にとっては、意味の無い情報なのだろう。

ベリーアとの交渉を終えた。

数日後に、武器は調達出来るだろう。

自分はクレーターの住民達が武装する事を考えている。そして、彼らが外にいる傭兵達の包囲網を突破出来れば僥倖物だ。

このクレーター自体の存続を許してはならない。

それは果たして正しい事なのだろうか？

「なあ、俺は正しいのかな？」

「……………。迷っているのね」

「ああ、分からない。解決方法が分からない。どうすれば良いのだろうか……」

未だ、答えは見つからない……。

ベリーアに届けたものは、この街の武装勢力達に行き渡るだろう。……だが、それも失敗に終わるかもしれない。ベリーア個人は此処に留まるだけに終わるかもしれない。……なら、ゴードロックのやった事は、このクレーターという社会システムによって廃棄された場所において、なお更に酷い格差社会を強化させるだけの行為に過ぎない。

だが、ベリーアと交渉する事によって、エーイーリーの信頼を勝ち取れる。

ベリーアを通じて、ゴードロックの事は、既にエーイーリーの処に向かっている。

自分の意思によって、行動した事の責任を果たす為には、更に、行動するしかないのだろう。

「やはり、エーイーリーと会う必要がある……」

そう、このクレーターの王である、エーイーリーと会わなければならない。

調査は終えている。

ベリーア個人は教えてくれなかったが。

住民達からの聞き込みを行い、エーイーリーのいる場所は調べ終えている。その事に対して、ベリーアはゴードロックに不信感を抱いていない。

何故なら、エーイーリーの場所は、多くの住民が知っているのだから……。

「後はリクビダートル・スーツが二着必要ね」

「ああ、それも注文を終えた。到着を待っている」

「スーツはどれだけ汚染物質を、防備出来るのかしら？」

「完全では無いだろうな。だが、最新式らしい。俺達はこの指令を終えた後、病院で癌検査などをする事になるが……。覚悟は必要だろうな……」

「此処に来了時点で、覚悟は出来ているわ……」

エーイーリーは、クレーターの最奥に住んでいる。

数多くの住民が知っている、日々の生活の雑談にも、その場所の情報は入ってくる。

そう、その場所は、ある種、この人間廃棄場の象徴的な存在にもなっていた。

数十秒立っているだけで被曝死する、放射能汚染地帯。

そんな場所に、エーイーリーは宮殿を構えていた。

汚染耐性があり、口から、人間を土へと変える吐息を吐くカリス・ビーストという巨大な化け物が番犬をしているらしい。

ミュータントの大群も巣を作っているらしい。

それだけの危険区域に住んでいる為に、誰もエーイーリーに反逆を企てようとは思っていない。だからこそ、みな、このクレーターの王の居場所を知っているのだ。

「それにしても、此処は慣れないな」

「私もね、でも、此処の異常性に麻痺してくるんでしょうね」

当然、此処も、程度の差こそあれ、放射能汚染区域だ。

つねに、相当数のベクレルの放射能が漂っている。

食べているものも、飲んでいるものも、核廃棄物レベルの汚染物なのだ。

†

ベレトはパラディアから借りたスコープを手にしていた。

「巨大カジノで何をやってきたんだろうな？」

ベレトは、パラディアに訊ねる。

「ああ、あそこの頂上にベリーアが住んでいる。交渉事でも進めたんじゃないのか？」

つい、昨日の事だった。

バーのテラスにて、標的である二人は酒を飲み、夕食を口にしていた。

ベレトは、スコープを相棒に渡す。

彼からは、相当数の憎悪が滲み出ていた。以前、ゴードロックのせいで、ベレトは自ら片腕を切断し、能力によって接合し、家を破壊された事がある。それを忘れた事は無い。

「今だな」

先に口にしたのは、パラディアだった。

「ああ、今だな」

ベレトも、同じように口にする。

パラディアは楽しそうだった。口笛すら吹いている。

「俺は奴を殺しに行くぞ」

「隙を見て、援護する」

殺人鬼は、長めのナイフを取り出す。

ベレトは崖を降りて、走りながら、手にしたナイフで、クレーターの住民達の首筋に切り込みを入れて回る。ボロボロ布を纏った中年男の首が飛び、売春婦の上半身と下半身が分断され、皮膚が変色した老人の臓物がこぼれ落ちる。彼らはしばらくの間、ベレトの“命を固定する能力”によって、“死ねず”に、破壊された肉体のまま、自分に起こった事態を理解出来ずにいるみたいだった。能力の効果は自然と解ける為に、彼らはいずれ死ぬ事になる。

パラディアも便乗する形で、バイクに跨りながら、腰元から取り出したビーム・サーベルによって、クレーターの住民達の首をはね飛ばしていく。

このライダー・ジャケットの男も、愉快犯的な無差別殺人鬼の素質があるみたいだった。

そうやって、二人は殺戮を繰り返しながら、突如、軍服姿の男と、巫女姿の女の前に立ちはだかった。

「久しぶり、軍人野郎、殺しに来た」

ベレトは、血塗れのナイフを舐める。

ゴードロックは、驚いた顔をしていた。

「お前は……………」

突如現れた訪問者に、標的は言葉を失っていた。

†

ベレトは何故か、切り離されても、動き続ける舌や眼球や心臓を手の中で転がしながら、怨敵へと、その中の一つを放り投げる。

それは、未だ動き続け、何かを喋ろうとしている少女の生首だった。

ゴードロックはバスケット・ボールのパスのように、それを受け取って、数秒の間、困惑し、そして激昂し始める。

猟奇殺人犯は、せせら笑っていた。

ゴードロックは生首を静かに地面に下ろす、少女は混乱していた、次第に発狂の表情へと変わっていく。未だ、生きている。……死ねない。死ぬべき筈が、死ねない……。

「ベレト……………っ！」

マスター・ウィザード、それが彼の能力だった。

あらゆるものを空間に固定する。

そして、命も、死にゆく筈の命も、終わるべき苦痛も、彼の能力によって“固定”する事によって、維持され続けるのだ。

「ベレト、俺はお前を“悪”として、その象徴として、決して赦す事が出来ないんだ。俺は、お前を始末する事ばかりを考えてきた」

軍服姿の男は、声高に叫ぶ。

少しだけ精神のバランスを崩しているかのようだった。

ベレトの顔を見ると、ありとあらゆる怒りがこみ上げてくるのだろう。

「はあん？ 愛の言葉をありがとう。くくっ、嬉しいな、嬉しいよ？ なあ、軍人崩れ野郎、テメエは戦争で人を殺してきたんだよな？ 何故お前が良くて、俺が悪い？ 俺が悪でテメエらは善人なんだ？ 俺には理解が出来ねえ、言ってやるよ、テメエは鏡を見るように、俺を殺してえんだ、愛しい愛しい自分の顔を塗り潰すんだ、鏡の自分に接吻するようなものだぜえ？」

猟奇殺人鬼は哄笑する。

「ゲスが。クズがっ！」

「お前自身も、本当はそうかもな？」

くるくる、と、美しき猟奇殺人鬼は、小刀を回していた。

軍服姿の男は、声にならない慟哭を上げて、拳銃の安全装置を外す。

「『リトル・プリンス』」

「『マスター・ウィザード』」

お互いに、自身の能力を行使する。

ゴードロックは、アサルト・ライフルを何処かから取り出していた。

対する、ベレトは、空中の何も無い空間に、小刀を置いていく。

クレーター。

そこが、両雄の決戦の舞台になる事になった。

周りの者達は、二人の異様な雰囲気飲まれ、観戦を決めようとする者と、巻き添えを食らわないように、その場から逃げる者の二つで分かれた。

ゴードロックの方は、そんな観客を見て嫌そうな顔をしていた。

「互いに全力で戦おうぜ？ 殺し合おう、愛し合おう、抱擁するんだ。この俺は以前よりも、より自身の能力を使いこなせるようになっているぜ？ つまり成長してやがるんだな！」

「俺も貴様を始末する為に、全力を持って挑むっ！」

ゴードロックは、アサルト・ライフルをベレトのこめかみに向ける。

殺人鬼は露悪的に笑っていた。

「そんなオモチャじゃ、この俺を殺せねえよ！」

ベレトは、小刀をくるくると回していた。そして、ゴードロックとの距離を測っているみたいだった。どの距離で踏み込めば、致命傷を与えられるのか、と。

軍服の男は、何か種のようなものを空に向かって投げる。

それは、彼の手を離れて、元のサイズへと戻る。

グレネードだった。

「みな、離れろ。俺はこいつを……殺すっ！」

ゴードロックは叫ぶ。

†

グレネードが爆発する。

ベレトは無傷だった。彼は嘲笑っていた。

二人共、牽制し合っていた。

グレネードの爆発と共に、周辺にいた者達は一斉に、この場から遠ざかっていく。ゴードロックが爆発物を投げたのは、むしろ、それを目的にしていたのだろう。

一体一の戦いにしたい……。

周りを巻き込むわけにはいかない……。

ズンボと。

パラディアの二人は。

いつ、二人に加勢しようか、考えている最中だった。

そして、互いの存在を認識していた。

ズンボは指先で印のようなものを空中に描いていた。

パラディアはビーム・サーベルの柄に手を掛けていた。

一対一。

その均衡がいつ崩れても、おかしくない。

特に、パラディアは、今すぐにでもフレイム・ドッグ達をけしかけたかった。

彼の方は、ズンボを眺めて嘲笑の言葉を投げ掛ける。それは風によって掻き消される。ズンボは彼を睨み返す。

数分が、数時間にも感じられた。

だが。

思いがけない形で、その均衡は崩れ去った。

それは轟音だった。

雷鳴にも似ていて、地響きにも似ていた。

高い建造物にある尖塔の一部が破壊され、転がり落ちていく。

上空から、何者かが舞い降りてきた。

†

至近距離まで迫って、アサルト・ライフルの弾丸がベレトの左腕をかすめる。血が流れる。同時に、ゴードロックの両脚にベレトの攻撃が通り、ゴードロックは両膝から鮮血を噴出させる。左腕も軍服が切り裂かれ、出血していた。ベレトは楽しそうだった。ベレトは腕から血が流れ続けていたが、発射された他の弾丸は全て、マスター・ウィザードによって固定された空気の盾によって防がれていた。

「俺の方が早いっ！」

ベレトは本当に楽しそうだった。

もうすぐ、憎み続けた敵を殺せるのだから。

だが。

即座に、二人は攻撃を中断する……。

ベレトは、それを視界に入れて、遅れて、ゴードロックはその羽ばたきの音を聞き、啞然とし

てしまったからだ。ゴードロックは、ベレットを警戒しながら首を左右させ、背後から迫りくる、それを見ていた。

それは、巨大なコウモリのような姿をしているように見えた。

口元は、ピラニアのように見えたし、トカゲのようにも見えた。

背中も、確かにコウモリだった。

六つ程、翼があった。

翼は、人の腕のようにも見えた。

尻尾は、魚類だろうか。あるいは爬虫類だろうか。

四つの脚は、肉食獣のように見えた。

合成獣キメラだ。

生体兵器。

実験によって人工的に生まれた産物だ。人間を素材にする事も多い。

そして、不自然なまでの進化を遂げている奇形物だった。

異様な光沢を放つ尻尾を振るう。

それに命中し、また、建造物の一部が倒壊する。

腕の一つが住民の一人を握り締め、握り潰し、獰猛に口の中に放り込んでいく。

「あれ、ドラゴンじゃねえ？」

ベレットは呆けたような口調で、ゴードロックに訊ねる。

「そうなのか？ もう少し、美しい姿形をしていた筈だが」

「昔の絵画では、醜悪に描かれていたんだよな。それに似ている」

「俺が見ていたコミックでは、もう少し、格好良いデザインだったんだがな……」

「知るかよ……………」

二人は、半ば呆然自失の顔で、つい一分前くらいに互いに敵意を向けていたが、今は、即座に思考を切り替えていた。

二人共、その姿の凶悪さに、本能的な感情から畏怖を覚えてしまったからだ。

「ベレット、提案がある」

「何だ？」

「俺はお前を殺したい。お前も俺を殺したい。だが、アレはどうだろう？ 俺達を皆殺しにしたがっている。共闘とは言わない。なあ、停戦しないか？」

「……………、提案に乗る、……っっていうか、そうするしかないだろ」

優勢であるにも関わらず、ベレットはあっさりと、敵の提案を承諾する。

本能的に、マトモに戦って勝てない相手である事を、二人共理解していた。そして、何らかの手段によって、相手をドラゴンの餌食にするという戦略もありえない、と。

「ベレットッ！」

「ゴードロックッ！」

二つの声が唱和する。

ズンボは、背後から召喚した鬼の腕によって、ゴードロックを捕まえる。

パラディアは、バイクを駆らせて、ベレットを背中に乗せていた。

空を飛ぶ、巨大な生体兵器は、その口腔から、火炎放射の吐息を吐いていた。辺り一帯が、炎の渦に包まれていく。

爆風と、建造物の破片が、辺りに飛び散っていた。

ベレットは『マスター・ウィザード』で。

ズンボが鬼の腕によって、それぞれの相棒の肉体を守っていた。

その巨大な怪物は、地面に降下していくと、大地ごと、地を這う住民達を貪り喰らっていく。知性の類は感じられない。ただ、喰い、破壊する為に、そこに存在しているかのようだった。

「どうやら、お前を追っている。なんなんだ？ あれは？」

パラディアは訊ねる。

ドラゴンも、別ルートに逃げたゴードロックとズンボの二人ではなく、明らかにベレットとパラディアのいる方角へと向かっていた。

「知らねえよ。だが、トゥルーセの刺客なんじゃねえの？」

「お前を殺す為なら、この辺りの住民を巻き添えにする事を何とも思っていないぞっ！」

パラディアは、更にバイクの速度を上げる。

グロテスクな姿の空飛ぶ怪物は、炎の吐息をまき散らしていた。

熱線によって、クレーターに住む人々の全身が溶けていく。

怪物は、人々を建物や地面ごと、貪り喰らっていた。

熱い、助けて、といった悲愴の声が響いていく。

怪物は容赦なく、焼かれていく人々を喰らっていった。

肉の焦げる臭いが立ち込めていく。

そして。

怪物は、背中から、光る煙を吐き出していた。

それが合図となって。

身体中に、腕を大量に生やした、元々はレッサー・トロールと思われる奇形のモンスター達が、斧や火炎放射器を手にして、ベレットとパラディアの下へと向かっていく。奇形のモンスター達の皮膚の所々は剥がれ落ちて、筋肉や骨などが剥き出しになっている箇所もあった。

「イカれているんじゃないのか？ トゥルーセって奴はっ！」

「何を今さら、お前が言ったじゃねえか、何カ月後に、此処にミサイルをブチ込んで、住民を殺戮するんだろ？ 綺麗さっぱり、浄化する為の下準備で創ったのかもなっ！」

「逆じゃねえの？ ミサイルを返り討ちにする為に創ったんだろ」

「どっちでもいいよ。とにかく、俺達が消し炭になる前にどうにか対処するんだよ！」

何故、あのような怪物が創られたのかは、二人には分からない。

ただ、あの怪物を創造した者の意志は、果てが無い程の、悪意だった。

空飛ぶ怪物は、ただただ、破壊を求めていた。そして、食欲な暴食を求めていた。

「良い事を思い付いたぜ」

パラディアは告げた。

「なんだ？」

「ベリーアのカジノに突っ込む。奴が攻撃してくるにせよ、ベリーアが応戦するかもな。更に上手くいけば、トゥルーセとベリーアの同志討ちも狙える」

「成る程な」

パラディアは、カジノのある巨大なビルを目掛けてバイクを走らせていた。

巨大な光る広告が近付いてくる。

……………。

このカジノは、一階と二階には、ポーカーやルーレットが置かれておらず、不正操作が行われているパチンコとスロット・マシンのみが置かれており、クレーターの底辺の住民達は、三階以上の不正の無いカジノのある部屋に入る事は出来ないらしい。

2

元々、この巨大賭博場は、ベリニアのものではなく、ベリニアが仕切っていた前任者を殺して、手に入れたものだった。

彼は前任者の補佐をやっていたが、その途中、ベリニアに刃向かい『井戸』の中へと投げられた。

地獄のような場所だった。

ミュータント達の巣窟で、核汚染廃棄物の溜まり場だった。あらゆる死体の腐った臭いや、分けの分からない薬品の臭いで充満していた。

投げられる直前に、彼は隠し持っていた注射器を、自らの腕に刺した。

……自らの肉体は、生体兵器として、怪物化するが、ベリニアに復讐出来るのなら、それでも構わなかった。

そして、彼は虎視眈々と、ベリニアへの復讐を井戸の底で待っていた。

やがて、肉体は完全に変形し、元の姿を保っていなかった。

そして、今、その脈動の音が聞こえてくる。

安らぎの音色のようだ。

同じ匂いがする。

それは轟音と、破壊音、それから焦熱を撒き散らしながら空から近付いてきている。

彼は好機だと思った。

†

煌びやかな光が、このスラムにそぐわない異様なコントラストを放っていた。クレーター内にある幾つもの原子力発電所から供給される電力の多くは、民家ではなく、巨大賭博場に置かれている台や広告の発光に使われている。

巨大賭博場に入って、一階と二階はパチンコとスロットが置かれていた。ベリニアはこの装置をもっとも気にしている。旧来のカジノには無い画期的なシステムだ。ちなみに三階以上は、彼が許可した、ある程度の地位のある者達だけが“不正の無い”ポーカーやルーレットといったものを行える階へと行ける。

二階までのパチンコとスロットが置かれた階は、完全に“搾取体制”としての機械となっていた。

†

パチンコやスロットなどに興じている者達は、ガラス扉をバイクで割ってくるパラディアとベレットの二人に注目する。

負けが込み、台を叩き続けている廃人顔の者も、この惨状が何なのかを理解したみたいだった。だが、彼らはすぐに何事も無かったかのように、スロットを回し続けている。

パラディアは一度、バイクを停める。

「後、二分って処かな？」

「ああ、エレベーターを見つけた。押すぜ、奴は最上階にいるんだろう」

二人はエレベーターの前で止まる。

ボディーガード達は二人を制止しようとしたが、何も出来なかった。……何も出来るわけが無かった。いつの間にか、銃火器を奪われていたのだから。

「後ろの雑魚は？」

「俺の『マスター・ウィザード』が盾を張っている。放っておけ」

二人はバイクをエレベーターに乗せて、最上階へと向かう。

†

ベリーアは完全に困惑していた。

そして、二人を呪詛の籠もった視線で見据えていた。

「お、お前らは、なんて事を……………っ！」

彼は怒りに打ち震えていた。

秘書である、ジュガルジュガリの首にナイフが突き刺さっていた。

パラディアは、エレベーターが閉じないように、バイクを扉に挟ませていた。

「分かるだろ？ お前に残されている選択は、数少ないってな」

ベレトは、この賭博場のオーナーの部下に突き刺したナイフを、手に戻していた。ナイフが浮遊して、ジュガリの首から抜け落ちて、ベレトの手に戻っていた。

「おい、貴様ら、ふざけ、ふざけやがってっええええええええええええええっ！」

ベリーアはかなり混乱していた。

「お前のせいかな？ お前、トゥルーセの処に行ったんだろ？ 奴は先程、死亡した。ふざけやがって、俺はどうする事も出来なかった。ああ、畜生、畜生っ！」

「はあ？ 死亡した？ 誰かに殺されたのか？」

「薬物中毒だ。お前、ベレトだろ？ お前のせいで心身に異常をきたして、摂取する薬物が増え、ついにオーバー・ドーズをして、心臓停止に至ったんだっ！ 今、蘇生を試みているらしいが、望みが薄いだってよおっ！ もう奴は死亡したも同然だよ。大切な仲間だったのによおおおっ！」

ベリーアは狂ったように、涙を流し続けていた。

「ああ、神様……………っ！」

サメ顔の男は泣きながら立ち上がる。

「こうなったのも、お前のせいだ。お前はきっと、他人を追い詰める性格をしているんだよ。ああ、最悪だ、最悪なんだ」

「あー、よく言われる、嬉しい事だ」

ベレトはせせら笑う。

「ちょっと、いいか。ベレト」

パラディアが呆れたように言う。

「ベリーア。俺達はおそらくは、そのトゥルーセって奴が放った化け物に追われている。計算ではもう突っ込まれて、火の海にされている処だったんだが、少し遅れているな。まあ、せいぜい、後、五分以内には来るんじゃないか？ ……………、窓の外に見えた。かなり近付いてきている」

この賭博場のオーナーであるベリーアは、屈辱に打ち震えていた。

「俺達は此処をシェルターに使わせて貰う。なあ、地下の場所を教えろ。どうせあるんだろ？ お前は俺達にシェルターの場所を教えるか。あの空飛ぶ化け物と戦うべきか、それとも、この場所を放棄して逃げ出すか、選べ。三十秒以内にだ」

パラディアとベレトは、二人共、楽しそうな顔で、エーイーリーの部下を見ていた。この男は、どのように発狂するのか？ それに興味があるのだろう。

「て、てめえらあああああああああああああああああっ！」

ベリーアが能力を使ったみたいだった。

突然。

ジュガルジュガリの死体の傷が変化していた。

死体の首筋から流れる傷孔がボコボコと、泡を立てていた。血が沸騰しているのだ。

ベレトは、腕を抑える。

先程、ゴードロックのアサルト・ライフルの弾がかすり、止血していた場所だ。

「全身の血を沸騰させてやるっ！ うううううっ！」

ベリーアは小型サブ・マシンガンを取り出して、二人へと乱射していった。

「かすり傷程度じゃ駄目だああああっ！ 俺は液体を沸騰させる事が出来る能力者だああああっ！ てめらあに、もっと大きな傷を負わせれば、血を沸騰させ続けて、内部から破壊する事が出来るうううううっ！」

「能力は敵にペラペラと話すもんじゃねえぞ。それに、そんなややこしいのより、もっと分かりやすくシンプルな方が強い」

パラディアは苦笑していた。

ベレトのマスター・ウィザードによって、空気が何重にも固定されて、マシンガンの弾丸は空中で静止していた。

そして、ベレトとパラディアの二人は気付いていた。

あの怪物が、此処まで、口から炎の弾丸を放とうとしている事に。

「エレベーターで地下まで逃げるぞ。地下二階まであったっ！」

「ちっ！ もっと深い場所まで無いのかよ？ 奴は地面を喰い破っているのを見たぜっ！」

「贅沢は言っていられない」

二人はエレベーターの扉を閉じる。

誰かがボタンを押したのか、エレベーターが中途半端な階数で止まるみたいだった。

「ああ、もう面倒臭いっ！ 飛び降りるぞっ！」

パラディアはエレベーターの天井の蓋に触れる。

そして、蓋が固いのと、人しか通れない事に気付くと、フレイム・ウルフを召喚して、バイクが通れるように、炎の狼にエレベーターの天井を喰い破らせていた。

二人は、賭博場の最上階から、地下まで一度に、飛び降りていた。パラディアの場合は、バイクごとだった。

落下途中、上の辺りが炎の吐息に包まれている事に気付いた。

ベレトは、難なく着地する。

パラディアは、フレイム・ウルフにクッションになって貰いながら着地する。

「ベレトッ！ お前、俺の着地も固定しろよっ！」

「バイクが重過ぎるんだよっ！ 落下衝撃で空気の固定が割れそうになったんだよ！」

そう言うと、ベレトは地下二階の扉を、ナイフで切り付けていく。

「駄目だ。切れねえ」

パラディアのフレイム・ウルフが、扉を喰い破っていく。

二人が向かった先には、何故か、温水プールなどがあった。

「何だ？ この部屋は？」

ベレトは首をひねる。

スプリンクラーが発動して、二人は水浸しになる。

遅れて、落下してきた、ベリーアが、二人を睨んでいた。彼は全身に火傷を負っているみたいだった。彼はエレベーターの真下に佇みながら、二人を憤怒の眼で睨んでいた。

「俺の力を発揮出来る場所だ。此処の水を一度に熱湯に変え、水蒸気爆発を起こすっ！」

サメ顔の男が叫んでいた。

二人は無視していた。

水が次々と蒸発していき、プールの水も気体化していく。

建物全体も揺れているみたいだった。

「地下は倉庫になっているぞ。パチンコ台の予備や廃棄部品が並んでいる」

「そうかっ！」

ベリーアが何か叫んでいた。だが……。

破壊されたエレベーターの残骸が落下してきて、ベリーアはその部品の一つに激突して、悲鳴を上げる。

↑

「あったな、地下シェルター」

ベレトは、錠の鎖を切り付けて壊す。

扉は開いた。

そこは、冷たい死の臭いがしていた。

二人が地下シェルターと呼んでいたのは、トゥルーセの屋敷にもあった処刑場の事だった。何か問題がある人間を処刑する為の『井戸』へと通じる場所がある。此処はカジノ店だ。不正客や大きな問題を起こした客などは、地下へと処理されているだろうと、二人は踏んでいたのだった。

「『井戸』の中はどうだった？」

「トゥルーセのトコに侵入する時は、ミュータントや腐乱死体をいくつか見た。それだけだ。何か問題のあるものは、俺のマスター・ウィザードか、お前のフレイム・ウルフが遮断すればいい」

暗い洞窟へと続いていた。

「何かヤバイぞ、何かいる」

パラディアは、フレイム・ウルフを先頭に立たせて走らせる。

炎の狼は、即座に、二人のいる場所に戻ってきた。

二人は、息を飲む。

それは、巨大な口だった。

牙がびっしりと生えている。

眼球は見当たらない。

臭いや音で反応しているのだろうか。

唸り声だけを発していた。

そして、その音は確かに、一人の男の名前だった。

……ベリーア……。

「なんだ？」

直感的に、二人は理解する。

道を空けるように、この新たに現れた怪物は告げているのだ。

二人は洞窟の壁に張り付く。

その怪物は、二人の横を通り抜ける。

巨大な装甲に覆われたイモムシの怪物だった。

二人には興味を示さずに、何者かを追っていた。確かに、ベリーアと述べていた。怪物の正体は分からない。だが、その怪物は、この巨大賭博場のオーナーに何か遺恨がある事だけは分かった。

「どうする？」

パラディアが訊ねる。

「先に進んで、とにかく身を潜めよう」

†

ベリーアは、怒り散らしながら狼藉者二人を追っていた。

彼は人間離れした身体能力で跳躍して、一階のホールに戻る。

ベリーアは絶句する。

彼の楽園は炎上していた。

空からやってきた奇形の怪物が口から吐息を吐き、この建造物を炎の海にしていた。ホール内は火の海になっていた。

空飛ぶ怪物が翼を広げ、この場所を火葬場にしようとしているのに、パチスロの催眠状態に掛かっている客の一部は、台の出す轟音の音と蛍光色の光の点滅によって、客達はパチスロを行い続け、まるで事態を把握出来ず、何事も無かったかのように台を睨み続けていた。くるんくるん、と、スロットの回転が店中で続いている。

炎が燃え移って、のたうち回っている男がいた、だが、そんな事態を気に掛ける事もなく、一部の者達は未だに台で打ち、他のものが何も見えず、スリーセブンが出るのを待っていた。更に、空の災厄が口を広げ、二撃目の火炎放射を放つ。

†

ベリリアは一人、外に出た。

彼の栄華は、空飛ぶ災厄によって焼き尽くされていく。

彼のボディガード達も炭化していく。

ベリリアは泣き、そして笑っていた。

そして、同時に、自分の命がまだある事に気付く。空飛ぶ怪物は、彼を狙っていない。ベリリアはひとまず、この場から逃げようと走る。

「ああ、ひひひひ、あああ、ひひひひ。金庫、金庫も燃えちまったよなあ。沢山、沢山、金を金を貯めていたのに」

彼は泣きながら笑っていた。

空飛ぶ怪物は燃え盛る炎を眺めながら、辺りを巡回していた。何かを、あるいは誰かを探しているみたいだった。

突然。

炎の中から、新たなる怪物が現れる。

それは、巨大な装甲を纏ったイモムシだった。

イモムシは、ベリリアの方を向いていた。

「おい、なんだよ……？」

彼は地面に尻を付ける。

「一体、何なんだよ……？」

イモムシは、彼へと向かってくる。

ベリリアは涙と鼻水で、顔がぐしゃぐしゃになる。

†

ベリリアの胴体を食い千切った巨大イモムシは、しばらくして、役目を終えたとばかりに、元

来た炎の中へと戻ろうとした。

それを見て、奇形のドラゴンは激情に駆られ、イモムシの怪物を襲撃する。

二対の怪物は、しばらく互いに尻尾や鉤爪などで激突していた。ドラゴンは炎を吐く、装甲を纏ったイモムシは耐熱の皮膚を持っているのか、まるで炎の攻撃を受け付けなかった。

だが、最終的に勝利したのは、ドラゴンの方だった。奇形の竜は、イモムシの身体をバラバラにした。だが、イモムシは死の間際に、全身から毒の腐食ガスを放つ。

それを浴びて、奇形のドラゴンは燃える炎の中へと落下していく。そのまま、ドラゴンは沈黙化する……。

1

一流ホテルには遠く及ばないが、こんな場所でも綺麗な家は作れる、という見本みたいな部屋だった。

汚いが冷蔵庫らしきものもあった。

中には、冷えたビールやコーラが入っていた。

パラディアはビールの瓶の蓋を、栓抜き無しで、指で弾いて取る。

そして、押し込むように、ビールを飲み干していく。

「そろそろお前の事を詳しく教えてやってもいいんじゃないか？ こうやって仲間になったんだ、途中で裏切りもせず、危険を潜り抜けた。お前の事をもう少し話してくれてもいいんじゃないか？」

ベレトはとても楽しそうだった。

後で知った、ベリーアの死に様は心地よかったし、あのドラゴンの破壊も見ていて高揚した。「そうだな」

パラディアは韜晦を含む声で言う。

「なあ、ベレト……。仲間ってどう思う？ 俺は昔、色々なギャンブルに手を出した時、借金を作ったり、保証人になって逃げられたりして、仲間っていう連中から裏切られた。俺は散々な、友人や仲間や同志、って俺の事を呼んでくれた奴から裏切られたよ。ああ、本当に苦々しい記憶だった……………」

「それはギャンブルっていうシステムが悪い。俺の尊敬する友人は、散々、賭博に手を出す奴を嘲っている。そしてこうも言っている、そもそも金っていうシステムが悪いってな。だから俺は金を余り持たない主義なんだ。必要なものは盗むし、金が必要な時は、他人の財布を盗む」

このホテルに泊まる時に、ベレトは、逃げ惑う身なりの良いギャンブラーの財布をすり取って、金を手に入れたのだった。

「最初に言ったと思うけど、たとえば、俺は監視カメラに映らない」

パラディアは二杯目のビールを口にしていた。

「監視カメラには、この俺は映らない。何故なら、俺はそういう能力者だからだ」

彼はおもむろに、洗面所へと向かう。

鏡には、彼の姿は映っていなかった。

「俺自身の眼を通せば、俺の姿が鏡に映っている。だから、俺はこうやって身繕いを楽しむ事が出来る。でも、他の奴らは俺が映っていないみたいだ。でも、結構、怖いらしくて、お陰で俺は醜形恐怖症になった。俺の姿が、とてつもなく醜いんじゃないかってな。鏡や水面に俺の姿は映らないってだけで、俺を気味悪がって毛嫌いする人間は多い。しかしまあ、そういう症状なんだよ」

そう言いながら、パラディアは櫛で、オールバックの髪を揃えていた。

そして、鼻歌を歌い出す。

不協和音で、何処かのロック・ミュージシャンの音楽みたいだった。

「俺が何者だって？」

彼は眉毛を、小さなハサミで切り揃えていく。

「俺の話か？ そんなに聞きたいのか？」

T字剃刀で、綺麗に顎髭を剃っていた。

ベレトから見て、鏡には、彼の姿は映っていなかった。

「かつての俺は今の俺じゃなかった。今の俺になりたい為に、俺は悪魔と取引をしたんだ。悪魔の姿をした陳腐な化け物じゃないぜ、邪悪な大悪魔だよ、そいつと接触したんだ」

彼はとても嬉しそうだった。

全身の力を吐き出すかのようだった。

「そいつそのものは見た事は無い。そいつの伝令と会ったんだ。まあ、使い魔みたいなもんだろ。うな。だが、そいつから力を授かった」

石鹸で濡らした両手を顔に押し付ける。

そして、彼はタオルを取ると、自らの顔を拭いていく。

「俺にとっては偉大だよ。ただ、色々な枷もくれたが、有り余る程の力をくれた。願望や力には代償が必要だ。俺にとって、大した代償じゃない。たとえば、俺は数キロ離れた手紙の文字だって読める。その代わり、味覚を要求された。……でも大した事じゃない、俺はジャンク・フード程度しか味を楽しめない。繊細な味がする料理、たとえば、美味しい刺身と、不味い刺身の区別が付けられない。だからジャンク・フードが好きだ。おおざっぱな味は舌が認識出来るからな。それに、味はよく分からなくても、酒や煙草は楽しめる。良い酒の良さは分からないけど、酔う事は出来る。煙草の風味は分からないけど、ニコチンで心を落ち着かせる事は出来る」

しばらくの間、パラディアは話しながら、鏡を覗き込んでいた。

まるで、鏡に別の人間でも映っているかのように……。

ベレトの眼には、鏡にパラディアの姿は映っていない……。

「等価交換なんだ。俺は障害だと思っていない」

身繕いを終えたパラディアは、ベレトの方に振り向くと、両手を広げる。

まるで、世界の全てを手にしたようなポーズだ。

そして。

「ベレト、俺はお前が好きなんだ。一目惚れなんだ、なあ、俺と付き合っただけ……」

告白の言葉を口にした。

ベレトは、しばらくの間、沈黙していた。

……こいつは、……何を言っている？

猟奇殺人犯は、完全に黙示していた。

そして、しばらくして、言われた言葉の理解が追い付き、言葉を組み立てていく。

「俺は男だぜ。性癖でこういう格好をしているだけだ。それに恋愛はしない。パートナーは持たない。俺は女とやりたい時は、強姦する主義だ。奴らの貞操や自尊心や心の安定を略奪するんだ。そして、俺は可哀想だから、殺す。そして、犯す時は本当に愛しているから、アートの素材に

する」

ベレトは、自らのネックレスに触れる。

「なあ、パラディア。お前はゲイか？ 俺は女としかヤラない」

殺人犯は、完全に困っていた。

「……実は、俺は女だったんだ」

「……だった？」

「今は男だよ。性転換したんだ。完全な性転換だ。声、骨格、性器、肌、体質、……言わば、転生の儀式だったんだろう。俺は一度、ゼロになり、ゼロから創りなおされた」

「まさか……………」

「ああ、そのまさかだ。俺は性同一性障害で、女から男になりたかった。それを叶えてくれたのが、メビウス・リングと栄光の手が“絶対悪(アブソリュート・エヴィル)”として敵視している、錬金術師フルカネリだ。俺の人生の全てを変えてくれた」

パラディアは自らの拳を強く握り締める。

「……………。女だった頃は、同性の女が好きだったのか？」

「ああ、俺の恋愛対象、性的対象は女だよ。フルカネリの伝令者の手によって、俺が生まれ変わって男になった時、まず俺は女とやりたくて、性風俗、まあ娼婦を買う事ばかりした。そして、男の好きな遊び、車にバイク、賭博、酒、色々、やり尽くそうと思った。……博打は本当に黒歴史だな。……あの頃の友人はみんな失ってしまったよ……」

パラディアは溜め息を吐いた。

そして、再び、ベレトをまじまじと直視する。

「ベレト、お前は美しい。俺はお前を抱きたくなった」

「俺は女としか性交渉はしない。何度でも言うが、俺は性交渉した相手は殺す。それが、俺のポリシーだ。あるいは、自分で作り上げた宗教だからだ。結局、お前はバイセクシャルだったのか？」

「不思議なもんでさ……………、お前を見て、一目惚れして……………、一緒に戦って、一緒になりたい。一つになりたいって思ったんだ」

彼の表情は、何処となく艶っぽかった。

「俺と付き合ってくれないか？ 形だけでもいい」

ベレトは、しばらく返答に迷った。

「いいぜ……」

そして、彼を受け入れる事にした。

ベレトは完全に赤面していた。

「キスしていい？」

「唇以外なら……」

パラディアはベレトの頬に接吻をする。

そして、彼をベッドに押し倒す。

「抱き締めるだけなら、……いいよな……？」

「それくらいなら……」

パラディアは、パートナーとなった相手の髪を、優しく撫でる。

ゆるやかに、花でも撫でるように。

「ゲイカップルになるのかな？ 俺達は同性なのか？」

「もうどうだっていいじゃねえか。愛の形なんて、此処の住民はペドファイルも多いらしいし。クレーターに入った頃にも、アタマのイカれたガキに性交渉を迫られたぜ。みんな、脳が腐って、性欲がねじまがってやがるんだよ」

パラディアはベレトの白いビスチェを脱がす。

二人共、上半身裸になる。

「プラトニックでいこうぜ？」

「でも、これくらいやっていいだろ？」

「これくらいならな……」

ベレトは笑う。

「今度、揃いの指輪買おう」

「俺が創ろうか？」

「ありがたいけど。……俺に買わせてくれよ」

そう言うと、パラディアは、ベレトの額にキスをして枕に顔を埋める。

こんな場所でも、ホテルがあると知って驚く。

だが、やはり汚い。

棚を開けると、羽虫が這っていた。

ゴードロックは、ブーツを脱ぐと、虫達を払い除けていく。羽虫達は地面に転がっていく。

ズンボはベッドの上に座っていた。

「大変だったわね」

ゴードロックは、傷を負っていた。

左腕と両膝だ。特に右膝の傷は、深い。脚に障害が残るかもしれない。彼は苦痛に耐えながら、自らの傷を針と糸で縫い始める。

「虫も殺さない男かと思った……」

「……………、ああ、そうだよな。奴らも命、だよな……」

ゴードロックは、言われて、困惑する。自分が自然にやった行い、それは、このクレーターへと流された者達を、邪魔だから、と、命と思わない行為と何が違うのか……。

ズンボは、彼の傷に触れる。

そして。

彼女は彼の傷口を舌で舐める。左腕だ。

強面の男は、少し困った顔になる。

「少し、人のぬくもりを感じていたい……」

彼女は、彼の太い二の腕を握り締めていた。

……………。

二人は唇を重ねる。

……………。

もう片方のベッドに上り、ズンボは正座をして、元軍人の男を凝視する。そして、腕を強く握っていた。

そして、指先を這わせていく。

「あの、私のような汚れ、醜きものでよければ、貴方のお好きにしてください……」

「なんだ？」

「……………。早い話、私は貴方と性行為がしたいんです」

ズンボは屹然とした口調で言った。

†

「私は妹にしきたりを押し付けたくない。私が全て引き受ける……」

幼い頃の妹を見て、彼女はそう決意した。

妹には清純であって欲しかった。

自らのようには、性に汚れて欲しくなかった。良き恋愛を行い、良き夫を見つけ、理想ならば結婚後に、契りを交わして欲しかった。

だが、皮肉にも、奔放に育った妹は、十の半ば頃に、既に性に関心を抱き、様々な男達を渡り歩き、売春まがいの事も行っている。

ズンボは、少し疲れていた……。

†

食屍姫ズンボ。

彼女は、呪術師の家系の巫女である。

それも、特殊な呪術を使う家系だった。

彼女が鬼と契ったのは、12歳の頃。正確には誕生日が来ていない11歳の頃だった。中学生になる前の年だった。初潮が来てから、家系のしきたりを受け継ぐ事になった。

それは、家系の巫女となる者の宿命だった。

彼女は山奥の祭壇に行き、鬼達にその身を捧げた。

角の生えた筋骨隆々の食人鬼達。浅黒い肌に、赤茶けた肌の、蛮族のような姿をした男達だ。

彼女の幼い身体を、次々と、大の男達が貪っていった。

性的快楽は無く、ただ、ひたすらに痛かった。

今でも、それを追体験するかのように、その痛みが、フラッシュバックとなって、時々、幻痛となって引き起こされる。……。

……………。

儀式。

それは、十六歳まで続いた。

逃げ場所なんて無かった。

鬼に扮する者達は、周辺の風習に囚われる村人達だった。

神社の中に置いてある鬼の面を被り、面の力で、鬼となり、若人も老人も、貧相な病人も、蛮族のような肉体へと一時的に変化し、精力が漲る。そして、巫女を継承した女を、みなで味わっていくのだ。

†

彼女は、少し、口を閉ざす。

ゴードロックは、ミネラル・ウォーターを入れたコップを口にする。

そして、再び、コップに水を注いでいく。

「なんというのか。……………酷いエロビデオの設定みたいな話だな。信じられん……………」

ゴードロックは素直に思った感想を口にしてしまって、思わず後悔する。

設定。まるでズンボの話が、彼女の作り話みたいな
「……すまない。団体にも名前を記載している、女性の人権運動を掲げるフェミニストでもありながら、やはり俺は暴言を吐いてしまう……」

彼はあわてて、すぐに謝罪の言葉を口にした。

「いいえ、気にする事はありません。気にしていませんし、ゴード」

彼女は無表情になる。

「私達は生命を口にし、異性と交わり、種を残していくのです」

彼女はコップの水を口にする。

「私達の分派には、獣と交わる行いもする女性もいます。生命と豊穡への賛美の考え方です。そして、力を得るのです」

「公の風習と言うが、それは輪姦じゃないのか？」

「いいえ……、儀式です」

彼女は酷く、辛そうな顔をしていた。

そして、どうしても、彼にだけは理解して欲しいのだろう……。

自らの感じた、苦しみを……。

ゴードロックは、強姦被害者、性的虐待被害者、幼児愛好被害者、DV被害者、AV撮影強要被害者達のシンポジウムにも顔を出している。未成年……、ズンボが初めて“儀式”と呼ばれるものを行う事になったのは、彼女が11、12の年だ。性に対して、その意味も分からない。……どれだけ辛かったのか、想像に難くない……。

彼はずっと、性犯罪被害者達の話聞かされてきた。ズンボの苦しみは、彼女達の嗚咽の吐露と重なる。

ズンボの背後から、ぼうっと、半透明な鬼の姿の怪物が浮かび上がる。悪鬼の形相をしていた。

悪鬼の顔は、次々と浮かび上がっていく。

「ゴード、話は続きます。本当の悪徳は、これからなのです。貴方の倫理観からすると。吐き気をもよおすと思います。それでも私は話します。貴方を……好きになってしまったから。強い恋愛感情を抱いてしまったから……っ！」

巫女は、元軍人の首を強く抱き締める。

「食人者である私を、貴方は受け入れてくれた。……私が苦しんでいるのも、理解してくれている……」

「あ、ああ……」

†

16で儀式が止まった理由はある。

それは、彼女が子を宿したからだった。

鬼の子だった。

頭部に角らしきものが生えていたが、そんなものだけならば、些細な個性にしかならなかった

だろう。

そう。

産まれてきたものは、完全な異形の姿をしていた。

人の形をしていなかった。頭から足の爪先まで人間らしい形をしていなかった。すぐに死ぬだろうと、村の医者に告げられた。

そして、その通り、すぐに死んだ。

.....。

ズンボは、その子供の亡骸を口にした。

儀式の最後の行為だった。

それで、力が手に入る。

妊娠を迎えるのに、彼女の年齢もあつてか、あるいは元々、彼女は子を宿しにくい体質だったのかもしれない。だから、四、五年はかかった。週に一度は、彼女は神社の祭壇の前に立ち、鬼と同化した男達に自らの肉体を捧げていた。

儀式の完成。

以後、彼女は“鬼憑き”の力を手にしたのだった。

あの行為は、自分の心の一つ一つが消滅していくかのようなようだった。

あらゆる体位と行為を強要された。

街中を歩いているだけで、その時にされた事がフラッシュバックする事がある。同時に、その記憶と共に、力が湧き上がっていく。

おそらく、彼女が召喚している鬼の姿を取った異形は。あるいは、分派の者達が召喚する狐や蛇、虫といった化け物達は、儀式によるPTSDの力を、トラウマによる悲哀や絶望の力を糧にして、実体化しているのではないのかと。

そう彼女は考えていた。

.....。

自らに行われた行為以上に、自分が産んだ子供の姿のショックが脳裏に焼き付いている。

この風習は、彼女の代で断ち切りたい。

彼女は、そう誓った。

†

「今でも、その子に^{うな}魔^まされます。奇形として産まれて、死にました」

ゴードロックは、どう答れば良いか分からなかった。

「このクレーターは、私の村社会の風習。伝統の模造にも見えます。歪な共同体を作っている。そして命が蹂躪されている」

彼女の瞳は、強い意志を宿していた。

「クレーターにいる娼婦達は、幼児売春婦達は私なんです。私と同じなんです。彼らは、この世界の理を知らない。人権を知らない。自らの心が傷付いている事を必死で押し殺そうとする。こ

んな道理に叶わない仕組みを、私は見過ごす事は出来ないのです」

ゴードロックは、コップに水を入れ、また水を飲み干す。

「陰惨な性暴力被害の話を聞いて、それをマスターベーションの道具に使っている男達もいると聞く。悲惨なエピソードさえ性欲の妄想の道具になるんだ。俺は不毛さを感じる。きっと、彼らに人の痛みを想像する事は出来ないのだろうか……………」

彼はとても辛そうだった。

同時に、自身の無力さと、行動の無為も感じているかのようだった。

この掌では、誰も、何も救う事が出来ない…………。

「人は、何故、こんな残酷で凄惨なこの世界に産み落とされてくるのかと…………。幸福な者達もいるのでしょうか。でも私は違いましたし、クレーターの者達も不条理と暴力に晒され続けています…………」

「しかし、俺達は……………」

「そう、彼らを救う事は出来ない。苦しいのです。こんな世界、壊れてしまえ、って思う……………」

彼女は爪先で、壁を掻き毟っていた。

「私は醜い…………」

ズンボは泣いていた。

泣きじゃくり、鼻水さえ出していた。

「俺はお前が美しいと思う」

彼は告げる。

「ゴード…………、ゴード、…………、人間は性欲や物欲や支配欲や略奪欲を捨てられませんよね。どうしようもない事なんです。人間とはそういう生命なんです。産まれて、生きていくという事はそういう事なんです…………」

ゴードロックは何も言わず、彼女を優しく、しかし強く、抱き締めた。

†

二人は裸だった。

ゴードロックは、彼女を強く抱き締める。

そして、再び口付けを交わす。

3

ゴードロックとズンボ。

ベレトとパラディア。

四人は偶然にも、一つのホテルの、それぞれ別々の部屋に宿泊していた。

隣り合えば、互いの存在に気付いたかもしれない。だが、時間帯、階、位置によって、結局、四人共、それには気が付かなかった。

それも一つの、命運の戯れであつたのかもしれない……。

「貴方とは、一緒に歩いていけそうな気がする……」

ズンボは嬉しそうに、ゴードロックの左手を握り締める。

彼女の陰鬱な表情は消えない。きっと、死ぬまで消えないのだろう……。

元軍人の男は寂しそうに、笑う。

川が見えた。

「あれは蓮なのかしら。こんな場所にも花が咲いているのね」

泥水の中に、白い花が咲いていた。

「貴方のお陰で、私は生きていて良いんだって思えました……………」

ゴードロックは彼女の瞳を見る。

愛している……。

何よりも守りたい……。

ズンボは笑う。

幸せを帯びた、笑顔だ。

「貴方のお陰で、私は私を自制出来なくなりました」

ズンボは泣く。

ゴードロックは黙る。

「娼館をやっている隣のバーに付いてきてくれませんか？ ゴード。もし、私が狂乱したら、止めてください」

ズンボは走る。

売春婦達がバーの中でたむろっていた。

昼と言わず、夜と言わず、彼女達は、あるいは男娼である彼らは酒を飲んでいて。中には、ズンボが情報を聞き出す為に、交流を含めた者達もいた。

彼らはボーイと一緒にトランプに興じていた。

「今から、二か月程して、此処はミサイルで終わります」

ズンボは、静かに、彼らに告げる。

「貴方達にとって生きていけるとはなんのでしょうか？」

彼女は問い掛ける。

「こんな地獄のような世界に産み落とされて、あるいはこの場所に流刑にされて、何故、生きる事に価値があると思えるのでしょうか？ 私は苦しい……」

赤髪の娼婦が、トランプの手を止める。

ボーイの一人が、酒の入ったグラスをテーブルに置く。

「こんな場所を軍事産業の経済連合達は、ミサイルで終わらせようとする。それを、私は人類に対する罪、……命に対する罪なのだと思うんです……………。その意味も、自分達が何の為に産まれて殺されていくのかを、貴方達は知らされていない……」

金髪をした別の娼婦が、トランプを続けるように言う。

「言っている意味、わからねえよ。姉さん」

男娼の一人が困ったような顔をしていた。

彼は微笑んでいた。

辛そうな、笑みだった。

彼らは、みな、酒や薬物で苦しみを紛らわせている。このクレーターの中で生きていくのは、辛く、苦しい。現実を直視すると、発狂してしまうのだろう。何も考えずに、日々、生きていたい。自分の死も、他人の死も、分からない。

「性のはけ口にされて、弄ばれて、そういう職業しか選べなくて、心を日々、壊しながら、それでも生きている。……生きている、私達は命を持って、もっと自由になる為に、生きる権利がある筈なのに……。でも、貴方達には選択が与えられていない……」

……何も伝わらない……………。

ズンボは嗚咽を漏らして、うずくまる。

そして、子供のように泣きじゃくっていた。

彼女は、此処には花も草も生きている事を知っている……。

「トゥルーセは宗教を創っていた。それ以前から、此処では色々な宗教が創られていた。来世や高次元の世界に救済を与えていきます。あの世とか、転生とか……。でも、そんなものなんて無い……。他にも、ギャンブルに依存して、日々を浪費している者達も多い」

ズンボは泣きながら壊れた堰のように、話し続けていた。

「いつ、放射能汚染で死ぬか分からない。いつ、怪物達の餌になるか分からない。いつ、自分達が化け物に変異するか分からない。生きる事の意味も、死ぬ事の意味も考える余裕も無く、死んでいく。その意味も……。貴方達にとって、生きているってなんですか？ 私は、自分が残酷な事を訊ねているのを、告げているのが分かります。私は今、おかしくなっているから……………」

誰も、彼女の言葉に反論する者はいなかった。

ただ、彼らは聞いていた。

「すみません、私の今言った暴言は忘れてください……………」

ズンボは、彼らに深々と頭を下げる。

二人はバーを後にする。

「ゴード、私は自分が何をやっているのか分かりません……………」

「そうか。……………」

「どう考えても、合理的で無いのに。……………せめて、現実を教えたかったから……」

彼は、彼女を強く抱き締めた。

「きっと、みんな知っているんだろう。でも、選択は無いからなんだろうな」

……………。

このクレーターには、各国から様々な核廃棄物や、あらゆる産業廃棄物が投棄される。そういう仕組みとして、此処は成り立っているのだ。外の者達は、此処の者達を“生きるに値しな

い命”と認識している。それが先験的に成立しているのだ。あらゆる国にとってのコンセンサスになっているのだ。

……………。

空が濁り、青い。

此処は、あらゆる汚濁と汚辱が投げ捨てられた場所だ。

“生きるに値しない命”として、此処の住民は産まれてきている。あるいは、此処に廃棄される。

放射能汚染と、共同体という暴力によって、命が踏み躪られていく。

彼らには、未来が無い。

彼らを助ける力を、自分達は有していない。

ただ、告げる事の残酷さと、傲慢さが、二人の胸を搔き毟っていた。

何処か、安全圏にいるのだ。

少なくとも、二人は、いつでもクレーターの外に出られる。通行証も持っている。

自分達は当事者、住民では無いのだ。

任務は、エーイーリーを始末する事だ。

だから、……何もかもが、余計な事なのだ。

ぽつり、ぽつり、と。

雨が降ってきた。

放射能を帯びた雨だ。

今もなお、このクレーターは量こそ違うが、放射能の粉塵が降り注いでいるのだ。

「誰がこんな世界を作ったのかしら？ ……………」

ゴードロックは言葉を返せなかった。

政治家か？ 大企業か？ 投資家か？ それとも、人類全体が創り出した事の帰結なのだろうか。

†

奇形のドラゴンと、井戸から生誕したワームによって破壊し尽くされた大カジノを見て、クレーターの住民達は、嘆き悲しんでいた。娯楽が無い。そんな風に苛立っていた。あの巨大な賭博場は、巨大な搾取システムの建造物でしかなかった。

娯楽を失った住民達は、酒や薬物を増やし、住民同士の暴力沙汰を起こし、しばらくして、自分達で新しくビール瓶の蓋などを使った、博打を流行らせた。……………。

みな、考える事を止めている。

自分達が生きる事、思考する事を止めてしまっている。

ズンボとゴードロックが、体感として感じたのは……………。

みな、このクレーターの中という場所を受け入れている。

放射能とフリークスと、あらゆる暴力が蔓延する渦を、みな当たり前の日常として認識しているのだった。

多分、自分達にとっての異常は、彼らにとっての正常なのだろう。

ズンボの育った環境、彼女の血筋の慣習が外側から見て異常であったように。

此処は、もうどうしようもない。

人権、性暴力、搾取。

それらの言葉の概念を、彼らが理解する事は、きっと出来ないのだろう。……………。

それらが無い世界において、それらの概念を理解する事は出来ない。もし、もう少しだけでも富んでいれば、死の恐怖が和らぐような場所だったならば、此処はもう少しマシだったのかもしれないが。

……………。

クレーター。

此処は、外側の世界の縮図でしかないのかもしれない。……………。

†

一人の女が、二人の後を付けてきた。

彼女は娼館の人間だった。

二十代前半、ズンボと同じ年くらいだ。

彼女は嗚咽混じりに言う。

「私は生きていたくない。もう、何もかも嫌なの、生きていたくないの……」

彼女は二人に対して、涙を流し続けていた。

「自殺した友達も何名もいる。もう止めようって、こんな世界に生きていたくないって。私は自殺する勇気が無いから、まだ生きている。ねえ、本当に、本当に、後、二ヶ月後には、この場所は綺麗に消えて無くなるの……？」

娼婦は、泣き続けていた。ただ、ひたすらに。

「なんで、そんな事を教えたの？ 私は生きていたくないの……、でも生きたいの。死ぬのが怖いから。私は生きているのが嫌だけど、生きたいの。ねえ、なんで教えたの……？」

鬼憑きの巫女は、答えられなかった。

ただ、唇を震わせていた。

「助けてよ、私達を……、この牢屋から。……この地獄から……………」

「約束する」

ゴードロックは、強く言った。

「俺は、お前達を救い出す。力になれると思う」

「ゴード……………」

†

何故、このクレーターの中で、トゥルーセとベリーアが権力を持ったのか、二人には分かった

ような気がした。いや、あのエーイーリーの部下達が、権力を持てたのかをだ。

宗教。

賭博。

薬物。

娼館。

……………、人間の最も原始的な欲望を支配する施設を占拠したからだ。

だからこそ、誰も逆らえないし、エーイーリーの部下の二人は、それらをより改良して、魅力的なものにしたのだ。

知性を剥奪され、日々、暴力に晒される者達にとって、動物的な欲望こそが最大の娯楽になるのだから。

1

女らしく生きろ、と言われるのは、暴力以外の何物でもなかった。

†

人生を変えられる場所だ、と聞かされていた。

そこは、汚らしい工場跡地だった。

中には汚水が漏れ出しており、ネズミなどが大量に発生していた。

錆びた機械が並んでいた。

工場の中で、何度も迷った。

だが、此処にある。それを感じていた。

何日もの間、工場内部を徘徊して、ようやく遺跡の入り口を見つけたのだった。

†

奥には奇妙な図形が描かれた洞窟へと続いていた。

ピラミッドの中のような空間になっていた。

おそらく、此処は異世界へと通じているのかもしれない。自分は異様な世界に迷い込んだのだろう。だが、怖くは無かった。

パラディアは確信していた。

自然と、期待が胸に満ちてくる。

全ての希望が、此処には詰まっている。

彼はそう、確信した。

遺跡の奥へと進んでいく。

ほぼ、一本道だった。

おそらくは、元々は、迷路のような作りになっているのだろう。だが、この遺跡の主は、パラディアを歓迎しているみたいで、迷わない作りに石壁や階段などを動かしているのだろう。

距離にして、数キロ程、歩いた処だろうか。

橋があった。

橋の両隣は、底なしの暗闇が広がっていた。

橋の向こう側には、一つの像が立っていた。

彼はその場所まで歩いていく。

そいつは、メタリックな身体のガーゴイルの像だった。身体に幾つもの幾何学的な紋様が描かれていた。

彼が此処を訪れる事を、予め知っていたみたいだった。

＜望みを叶えに来たのだろうか？＞

ガーゴイルの像は、告げた。

†

「お前は何て呼べばいい？」

＜私の名前は番号で記されている。私には記号としての番号しか与えられていない。好きなように呼ぶがいい。私の事はどうでもいいだろう？ それよりもお前の望みの方が重要ではないのか？＞

「ああ、そうだな。そうだ」

＜我らの造物主さまは、人間の蛮性に興味がある＞

ガーゴイルは機械的な声で語っていく。

＜お前の内なる獣を、私に教えるのだ。それをお前の力としよう。ただし、それには対価がいる。だが、対価以上の見返りは確実に手に入るだろう＞

パラディアは首を傾げる。

「どういう事だ？」

＜お前の話を教えて欲しい、という事だ＞

無機質な声は、ライダー・ジャケットを着た人物に、自らのトラウマを語るように告げた。

†

……俺には友人がいた。……親友と言ってもいい……………。

彼の瞳に宿る、懐古の心は、何処か空しさを帯びていた。

昔、彼には友人がいた。

学生時代を共にした、仲間だ。

第二次成長期を迎え、異性に対しての興味が強くなってきた時期だ。

パラディアは女として、この世界に産まれた。女の肉体として。

性同一性障害にありがちのように、F T M(女から男になりたい性別)である“彼”にとっては、制服でスカートを穿かされる事が苦痛で仕方が無かった。

生理の日は、苦痛で仕方が無かった。

子供を産める身体……。生理痛という、とてつもない不気味な感触。

自分の性を意識始めた年齢で、人生に激しい絶望を感じ始めた。

何もかもが、自分が他人とは違うのだ、と分かった。

ある日、親友から告白された。

異性同士として、付き合っただけ、と……。

パラディアは、二度返事で承知した。

彼の思惑など、分かる筈もなかった……。

親友の部屋には、よく遊びに行っていた。

彼の思考原理は、極めて単純みたいだった。

ベッドに座っている時に、押し倒されて、服を脱がされた。

パラディアは、親友が自分と性行為をしたいのだと分かった。……受け入れる事になった。彼を傷付けたくなかったから……。

嘘を塗り固めた。

性器が濡れなかったのが痛かったし、血も沢山出た。コンドームは使ってくれなかった……。膨らんだ胸を強く握り締められた。キスもされて、舌を入れられた。

本音の言葉で語り合う事なんて、出来なかった……。

何度めかの性交渉を続けると、親友は、彼の男性器を口で愛撫するように言ってきたので、パラディアは彼の男性器を口に入れて、分泌液を嚥下した。

彼の部屋には、思春期にありがちな過剰なエロ本雑誌やアダルトビデオが積まれていた。パラディアは彼からそれらのモノを借りて、家のTVで、エロ本やAVを見ていた。色々な性癖のものがあつた。変な奴だ、と言われた。

パラディアは、女の裸を見て……。指を使い、マスターベーションをした。

本音では、同じクラスにいるグループの違う美人の女と性交渉をしたかった。いっそ、犯してやりたかった。そして、相変わらず“同性”である筈の親友の家に行つては、彼に性行為を求められる。彼に隠れて、病院に行き、緊急避妊薬を飲み続けた……。

親友からは、口調や私服などをもっと女らしくして欲しい、と言われた。

バイクや格闘技の知識を身に付けて、熱心に話す度に嫌そうな顔をされた。

とても傷付いた……。

自分も男なんだ、って告げたかった。

カミングアウトが出来なかった。全て、壊れてしまうから。

親友のやっている事は、強姦ないし、準強姦にあたるのではないかな？ そんな事が頭にチラ付いたが、関係を壊したくなかった為に、考えないようにした。

抑圧ばかりが、十代の青春だった。

日々、自分が殺され、死んでいく……。

自分らしく生きられない事は、自殺にも等しかった。

ある日、能力に目覚めてしまって、パラディアの人生は変わった。

†

<それがお前のトラウマであり、悲痛か>

「そうだ。この場所は探検家のサークルをやっている時に、偶然に見つけた。造物主の存在は、

俺がやっと見つけた希望だ。天から恩寵として授かった異能の力によって、此処に辿り着いた。俺は選ばれたんだ。男性ホルモンの投与、整形手術、骨格手術は、俺の国では未発達だ。だから俺は完全なる性転換をしたい。完全に男になりたい。さあ、代償の内容を言え、願望を叶えてくれるんだろう？」

“彼”の声は、どうしようもないくらいに、甲高く、ソプラノの音色だった。

胸や腰のくびれも、ライダー・ジャケットで隠せないくらいに膨らんでいる。

生きている事が、屈辱だった……。

＜分かった。お前の発した情報、お前の精神から。お前に力を授ける。力も代償の一部だと知れ。そうだ、お前は性転換以外に何がしたい？ 他にも望みの肉体を授けてやろう＞

パラディアは、少し考えて、答える。

「そうだな。どうせなら、視力が良くなりたい。コンタクトを付けるのが面倒臭い」

＜その代償は？ お前の方で提案してみろ＞

「俺が決めていいのか？ ……そうだな。俺は食べる事に執着心が無いんだ。だから、味覚が余りいらぬ。ハンバーガー辺りを美味いと感じられればそれで良いかな」

＜そうか。ならば、視力を引き上げて、味覚を下げよう。代償とはそういうものだ。それが等価交換だ。お前に取り行うのは“転生”という術になるだろう。一度、お前はゼロになる。精神を残し、肉体は滅びる。何か生まれ変わった後の姿の指標となるデザインは無いか？＞

「そうだな……………」

パラディアはバッグの中に、持っていたファッション雑誌を取り出す。

そして、タレントの写真をガーゴイルに見せる。

それは、とても女にモテそうな顔立ちの美男子だった。

「整形手術やホルモン注射も考えていたからな。その指標として、この芸能人を選んだんだが。持ってきて良かった。こいつの姿でいい。俺の国でそれなりに人気のあるタレントだ。俳優や歌手を兼ねている」

＜そいつの名は？＞

「意味のある情報なのか？」

＜成程。お前は明晰だ。さあ、扉を開く。その中をくぐれ。“転生”の術は入って、三番目の部屋だ。その中に入るがいい＞

無機質の瞳は、確かにパラディアを歓迎していた。

翼を持った機械の構築物は、翼を広げて飛び上がる。

すると、彼が今しがたまで鎮座していた場所の壁が開いていく。

パラディアは開いた通路の中へと入っていく。

幾つかの扉があったが、全て固く閉ざされており、三番目の扉だけが開いていた。彼はその中に入る。

中には、人一人分が入れるカプセルがあった。

隣には、フクロウの姿をした機械達が三体程いた。

＜箱の中に私物と全ての衣服をお入れ下さい。そしてカプセルの中にお入りください＞

パラディアは言われるままにする。
何だか分からない機械ばかりが部屋を占めていた。
部屋の中には鏡があった。
自らの全裸姿が見えた。この姿とも、今日でお別れだ。
全ての苦痛が終わるのだ。

†

ライダー・ジャケットは、とても窮屈だった。ファスナーが閉まらない。
ズボンもとてもキツイ。今にも破けそうだ。
下着なんて最悪だ。女物だからだ。なので、捨ててきた。たまに穿いている、トランクスを付けてこれば良かった、と悔やむ。
パラディアは鏡で自らの姿を確認して、自らの肉体に触れていき、狂喜した。
そして、手に持った光線を放射するサーベルによって、工場痕地を破壊して回った。何もかも、自由で、解放感を得られた気がした。
全てが充足していた。
朝日が昇っていた。
彼はその夜に、アダルトビデオを大量に買った。凌辱モノだった。
手に入れた男性器で、何度も何度もマスターベーションを行った。
次の日に、風俗に行き、女を抱いた。
女と性交渉を行った。
この日から、彼の人生の命運は全て変わったのだった。
人生で、一番、幸福を感じた日だった。

†

パラディアは、フルカネリに仕える事を誓った。
ガーゴイル達は従属する必要は無いと告げたが、それでも、パラディアは、フルカネリを心酔し、狂信した。
造物主の障害になる者達を、みな手にした力で倒してやろう。
そのつもりでいた。
おそらく、あちら側についても、自分の苦しみを手助けしてくれる事なんて無かったのだろう。
望みを叶えてくれたのは“悪魔”の方だ。
彼にとって、メビウス・リングも、メビウスの配下である栄光の手も、ドーンも、全てが敵だった。

「俺がフルカネリから受けた代償は、男の肉体を手にする代わりに、本当の恋愛感情を抱く相手は同性である男になる、って事だ。フルカネリは両性具有の存在らしいからな。何か、倒錯的な意図があるのだろう。だが俺は満足している。……もう会っていないが、かつての親友には恋愛感情を抱いているし、そしてお前にもだ」

そう言って、パラディアはベレトの頭を撫でる。

とても愛しそうに。

「俺はフルカネリから、正確にはフルカネリの配下と、等価交換を行っている。俺は力を手にする為になら、あらゆるものを犠牲にするよ。それが俺の哲学なんだ」

彼は哄笑していた。

何に笑っているのか、彼自身も分からないかのようにだった。

ベレトには分からない感情だった。

「パラディア……」

「だから、栄光の手を血祭りに上げてやろうぜ？ 俺はフルカネリの先兵になりたい。俺はメビウスの哲学も調べている。“あらゆる可能性を模索し、調和を生み出す”だ。造物主は言うだろう“あらゆる欲望を推し進めて、その結果の選民思想を創れ”と。俺はきっと選ばれた存在なんだ。なあベレト。俺は女だった時の反動で、今、男性的な暴力性を誇示したいんだ。俺は“略奪者”である事を選ぶんだ」

「難しい事は分からねえよ」

「まあ、メビウスは究極的に民主主義を模索しているんだよ。フルカネリは究極的な選民思想的な資本主義、あるいは過剰なまでの競争世界を作りだすネオリベラリズム(新自由主義)を計画している。そうだな……、もっとシンプルに言うと、みんなが幸福になれる世界を創りたい奴と、選ばれた人間が弱者を踏み躪って潤う世界を創りたい奴がいる。俺は後者の刺客ってわけだ」

言いながら、パラディアは自身の言葉に陶醉しているみたいだった。

まるで、自らが信じている心の支え全てであるかのようにだった。……実際、そうなのだろう。

ベレトには、その感覚は分からない。

彼はあくまで、フルカネリの力を可能ならば、利用したい、と考えた程度に過ぎないのだから。

「エーイーリーの下に、あの軍服の男と巫女装束の女は行くだろう。先回りしよう。俺達が奴らを焼いて、解体してやろう」

「此処の住民はどう思う？ ゴードロックは助けたがっているみたいだぜ？」

「俺達には関係が無いだろ？」

ベレトは、少し意表を突かれたような事を言われる。

「まあ、そうだな」

†

目印のように、そこには巨大な像が建てられていた。

巨大な門が見えた。

鉄格子のような門だった。

番犬として、巨大なワニと頭に牛の角を持ったような、怪物が佇んでいた。

ベレトは思い出す。

『カリス・ビースト』。……エーイーリーが使役する怪物。

全長、数十メートル程はあるのではないかというくらいに、巨大な四足歩行の怪物だった。おそらく哺乳類なのだろうが。

二人はリクビダートル・スーツを身に纏っていた。

変異し、奇形化したレッサー・トロール達が、門に近付いていく。パラディアが彼らを刺激して、此方に向かわせたのだった。

……畜生と同じだ。ちょっとした刺激を与えれば、簡単に動いてくれる。

パラディアはそう言って、レッサー・トロール達を嘲笑していた。

当然だが、彼も、変異した者達はゴミとしか考えていない。……あるいは、ベレトと同じように、周囲の人間以外のどうでもいい人間は、みな、ゴミとしか考えていないのかもしれない。

カリス・ビーストは吐息を吐く。

砂煙のような吐息だった。

次々と、砂漠の砂嵐のように、レッサー・トロール達がそれを浴びていく。すると、奇形の怪物達は片っ端から、土人形へと変異していった。

†

武器を管理していたベリーアが死亡してしまった為に、エーイーリーと直接、交渉しなければならなかった。トゥルーセも死亡したと聞く。二人の側近が死んでしまった以上、エーイーリーは、彼が支配したクレーターの統治をどうするか考えなければならない筈だった。

†

ゴードロックとズンボの二人は、門の前に立っていた。

二人共、重装備のリクビダートル・スーツを身に付けていた。

此処の放射能数値は異常だった。

ゴードロックがガイガー・カウンターを取り出す。

……おそらく、数分立っているだけで死ぬだろう……………。

それくらいに、此処は危険な区域なのだ。

「エーイーリーッ！ 武器を沢山、持ってきたぞっ！」

ゴードロックは叫んだ。

カディアと花鬱、ガス・カルの手回しによって、クレーターを平地に変える計画に加担していない武器商人と繋がった。そして大量の武器が手に入ったのだ。

計画は、今の処は、順調に動いている……。

ゴードロックは『リトル・プリンス』の能力によって小さくしたものを、元のサイズに戻す。小型のキーホルダーサイズに収まっているものだった。

それは見る見るうちに、空へと伸びる樹木のようにになっていく。

そして。

それは、巨大な大陸弾道ミサイルだった。

「大量に持ってきたぞっ！」

彼はとても楽しそうに叫ぶ。心の中では違うのだろう。

今、正義は行われぬ。

ただ、ゴードロックは、此処の住民達に力を与えたかった。武力で解決しない選択もあるだろう。だが、彼らが武器を持つ事によって、外側にいる警備兵達を牽制して、彼らが外に脱出する事を願った。

メビウスは自分の行いを咎めるだろうか？

優先すべき事は、エーイーリーの始末なのだ。

だが……………。

「これが見えるだろうっ！ ミサイルだ。何本も何本もあるぞっ！ 他にも拳銃、アサルト・ライフル、スナイパー・ライフル、マシンガン、手榴弾、グレネード・ランチャー、いくらでも揃っているぞっ！ ほらっ！ 大安売りだっ！」

内部の者達は、彼を脅威と認識しなかったのだろう。

奥で、銃器などが仕舞われる音が聞こえた。

しばらくして、門が開いていく。

巨大な怪物、カリス・ビーストがおとなしくなり、地面に寝そべる。

通っていい、という事なのだろう。

「許可が出たみたいだ。行くか」

「ええっ」

†

まるで、風船が膨らむように、オモチャのように小さな何かが巨大化して、一つの巨大ミサイルに変わっていた。

パラディアは意表を突かれていた。

彼は狙撃銃を手にしていた。

ゴードロックとズンボはリクビダートル・スーツを身に付けている。銃で頭を撃ち抜けなくても、スーツを破るだけで、放射能汚染によって死亡するだろう。

それが二人の計画だった。

パラディアはすぐに、撃つ準備に入る。

「じゃあな、オシャカになれよっ！ 被曝死しろっ！」

突然、ベレットに手を触れられる。手が動かない。固定されたみたいだ。

「おい？ なんだよ？」

「なあ、考えたんだが。もし、今、奴らを殺したら、マズインじゃないのか？ お前はフルカネリの信仰者なんだろ？ じゃあ、フルカネリの創造したエーイーリーを支援しようとしている、奴らを、今、殺すのはマズインじゃないのか？」

「はあ？」

パラディアは、しばらく呆けた顔になる。

「関係ねえよ。エーイーリーよりも、俺の方が頭がいいし、強い。それを証明したい。どちらがフルカネリにとって、良い創造物なのか。理解させる良い材料になる」

「少し待てよ。冷静になって考えろよ。俺だって頭を回転させるのは得意じゃないけど、パラディア。お前、少しさっきからおかしいぜ？ 当然、俺はあの軍服野郎をいつも殺したいと思っているが、……何か、今はマズインじゃねえか？」

「何言っているんだよ？ お前、少し変だぜ」

「何って……」

ベレットは少し困る。

自分以上に、パラディアは無鉄砲だ。

それに……。

シゼロイの顔が、頭を過ぎる。

何故、今になって、あの子供の事を思い出す……？

自分が、分からない。……。

ベリーアとトゥルーセは死亡した。

今後、クレーターで内乱が起こるのは目に見えている。

「とにかく、おかしいって、お前、何かに取り憑かれているよ。俺もそうなるから分かるんだ。俺も執着するとそうなるんだ。この芸術を完成させたいってなるとな。とにかく、今はやめろ」

今、クレーターの統領である、エーイーリーを刺激して良いものなのだろうか……？

分からない。……ベレットは、頭を回転させていた。

固定の解除が解ける。

パラディアは苛立ちしながら、岩を蹴る。

「おい、せっかくチャンスだったのにっ！」

「頭を冷やそうぜ。多分、今、奴らを撃っていたら、エーイーリーと全面戦争になっていた」

「俺はそれでも構わなかったんだけどな。……………、もしかして、何か思う処があるのか？」

ベレットは黙る。

「二ヶ月後に、此処は数百本のミサイルや核爆弾、試験的爆弾が撃ち込まれてゼロになる。エーイーリーも死ぬ。それで終わる場所だろ？ 何か思う処があるのか？」

門の中に入ると、銃器を手にして、コンバット・スーツを身に付けている、頭や腕を剥き出しにしている男達がいた。白人もいれば、黒人もいた。

ゴードロックは、それを見て、少し驚く。

「入るぞ」

彼は緊張を顔に出さないようにした。

「ああ、主がお待ちかねだ」

銃器を手にした男達は、二人を案内していく。

彼らの顔や手などは、剥き出しだ。

「なあ、あんたらは大丈夫なのか？」

ゴードロックは彼らに訊ねる。

「どの件だ？」

男達の一人がよく分からない、といった顔をする。

「……………。放射能だ。此処の数値は異常だ。住民達も近寄るな、と執拗に警告してきた」

男達は首を傾げていた。

何を訊ねられているのか、よく分からないみたいだった。

広場に案内される。

公園のような場所だ。

遠く向こう側に見えるのは、宮殿のような場所だった。

二人は、その中へと通される。

しばらくは、銃器を持った警備兵達が彼らを見ていた。

特に、害意を二人に向けてくる気配は無かった。

三十分程、歩いただろうか。

エレベーターの上り下りなどもあった。長い大広間も横切った。

豪華な装いだが、元々あった何かの施設を大幅に改装したようにも見えた。

ゴードロックとズンボは、王座へと到着したのだった。

王座。

そこは、狭い部屋だった。

一人の痩せ衰えた老人が、白衣の男達に見守られながらシェルターの中に入っていた。老人の身体は管や点滴に繋がっていた。

「此方が……」

医者 of 一人が言い掛ける。

ゴードロックは言葉を遮る形で、思わず口にしていた。

「おま……、貴方が、エーイーリーですか？」

老人は呼吸器を外して、中に入っているマイクに喋りかける。

すると、部屋全体に老人の声が響いた。

＜ようこそ。見ての通り。わしがエーイーリー。クレーターの王だ。今はこうやって、部下達に見守られながら、生命を繋いでおる＞

ゴードロックはしばしの間、何を話して良いか分からなくなった。

ズンボが、横に入る。

「あの、この方達は……………」

この部屋で、絶対にスーツを脱いではいけない。ガイガー・カウンターの数値がそれを語っている。

＜ああ、やはり気になったのじゃな。彼らはアンドロイドじゃよ。つまり人間の姿をした機械なんじゃ。感情回路は無い。わしをいつも見守っておる＞

しばらくの間、沈黙が続く。

先に口を開いたのは、エーイーリーの方だった。

＜わしがフルカネリさまから与えられた能力は、神話のモンスターへと変身する力じゃった。わしはドラゴンやミノタウロス、サイクロプスやヒドラといった怪物。果てはあらゆる奇形的な化け物に姿を変える事が出来た。……だが、ある時、わしの寿命は訪れた。力を使えず、徐々に老化していった。これでも昔は筋骨逞しい青年の姿をしていたんじゃがのう……………＞

老人は激しく咳をする。

＜クレーターが軍産複合体の連中によって、平らになる話は知っておる。わしがかつて、クレーターを支配した時に、このクレーターと共に生きようと、運命を共にしようと思った。わしの部下であるアンドロイド達は汚染で肉体が滅びる前に、あるいはフリークス化する前に、記憶を電子チップに移した者達じゃ＞

コンバット・スーツの男の一人がほほ笑んだ。

「俺は共産革命、社会主義革命を目指して、かつて資本主義の帝国と戦っていたレジスタンスです。今はこの通り、ロボットになりました」

彼は誇らしげに告げた。

＜お主は栄光の手の者じゃろう？＞

エーイーリーは、ゴードロックに訊ねる。

ゴードロックは頷く。

＜メビウス・リングはわしを始末したい筈じゃ。心配しなくとも、わしの寿命はもうじき尽きようとしておる。二ヶ月後、……もう一カ月半を切っておるかのう。それまで生きていないかもしれぬ。お主がわしを撃ち殺しても構わぬ。後は部下達がクレーターを収めてくれるじゃろう……………＞

老人の言葉は、何処までも穏やかだった。

＜そこにある生命維持コードを引き抜くだけで、お主はわしを殺せる。だが、その前に一つ頼まれてくれぬか？＞

「なんだ？　じいさん……………」

＜ベリーアのカジノ区域で鎮静化している怪物に、わしの力を使わせて欲しい。わしのもう一つ的能力は、動物程度の知性の存在ならば、操作出来る事じゃ。たとえば、外のカリス・ビース

トは、その力によって操作しておる。人間並に高度な存在を操作する事は不可能なんじゃが
のう……。そして、トゥルーセから聞かされておる。あのベリーアのカジノ地区で沈静化して
いる、奇形のドラゴンの姿をした、空飛ぶ怪物は元々は薄幸なかよわき少女であったのだろうか？

かつてのわしは、傲慢じゃった……。己の力を誇示して生きておった。だが、怪物化する力を
使えなくなって、弱き者達の視野が見えてきたのじゃな……>

老人の瞳は虚ろだった。

そして、深く暗い悲しみを帯びていた。

老人は僅かに微笑む。

<計画があるんじゃ。…………>

†

エーイーリーは、奇形のドラゴンの姿をした怪物に『精神操作』の能力を仕掛けて、入手した
軍産複合体、世界的経済連合のメンバーの顔を記憶させた。

怪物は、数十分後に、すぐに空へと飛び立っていった。

その映像を、エーイーリーは、二人に見せてくれたのだった。

今後、何が起こるかは、分かり切った事だった。

その事実から、眼を背けてはならないのだろう。

ゴードロックは、エーイーリーの要望を飲まざるを得なかった。

もしかすると、別の解決法もあったのかもしれない。

けれども、彼はそれを選ばなかった。

この解決で良かったのだろうか……？

ゴードロックとズンボはしばらく、黙示したまま宮殿の外へと向かっていた。

すると……。

轟音が幾つか響いた後に。

遠くから、機関銃の引き金が引かれる音がする。

それは、すぐに近付いてきた。

音よりも、早かったのだろう。

タイヤが地面に勢いよくこすれる音がする。

バイクに乗った男二人が、ゴードロックとズンボの二人の前に立ち塞がっていた。

バイクは炎の狼と一体化していた。

「よう、正義の味方」

ゴードロックと同じように、リクビダートル・スーツを身に付けた男のうちの一人が、楽しそ
うに告げた。

「俺はパラディア。俺の相棒のベレットに、昔、酷い怪我を負わせたそうじゃねえか。なあ、お前
は栄光の手、グレート・オーダー支部のゴードロックだろ？」

「そうだ。なあ……………、此処はお互いに引かないか？」

「何故だ？」

エーイーリーの部下達がライフルの引き金を引いていた。

弾丸は、空中で止まっていた。

「此処だからこそ、いいんじゃないか？ こいつらは多分、ロボットか何かだろ？ だから死なねえ。だがお前らは生身だ。そのスーツに孔が空いたら、被曝して、死ぬ。いい決闘場じゃないか」

自身の命さえも、ギャンブルのチップにしているかのような物言いだ……。

「いいだろう……」

ゴードロックは告げる。彼は少し、疲れた顔をしていた。

対する、パラディアは嬉々とした声をしていた。

彼は、炎に包まれているバイクから降りる。

ゴードロックは、隠し持っていたキーホルダー状にした物体を元のサイズに戻す。

それは、マグナム拳銃だった。

パラディアは、警棒のようなものを手にしていた。

警棒のようなものの先から、閃光が伸び、それはたちまちビーム・サーベルへと変わる。

「殺し合おうか。此処で。決闘の場だ」

邪魔にならないように。

ズンボと。

ベレトの二人は、それぞれ、二人の決闘者達から離れる。

だが、離れた二人共、他の二人を睨み付けていた。

「お前は？」

スーツを纏ったベレトは訊ねる。

「私は栄光の手、バーバリアン支部のリーダー、ズンボ」

「そうか、俺は今は気分が乗らなかったが。パラディアがどうしてもってな。……っ戦う場所を選べって話だよな」

「貴方はゴードとの遺恨があるんでしょう？」

「毎日のように憎んでいるぜ？ だけど、こんな汚染地帯でやりたくねえよ。気分が乗らねえ。……怪物相手に酷い目にあったしな」

「此処に入る際にいた。カリス・ビーストは？」

「俺がああの化け物の吐息を空気の固定で防いだ。それで良かった。そのまま、潜り抜けるつもりだったんだけど。……信じられねえだろ？ パラディアが、あの巨大な怪物の頭を、ビーム・サーベルで切り落としたんだ」

ズンボは言葉を失っていた。

目の前にいる男は、異様としか形容出来なかった。

既に戦いは始まっていた。

ゴードロックはマグナムの引き金を引いて、同時に後ろへと飛んでいた。

ビーム・サーベルは、天井を抉り、地面を削り取っていた。

そして、何名かのアンドロイド達の首を刎ね飛ばしていた。

勝負は、数秒の間に付いていた。

ゴードロックの引き金は、パラディアのスーツに孔を開けていた。

「お前の負けだ。……………、孔を塞いで貰え、……死ぬぞ」

パラディアは、突然、笑い始める。

そして、それまで着ていた、リクビダートル・スーツを脱ぎ捨てていく。

オールバックを下ろした、紫と緑に光る黒髪をした、ライダー・ジャケットの男が姿を現す。

「暑かったなー。ははっ、本当にこのスーツは蒸し暑いよな」

「おい、パラディアッ！」

ベレトは蒼褪めた顔をしていた。

今にも、悲鳴の叫び声を上げそうな形相だった。

「お前……………っ！」

「あー？」

パラディアは、ビーム・サーベルで少しだけ、自分の腕を焼く。

腕に、火傷ともリストカット痕とも付かない傷が出来る。

赤い血が滴り落ちていた。

「俺は人間なのかな？ ほら、此処のロボット共と違って、ちゃんと血は流れるんだけどなあ？」

彼は何故か、多幸感に包まれた顔で笑っていた。

「実は黙っていたけど。放射能、効かないんだ。フルカネリが、フルカネリの部下が、俺に転生の術をする際に、オマケとして付けてくれたんだ。他にも色々出来る。たとえば、エイズや梅毒にかからない、とか。強靱な肉体だろ？」

「フルカネリだと……………？」

ゴードロックが驚いていた。

「そうだよ、俺はフルカネリの力によって、怪物になった。栄光の手。俺はお前達を始末しなければいけない立場なんだ。お前らにとってもそうだろう？ 俺はフルカネリの創造物なんだよ」

パラディアの顔は、自信に満ちていた。

ゴードロックは拳銃の引き金を引く。

パラディアの背後から、フレイム・ウルフが現れて、ゴードロックに飛び掛かっていく。

炎の狼の動きは早かった。

ゴードロックは、フレイム・ウルフに押し倒される。

炎の狼達は、彼のスーツを喰い破ろうとしていた。

追撃として、パラディアはビーム・サーベルを振るおうとする。

「お終いだなっ！」

「お前がだよっ！ すでにピンを抜いておいた」

パラディアは気付く。

いつの間にか、彼の足元に、いくつもの手榴弾が転がっていた。

パラディアはそれを蹴り飛ばそうとする。

だが……。

一瞬の不注意によって、ゴードロックから眼を離して、彼の引き金を見過ごす事になる。

マグナムの引き金は引かれる。

彼の射撃の命中率は高かった。

パラディアの、喉の部分に、大きな孔が開いていた。

ライダー・ジャケットの男は、膝を付く。

「おい、畜生……、なんだよ、こ、れ……………」

パラディアは血を吐き続ける。

炎の狼達は、未だ攻撃の手を止めずに、ゴードロックのスーツを喰い破ろうとしていた。スーツの表面は焼け始めている。

再び、倒れた状態のゴードロックが引き金を引いていた。

今度は、膝を付くパラディアの腹部に命中したみたいだった。

「手榴弾が爆発しねえ……………、ああ……………」

手榴弾は、ゴードロックの辺りに転がっていた。

「ダミーだ。火薬なんて入っていない。中は空っぽだよ。ズンボもいるのに、此処でそんなもの、使うわけが無いだろ」

なおも、ゴードロックは引き金を引く。

今度は、マグナムの弾が、空中で停止していた。

「もう、勝負は付いているぜ……………」

ベレトが、パラディアの下に近付く。

「おい、女。お前の能力で、あの狼達をどかしてやれ、多分、自動で動いているんだ。パラディアは……………」

言われて、ズンボは、背後から鬼を召喚する。

鬼の腕が、炎の狼達をゴードロックから引き剥がしていく。

しばらく鬼の腕と狼達は戦いあっていたが、しばらくして、どちらも雲散霧消する。

「パラディアは……………、畜生、……………、ゴードロック、てめえは、いつもこの俺から奪っていく。いつもだ。いつもいつも、俺の家を襲撃した時に、俺の作品を壊しやがって……、今度は、俺の大切な人間を……………」

パラディアは、呼吸していなかった。

心臓も、動いていないみたいだった。

首の孔から、なおも濁流のように、血は流れ続けていた。

ベレトは泣いていた。

彼は、……彼はパラディアを背負う。

「人間の身体は、重いな……。バイクは置いていく……」

彼は涙を拭おうともしなかった。

「ゴードロック、栄光の手……、いつか貴様ら全員を生きながら解体してやる。絶対にだ。ああ、絶対に……………」

恨みと憎しみが、心の中で渦巻いていく。

そう言うと、ベレットは宮殿を出ていった。

彼はとても無防備に見えた。

「殺人犯である、お前に殺された者達だって、お前と同じ気持ちなんだよっ！」

ゴードロックは、勢いよく拳を地面に叩き付けていた。

しばらくの間、みな、沈黙していた。

ズンボは、転がっていた三つの手榴弾を見ていた。

爆発しない、パラディアを騙す為の空っぽの筈の爆弾だ。

彼女は、それを手に取る。

「ねえ、ゴード。貴方の能力って”因果”なのね……………」

言われて、ゴードロックは無言だった。

ズンボは、手榴弾の表面に触れていく。スイッチを見つけた。

彼女は壁に向かって、スイッチを引く。

すると、手榴弾の先から弾丸が飛び出し、壁に孔を開ける。

どうやら、手榴弾の形を模造した、拳銃みたいだった。

「”人を殺傷する銃火器”じゃないと、貴方の能力は使えないの？　こんなにも、貴方は優しいのに……………」

1

「あの空飛ぶ怪物は、僕の競争相手を蹴落としてくれるでしょう。これで、僕の会社は更に勢力を広げる事が出来る。そうだ、医療機関に投資をします。あの怪物の出す、汚染物質を治療する機関に投資しましょう」

「正気か？ エーイーリーに情報を流した者がお前だと知ったら、お前の命が連合の奴らに狙われるんじゃないのか？」

「ビジネスにはリスクが付き物です。僕はそう考えている。だから構わない」

ウキヨは笑っていた。薄ら笑いを浮かべていた。

カディアは確信する。

味方ではない。

この男は完全に気まぐれなのだ。

そう、この男は、弱き者達、正しき道を模索しようとしている者達の味方などでは決してないのだ。

「何故、そうするんだ？」

「何故、そうしたいかですって？」

ウキヨは薄い笑顔を浮かべていた。

「愚かな問いです。貴方が人々の平穏を願うように、僕は人々の滅びを望んでいる。それだけです。それだけが事実なのです。そうしたいから、するのです」

「金が欲しいのか？」

「そうですね……………」

ウキヨはTVのスイッチを付ける。

「僕の上司であり、師は、ミソギでした。大学を出た後、僕が彼の組織の末端会社に就職した時、彼が僕を見定めて、声を掛けてくれたのです。あの方とは親しくなりました。色々な事を教えてくださったのです」

天井近くに設置されたスクリーンから、映像が流れる。

「僕はほら、御覧の通り、能力者では無い。銃器の扱いも出来ない。僕の才能と言えば、交渉事を有利に進めていく事でした。それを、あの方から買われた。僕は会社を二年程で退職して、すぐに会社を立ち上げました。あの方の援助もあって。僕の会社の設立資金を出してくれたのは、あのお方なのですよ」

映像に映っていたのは、ジャズ・ミュージシャンの演奏会だった。

「僕は今やミソギさまの後ろ盾が無い。だから、死線を潜らなければならないのだと思います。僕が、冷房の付いた部屋で、ジャンク・フードを片手に、コンピューター・ゲームをやっていた年頃に、あの方は本物の戦場で、地雷や飢えと戦っていた……………」

サックスの音が鳴り響く。

「カディアさま、ゲームをしませんか？」

「ゲームだと？」

「ゲームというよりも、ギャンブルでしょうか」

「何を言ってやがる。それに何を賭けるんだよ？」

「賭け金は、このビルの中にある自販機で買えるコーヒ一杯分の値段で良いでしょう。カディアさん、コインを出していただけますか？」

そう言うと、武器商人ウキヨは、財布の中からコーヒ一杯分のコインを出して、机の上に置く。

言われるまま、カディアもコインを出す。

何故、彼の言葉に乗ってしまっているのだろう？ カディア自身も理解が出来なかった。

「ギャンブルの内容は？」

「そこに、スクリーンの下にある棚の上に、金属の箱が置いてありますね」

「それが？」

「拳銃が入っています。銃弾も、です」

「それがどうした？ まさかロシアン・ルーレットでもやるつもりじゃないだろうな？」

「まさかまさか。貴方の望みを叶えて差し上げたいのです」

スクリーンからは、音楽が流れ続ける。

今、佳境に入ったのだろう。

「ギャンブルの内容は単純明快です。その箱に入っている、拳銃で貴方が私を殺害出来るかどうかです。……心配いりません。……」

そう言うと、ウキヨは腹の底から怨念じみた声で叫ぶ。

「トモシビ！ もし、この方が僕を撃ち殺したとしても、その方を必ず安全にこのビルの外へ連れ出せ！ お前がこの方に報復する事は許さない。僕の会社の人間全員にも、それを伝えろ！」

ウキヨは、何処までも柔和な笑顔だった。

「……………、イカれているよ……………」

「時間は十分です。600秒。では、ゲームを開始します！」

カディアは、しばらくの間、硬直していた。

そして、ふと思い出したように、棚の上に置かれた金属の箱を開ける。

中には、拳銃と銃弾が入っていた。

重く、そして冷たかった。

「なあ、おい、本当にイカれているんじゃないのか？ それとも質の悪い冗談かよ？」

「いえいえ、試しに壁に撃ってみてください」

カディアは引き金を引く。

ウキヨの背後にある窓ガラスに孔が開く。

ウキヨは平然とした顔で、笑っていた。

「後、七分です」

カディアの手は震えている。

「おい、本当にお前は一体、何を考えてやがるんだ？ お前は、あるいはお前らは何を考えてい

るんだよ？」

カディアは、何故か涙を流していた。

ウキヨの心には、何の動揺も無かった。震えも恐れも無い。自分が死ぬ事さえ、当然の事として、受け入れている。まるで他人を蹂躪する事を当然の事とするように、彼は自分が死ぬ事にも、殺されようとする事にも、何も感じていない。

そして、別の感情もあった。……カディアには、撃てない。そう確信している感情。

「カディアさん、貴方はネゴシエーターとして、凶悪犯罪者などの説得をするお仕事をされてきましたね。貴方自身は人を殺した事は一度も無い。タダの一度も。貴方は正義の立場に立ちたかった」

しばらくの間、時間が過ぎる。

「四分を切りました。僕を殺せば、少なくとも、僕の売る武器によって、何十万、何百万という命が救われるかもしれません。世界が少し良くなる。貧困も減るかも……。民主主義の設立に、少しでも貢献出来るかもしれないのですよ。何故、貴方は僕を殺さないのですか？」

カディアは絶句していた。

ウキヨの笑顔は、まるで死の舞踏に出てくる、死神のような笑いだった。……ただ、そうしたいから、そうする。金を儲けたい、より権力を持ちたい。……そんなものは口実なんじゃないのか。ただ、そうしたいから、そうする。

完全なまでに、この男は狂っていた。

「僕は幼い頃から、TVゲームが好きでした。軍事モノがね。それで人を殺したかった。それから戦争映画も大好きでした。だから、こういう仕事をしているのです。あ、二分切りますよ」

ウキヨは指先で拳銃を撃つ真似をする。

「僕の家庭は裕福でした。ミソギとは、正反対でした。彼は衛生害虫を食べて、ペドフィリアに身体を売り、泥水や違法薬物を口にして飢えを凌いでいた。僕は幼い頃にIQテストを受けて、人よりも遥かに高い事が分かり、英才教育を受けました。はっきり言います。余り苦勞した事はありませんね」

カディアの拳銃の照準が、ウキヨの額に向かう。

「あ、もう一分を切っています……」

二つ程、発砲音が鳴った。

窓ガラスが飛び散っていた。

「三十秒を切りました。これなんだか分かりますか？」

ウキヨは、自らの左手の掌を広げる。

そこには、くっきりと弾痕が残されていた。

「これ、僕が自分で撃ったんです。太股にも撃ち込みました。大手術でしたよ。臨死体験もしてきました。でも、僕は人の痛みを理解する事が出来ませんでした。18の頃です」

引き金が引かれる。

ウキヨの首から血が流れる。

カディアは涙を流していた。

そして、地面に拳銃を勢いよく投げ付ける。

「俺の負けだよ……」

ウキヨの首筋は少しだけ、出血していた。

彼は自らの血を、無感動に眺めていた。

「あ、じゃあ。賭け金は戴きますね。コーヒーを買ってきます。でも、そうだ。貴方の分も買ってきますよ。奢ります。ギャンブルに付き合ってくれて、ありがとうございました」

ウキヨは、深々と頭を下げた。

カディアはうずくまり、テーブルを叩き付けていた。

……………無力感。完全なる敗北、だ……。

「自ら戦場に足を運んだ事は？」

カディアは部屋を出ようとする、死の商人に訊ねる。

「何度も。最前列の席から見たいですから。砂漠が多かったんですけど。暑いですね。ジャングルにも遊びに行った事があります。熱線と爆風に煽られて、少し火傷した時は驚きましたよ。あれは痛かったなあ」

こいつは……化け物だ……。

人間では無い、何者かと、話しているような感覚を、カディアは感じていた。

プログラムされた機械なのかもしれない……。そうである事を願った……。

怪物や異常な能力者などの方が、余程、感情を持っているのだろう……。

ただ……、完全に敗北したような気がした……。

†

「あたしは思うのだけどさ。この世界は何て単純な構造なんだろうって？」

「この世界ですか？」

「そう、この世界の仕組みさねえ」

白い鳥が空を飛んでいる。ハトだ。

青空だった。

公園のベンチに、カディアと花鬱は座っていた。

長閑だ。

カディアは煙草に火を付けて、缶コーヒーを口にしていた。

空しそうな眼で、公園で遊ぶ子供達を眺めていた。

彼らの顔は笑顔だ。

「上手く、説明出来ないんだけどねえ」

空にある雲は、ゆるやかに流れていた。

「お金が宗教になって、命が踏み躪られていく。激しい生存競争で他人を殺して奪ってでも生きようとする。みな暴力に魅せられて力を持ちたがる。退屈な平和よりも、戦う事を望んでいる。理不尽さや不条理さに晒されれば、あの世というものを作って、死後の世界で復讐しようとする。際限の無い欲望を満たそうとする。……あたしは難しい言葉は言えないし、難しい本を読んで

いるわけじゃないから、そんな事しか言えないけど。……この世界は単純な仕組みなのかしらねえって」

花鬱も、少し疲れたような顔をしていた。

「人がみんな仲良くなれる社会、世界は存在しないものなのかねえ」

「私もそれを強く願いました……………」

「時折、全てが無為に思えるのさ」

「そうなのでしょうか……………」

「あたしは水商売あがりだから、お金が好きなのは分かるのさ。夜の世界は煌びやかだけど汚いからねえ。それからみな、何かしらの妬みを持って生きている。人間の業ってのは、深いって」

花鬱は口元を押さえる。

「戦争や、他人を蹴落とす競争の無い世界に行きたいねえ」

「……………。ですねえ……………」

何処までも長閑だった。

「ならば、お前の判断が正しかったのだろう」

通信機で、メビウスはそう答える。

オブシダンが高級車を運転していた。

何処までも、長閑な、街だった。

平和で、平和過ぎて、住民達が退屈しているような街だ。

後部座席にはメビウス・リングが座り、通信機越しにゴードロックと話をしていた。

「私はフルカネリと奴の創造物は駆逐する。それが私の“使命”だからだ。エーイーリーは自然死するのだろうか？ お前に託した私の“命令”はそれで終わりだ。クレーターに対する選択は、私の命令の外であり、お前自身の問題だ」

人形は、淡々と述べていく。

「お前はお前の意志に従っただけだ。もしその結果として、お前が苦しむ事になろうとも、あるいは悪い結果となったとしても、咎めを行うべき者はお前自身だろう？」

重い言葉になるだろう。

彼女の言葉は、ゴードロックを更に精神的な窮地に追い込むのかもしれない。だが、窮地を乗り越え、彼は成長するだろう。メビウスは彼を信頼していた。

オブシダンは、メビウスという偉大な存在が自らの上司である事を誇りに思う。

車は市街を走り続けていた。

途中、渋滞も多いので、中々、事務所には辿り着かない。

メビウスは、フルカネリの生み出した創造物を根絶したがっている。

だが、それ以外の問題に対しては、他の者達に選択を委ねている事が多かった。

「渋滞に巻き込まれましたね」

オブシダンは、サイドブレーキを引き、ギア・チェンジを行った後、ハンドルから手を離す。

「メビウスさま。ご意見をお聞きして良いのでしょうか？」

「なんだ？」

「何故、此処の市民達は、此処以外の比較的争いに巻き込まれていない国の人々は穏やかに生きているのでしょうか？」

メビウスは答えない。

オブシダンは独白するように話し続けていく。

「私は一人のアーティストに過ぎません。人形作家でしかなく、個展を開き、作品を飾っています。その創作物は極めて私個人のエロスのイメージ……性欲の表象や、人間に対する“獣性”というイメージを混成させたような作品群に過ぎません。私は剥き出しの暴力の表現なんて出来ない。……でも、暴力が怖いと思います……」

メビウスは無言のまま、彼女の言葉を聞いていた。

「数年前から、人形制作の教室を開いています。生徒さんに球体関節人形制作の基礎などを教え

ています。……、私は暴力をイメージする表現が出来ない……。私は本当は世間でもてはやされている程、才能なんて無いんです」

オブシダンとは悔しそうに言う。

「私は異能な超能力を持たない者達も、“能力者”と言えるのではないかと思います。たとえば、政治や軍事を動かす事に長けているとか」

メビウスは無言で、彼女の話聞いていた。

「この世界はたった一人の能力者によって、何百万人規模の人間が死ぬような世界の下に生きているんです。私も持っているような異質な超能力から、軍事産業を操る手腕を持っている者達の手によって運命は操作されていくんです。こんな街、力のある者達が少し気まぐれを起こせば、簡単に地獄のような世界に放り込まれるんですよ。けれども、報道関係者はそれを隠そうとする。……そうしなければ、人々の心が壊れてしまうから……」

この国の住民達の笑顔は明るい。

隣で渋滞に憤っているカップルなどは、将来を語り合っているみたいだった。マンションを買う話をしているみたいだ。

「私達は何の為に産まれて、生きて、この世界に翻弄され続けているのでしょうか？ メビウスさま、この世界には、地形を簡単に変えられる異常な力を持つモンスター、巨大な建築物に触れるだけで壊せる生体兵器、国一つを永久の汚染地帯に変える事の出来る核兵器の取引、果ては一人でこの惑星全てを破壊出来る能力者までいるんです。……私は時折、その事実狂いそうになるんです……………」

オブシダンは、今にも叫び出しそうになる。

「みんな、……この国の人々は、……強大な何かが少し気まぐれを起こすだけで死んでいく程の脆い存在なのに、正気でいられるんです。みなTVのお笑い番組に笑って、カップル達は未来の計画をしている。ファッション・ブランドの話ばかりしている。映画やアニメに浸っている。豊かさを楽しんでいる。私は……、この世界の事実を知らされた時、狂いそうになりました。……………所詮、自分が上位存在に翻弄されるだけの駒でしかないのか、と」

人形作家はハンドルを強く握り締めて、少しだけうつむく。

前の車は進みそうにない。

「文字通りの発狂です。酷い精神病になりかけました……。自分が所詮、小さすぎるアリみたいな存在で……。……、貴方の意志が強大でなければ、私はもしかすると、全ての情報を閉ざして、必死で“普通の人間”に順応しようとするか、あるいは自殺の道を選んだのかもしれませんが」

オブシダンは自らの心の脆さを吐露していく。

メビウスは、聞くだけだった。

いつだって、メビウス・リングは、オーダーのメンバー達に対して、彼らのやり方や思想を重視する。

それが課せられるべき、“責任”なのだろう。

クレーターの通行許可書を手にして、この場を離れる処だった。

ゴードロックは果たして、自分の選択は正しかったのか、と考えていた。あの奇形のドラゴンは遠くの街を火の海に変え、汚染物質をバラ撒くだろう。経済連合のメンバーだけではなく、一般市民の多くも死ぬ。

どうすれば、良い解決になったのだろうか？

自分には分からない。

ズンボを見る。彼女は首を横に振った。自分も答えが出ない、という意思表示。

このクレーターは、このクレーターに流刑にされる者達は、ずっと昔から蹂躪され続けてきた。

つまり、あらゆる国の、ゴミ捨て場としてだ。

此処は、世界中から合法的に見捨てられた場所なのだ。

ゲート付近に近付く。

守衛達が倒れていた。まだ息はあるようだ。

傷痕は無い。ゴードロックは経験上、おそらくは手刀などを当てられて、気絶させられているのだろうという事がわかった。

異様だ。

「……何があった……？」

彼は、上を見上げていた。

空中十数メートル真上に一人の男が浮かんでいた。

顔は端正だが、身体には確かに細く締まった筋肉が付いている。

異国の民族服のようなものを身に付けていた。

異様なオーラを纏っている。

「お前は？」

「私ですか？」

蔑み、喜び、高揚感、あらゆるものが混ざったような顔をしていた。

男は脚を踏み出す。すると、突然、落下する。

そして、着地する。

着地音は無かった。

「そうだなあ。経団連のメンバーである、H T T社の護衛をやっている、と言えば、意味が分かりますか？」

「何をしにきた？」

「内部調査ですね。エーイーリーに対しての情報が分からないのですが。それから、私の無能さから、あの空飛ぶ怪物は始末出来ませんでしたね」

彼はどこか、嬉しそうな顔をしていた。

「私はクビですかね？ H T T社の会長から解雇されるでしょうし。あ、でも、彼は死んじやうのかな？ 前金は既に充分貰っているので構わないんだけどなあ」

「何故、わざわざ現れた」

「私も質問します。貴方達は何者なんですか？」

ゴードロックは、意表を突かれた。

「何者と……………」

「お互い、自己紹介しませんか？ 私は貴方達は何者なのか分からない。だから、始末に困っているんですよ。私は、エーイーリーのアジトの前で、貴方達が巨大ミサイルを出しているのを見ていました。……勘ぐらないで下さいね。あんな行為、アレは嫌でも目立つでしょう？ それから、貴方達は武器商人じゃ無いですよ？ どうも、貴方達は、そういう風にこの街のギャングやエーイーリーの部下達に伝えられているみたいですが。私には貴方達がどうしても、武器商人の顔には見えません」

「……………。俺達は『栄光の手』だ。この名前は分かるか？」

「ああ。……ドーン、いや、メビウス・リングの直属の実働部隊の方ですか？」

「そうだ。お前は？ 俺もお前がタダの護衛能力者には見えない」

青年は前髪を上げる。

柔和な笑みだった。だが、その笑みの奥には、確かにドス黒い何かを抱えていた。隠し切れない程に……。

「『御使い』、です。ご存知ですか？」

「……………、知らん」

「知らないんですか……」

男は少し落ち込んだような、なんとも微妙そうな顔をする。

「御自分で調べれば、ドーン 사이트などで検索すれば出てくるのに……。えと、説明しますね。私達、御使いは『暗殺ギルド』なんですよ。主に大企業などの下請けもしますが、基本的にはフリーのグループなんです。各国の政府において、裏で公認されている為に、私達はランキング(賞金首)、つまり犯罪者認定されませんから、ドーンのリストには載りません。メビウスも、私達を抹殺対象にはしていません」

彼は舌を出し、自らの唇を舐める。

「御使い、という名前以外にも、単純に暗殺者連合、ザ・ダーク、シャドウ・リーパー、マサクル・ソーディアン、漆黒霧の死神、……キリが無い程、色々な人達に色々と言われていますが。御使い、が比較的、一番、普及されていますね。私達自身は組織名を持っていません」

「お前の名は？ 俺はゴードロックと言う」

「私は『ナイトメア・サイクル』のエンプティと名乗っておきます」

エンプティと名乗った男は、両腕を伸ばして、屈伸運動を始める。

「さてと、お聞きしたいのですが。ゴードロックさん。単刀直入にお聞きしますね。貴方がやった事は、メビウスの指令ですか？ それとも貴方の独断ですか？」

「俺の独断だ」

ゴードロックは即答する。

「では、私の立場を表明します。ゴードロックさん。私の立場上、貴方を始末、つまり殺害しなければならないのですが？ ご了承出来ますか？」

元軍人は溜め息を吐く。

「仕方ないよな。やはり。お前には、お前らにも立場があるんだろからな」

「ええ、そうですよ。貴方は今後、経団連、軍産複合体から狙われるでしょうね。でも、我々の依頼主も、メビウスには手を出せない。そういうルールですから。貴方個人だけになるでしょうね、抹殺対象は」

「ああ、メビウスさまは、フルカネリとA級以上の別枠指定のランキングを抹殺対象にしている。そしてドーンは賞金首認定された能力者を始末するギルドだ。お前達とドーンは対立出来ない」

「再三確認しますけど。でも、貴方がクレーターでやった事は、貴方の独断でしょう？」

「そうだ」

男は、嬉しそうな顔になる。

その言葉をとても待っていたみたいだ……。

「じゃあ、私達は戦うしかないですね」

「そういう事になるな。……今は少し疲れている。後にして欲しいが」

「申し訳ないですが、敵が弱っている時に暗殺するのは常識です。既に、確認が取れていれば、私は貴方を物陰から狙っていますし」

ゴードロックは交渉を諦めて、カプセルのように小さくしていた拳銃を元のサイズに戻して構えていた。

「私は栄光の手、バーバリアン支部のズンボ。私も貴方と戦うわ」

ズンボは背後から、鬼の召喚を始めていた。

……………。

ナイトメア・サイクルのエンプティ、と名乗った男は、飄々とした顔で、二人を見ていた。…
…何を考えているのか分からない。

ただ、楽しげだった。

狡猾そうで、そして、剥き出しの悪意が渦巻いている顔だった。

「……嫌な予感がするわ」

ズンボが、元軍人の耳元で囁く。

ゴードロックは、ズンボを制し、銃を乱射していた。

まるで見えない隙間でもあるかのように。……………。

空中で。

弾丸が止まっていた。

エンプティは微笑していた。

「お前は……………、何をやっている…………？」

ゴードロックの顔が引きつる。

何処に隠し持っていたのだろう。

エンプティはマグナム拳銃を取り出して、それをゴードロックに撃ち込む。弾丸は、全て、ズンボの鬼の腕が払い落していた。

「お前は、何をやってやがるんだっ……………！？」

「見れば分かるでしょう？ 私の能力は全貌を隠したくても、隠し切れないんですよ」

そう言うと、エンプティは、まるで見えない階段でもあるかのように、空中に登っていく。

「では、二人共、死んでください」

底なしの冷たい瞳だった。

ただ、捕食し、殺害する為にだけに生まれてきた者のような瞳。

暗殺者の眼だ。

数え切れない者達の命を奪ってきた者の顔だ。

……………。

それは。

無数のガラスの雨だった。

人間の肉など、簡単に引き千切るものだった。

巫女は、即座に動いていた。

鬼が実体化して、すぐさま、傘のように、二人を覆っていた。

ズンボの召喚した、鬼の皮膚が少しずつ、削り取られていく。

彼女は虚空から、弓と矢を取り出す。

「破魔矢よ」

彼女は、弓を引いて、空中に立っている男に撃ち込んでいた。

それは。

何処からともなく現れた、鬼の腕によって、弾き飛ばされていた。そして……………。

「“新しい力”を使いましたね」

彼も、虚空から、同じ弓と矢を取り出して、弓を引いていた。

同時に、彼の足もとから、炎の狼が生まれ、落下し、二人に向かっていく。矢は放たれる。傘となった鬼の体躯から出れば、ガラスの雨に撃たれる。

破魔矢が、ズンボの肩を射抜く。

彼女は地面にうずくまる。

炎の狼達が迫ってきた。

ゴードロックは手榴弾を投げて、その怪物達に命中させていく。

「お前の能力は……………」

「もう大体、分かったでしょう？ ……補足すると、あの化け物、ドラゴンを倒す力は、クレーター内で見つかりませんでしたし……………。だから失態なんです」

炎の狼、……………パラディアの能力だ。

そして、ズンボの鬼を召喚され、更に撃ち込んだ破魔矢を返された。

「コピーするのか？ お前は他の能力者の能力をコピー出来る能力なのか？」

「そうです。ちなみに、このガラスの雨は、今は亡きトゥルーセの能力ですよ」

そして、エンプティは少し悔しそうな顔をする。

「エーイーリーの精神操作も、ドラゴンに試してみましたが。弾かれました。エーイーリーの力は、どうも……………、使い方がよく分かりませんね」

エンプティ、彼が複製している、お気に入りの能力は、空間を固定したり出来るベレトの『マスター・ウィザード』みたいだった。

「敵対する相手に、自身の能力を明かしたり、説明するのは良くない。常識です。でも、私の場合はすぐにバレる。だから、逆に考えています。意志をくじく為にです。強大な力は抵抗力を奪いますから。私は、ある一定の範囲、領域、領土内にある、他の能力者の能力を複製出来るんですよ。それが私の『ナイトメア・サイクル』の能力です。ちなみに、更に言うと、私自身が見なくても、この領域に“存在する”という“事実”だけで、コピー出来ます。……私には、この領域内にいる能力者、あるいはいた能力者、この領域内で使われた能力が“視えます”。そして、それをトランプの手札のように自在に取り出して、使用する事が可能です。さて、ゴードロック、ズンボ。これが私の『ナイトメア・サイクル』の能力の全貌なんです。……貴方達は此処にいる、あるいは訪れた能力者達の能力を全部、知っているんですか？ 知るわけがない。敵に情報を教えないのは、戦略の常識ですよ？」

この男は、とても楽しそうだった。

この状況を楽しんでいる。

組織の刺客としてではなく、戦う事、あるいは敵を始末する事そのものが楽しい、そんな顔をしていた。

力の差は歴然としていた。

「反則だろ……」

ゴードロックは思わず、呟く。

エンプティの顔は、捕食者のそれになっていた。

「では二人共、死んでください」

彼は右手を掲げる。

掌に閃光が集約されていく。

「かつて、政治犯として此処に流刑され、死亡した男が使えた能力です。そんな脆い装甲なんて簡単に破ります」

エンプティは、本当に楽しそうだった。

地上十数メートルから二人を見下ろすのは絶景なのだろう。

トゥルーセの能力だったものといった、ガラスの雨が振り続けている為に、傘状になった鬼の外には出せない。

「貴方は私の能力の全てを知らない。私はこの場所で“使っていない”のだから。貴方の能力はコピーであると同時に、“再利用”なんでしょう？」

ズンボが訊ねた。

エンプティは答えなかったが、表情で暗に認めていた。

「では、死んでください」

「さっき口が滑ったわよね？ “新しい力”を私が使った、って指摘したっ！」

エンプティの掌から、光の槍が放たれるのと同じだった。

「『疾萎砲(しつゐほう)』」

ズンボは空高く見下ろす敵に、人差し指を向け、指を刀で一閃するように振り下ろす。

刹那の時間だった。

それは現れていた。

彼の周辺に亀裂が走り、悲哀や憤怒の表情をした鬼の顔達が生まれる。そして、それは砲弾となって、暗殺者の下へと向かっていく。

「ズンボ、右に跳ぶぞっ！」

同時に、ゴードロックは叫び、ある小型化したものを元のサイズに戻していた。

暗殺者はそれを見て、思わず、吹き出していた。

それは戦車だった。

戦車を、鬼達が背負って傘にしていた。

エンプティの放った光の槍は、二人が立っていた場所に大穴を開けていた。底が見えない程に黒く深い孔だった。

ズンボの召喚した頭だけの鬼達が『マスター・ウィザード』の装甲を食い破っていた。空中に張り張り巡らせられた“固定”のバリアを食い破っていたのだった。

そして、一、二秒後の事だった。

エンプティの腹と、喉、左側頭部が吹き飛ぶように、喰い千切られていた。

「どうだっ！ 武器は防具になるんだぜっ！」

ゴードロックは裏返った声で叫んだ。

ズンボは、戦車のキャタピラを見ながら、自分達のシュールさに、思わず口を押さえて笑い出す。エンプティの肉体は振り続けるガラスの雨で、更に破損していき、やがてガラスの雨は止んでいく。

辺り一面は、ガラスの破片ばかりが散らばり、不可思議なまでの空間を作っていた。

「強敵だったわね……」

「だな」

鬼達は戦車を投げ捨てた後に、消滅していく。

ズンボは鬼を召喚する度に、かなり精神を消耗するみたいだった。彼女は意識が途切れ、ゴードロックに寄り掛かる。

「大丈夫か……？」

「大丈夫なわけないわ、よ。奥の手である疾萎砲(しつゐほう)を使ったから……。私の体力、精神力が相当に削り取られている。……でも、勝った。生き残れたわね……………」

そう言うと、ゴードロックの腕の中で、ズンボは意識を失う。

全世界が崩壊したような気分だ。

ベレトは布に包んだ、パラディアの死体を背負っていた。

クレーターの外に出ようと思う。

自由な出入りには、外側で発行される通行許可書が必要らしいが、彼にはまるで関係の無い事だった。

パラディアの死体は、時折、不気味に発光していた。

ただ、彼が完全に死んでいる事を、ベレトは受け入れざるを得なかった。彼の傷口には蠅や蟻が集ってきた。それをはねのけるのは嫌な気分になった。

彼の死体は発光しながら、色々な場所に、紫と緑の光を飛ばしていた。

……本当に、人の身体なのか？ パラディア、お前は人間では無い、別の何かにされてしまったんじゃないのか？

しばらくして、死体は光るのを止めた。

途中、シゼロイという名前の子供の存在を思い出して、彼の家に立ち寄る事に決める。すると、どうやら、別の人間が、この家には住んでいるみたいだった。

「お前らは何だ？ 此処に住んでいたガキはどうした？」

「はあ？ 貴方こそ何よ。変な格好をして。此処に住んでいた子供なら、借金を返し切れなくて、トゥルーセの配下達に連れて行かれたのよ。今度はアタシ達が借りて住んでいるってわけ」

家の中は改装されていて、少しだけ綺麗になっていた。

奥には、ベッドの中で寝ている男がいた。男は眠そうな眼で起き出す。

隣の棚の上には、注射器や白い粉などが置かれている。

ベレトはそれを見て、訊ねる。

「お前らって、ヤク中か？」

「ええ、そうよ。悪い？」

男の方は特に眼が虚ろで、未だトリップしているみたいだった。

「薬物って高いんだろ？ お前らの方は金持ちなのかよ？」

「何よ？ アタシ達は自分達の商売道具を、自分達で使っているだけ。これでも、ギャングなのよ。ねえ、これ以上、此処にいるんなら、拳銃を持った実働部隊の人達を呼ぶわよ？」

「つまり、お前達は、ギャング組織の一員で、外側の世界では違法薬物指定されているブツを売りさばいているってわけか」

「悪い？ 此処では立派な商売なのよ。貴方、此処に来たばかりで無知なのね。ねえ、本当にいい加減にしないと、貴方を始末してくれる人達を呼ぶわよ。せっかくダウンナーにトリップしていて、気持ちよくなっていたのに、アタシ達も揉め事を起こしたくないのよ。教えられる範囲の事なら教えるから、それを聞いたら、さっさと出て行って」

ベッドで寝転がっている男は、二人のやり取りを面倒臭そうに見ながら、白い粉末をストロー

で吸引しているみたいだった。そしてとても幸福そうな顔になっていた。

「此処に住んでいたガキが何処に行ったか教えて欲しい。知りたいのは、それだけだ」

「ああ。トゥルーセが死んで、その部下達の、更に下請けのギャング団が借金の取り立てとして、奴隷市場に連れていかれたみたいね。オークションにでもかけられるのかしら？ いずれにしても、アタシ達には関係無いわ、でも教えてあげる。貴方、綺麗だし」

いきなり、女は、ベレトの顔立ちの端麗さを指摘する。

そして、ベッドで、男の隣に寝っ転がると、注射器を取り出して、液体を自らの血管に注入していく。彼女の顔は何とも幸福そうだった。そして、紙とペンを取り出して、地図を書いて、ベレトに渡してくれる。

「ほら、此処に行けば。詳しい情報が聞けると思うわ。髪の色を赤と青のツートーンに染めた身長の高い男が立っているから。彼から教えて貰えばいいと思うわ。ねえ、それと、貴方、お兄さん？ お姉さん？ 今度、アタシ達二人と3人で一緒にやらない？ クスリ、分けてあげるから、アタシも彼もどちらもイケるの」

「そうか。嬉しいな。ありがとう、そこに行くぜ」

そう言って、ベレトは懷から、小剣に近いデザインのナイフを取り出すと、瞬く間に、男女二人の首をはね落としていた。

彼らは頭だけで、空中に浮いていた。

胴体は、ベッドに寝そべったままだった。

自分達に何が起きているか、まるで分からないみたいだった。

更に、薬物の過剰摂取によって、痛覚が麻痺しているみたいだった。

「じゃあな。教えてくれて礼を言うぜ。それと、俺はお前らの“命を固定”しているんだけど、しばらくしたら、能力が解除される。そうすれば死を迎えるんだけど。今のうちに、これまでの人生を振り返っていてくれ。大切な祈りの時間なんだから」

ベレトは満面の笑顔で、二人に手を振りながら、家の扉を閉める。

中の二人も、頭部だけが空中に浮いたまま、ベレトに笑顔を返していた。そして、薬物で酩酊状態のまま、ぼうっと多幸福感に包まれているみたいだった。

†

何故、自分があの子供を気に止めているのか分からなかった。

そこは、一キロも歩かない、すぐ近く of 場所だった。

赤と青の髪の色 of 男はいなく、住民の一人に訊ねると、彼は別の仕事が入ったから今はいない、と言われた。

だが、すぐにベレトは目的 of のものを見つけてしまった。

そこに、シゼロイはいた。

シゼロイは何も見えていない瞳で、ベレトを見下ろしていた。

彼の胸から下は無かった。

首に縄がぶら下げられて、二階から他の死体と共に吊るされている。

「何があったんだ……？」

彼は、一人呟いていた。

それを聞いて、背後で同じようにその死体を見ていた男が呟く。ヒゲ面の中年の男で、酷く憔悴していた。配管工用のツナギを身に付けている。

「なあ、あんた、話を聞いてくれるか？」

「頼む」

ツナギの男は地面にうずくまりながら、嗚咽していた。

「……………、クジを引かされたんだ。ほんの二時間前の事だよ。借金を背負っていた百三十数名のうち、五名が見せしめとして、上に吊るされている。十三分の一の確率だな……。他の百二十数名は強制労働所送りだ。地獄のような肉体労働の現場らしい……。途中で、娼婦になる事を選んだ女もいる。井戸に潜り、ミュータントの死体を漁る仕事を選んだ男もいる。……俺は強制労働を選んだ。……今、一服する事が許されている。一時間後には、タコ部屋に入らないといけない……。上で吊るされている奴らは、ラッキーなのかもな……。死ぬまで、娯楽もマトモに無く、過剰労働を強いられると聞かされている……」

男は絶望の表情を浮かべていた。

たった二時間前、……十三分の一の確率、……シゼロイは運が悪すぎた。

あの子供一人を助ける事は、助けてクレーターの外に連れ出す事は、ベレットには容易な事だった……。

ベレットはシゼロイの死体を確認すると、今度こそ、クレーターの外に出る事にした。

シゼロイの死体を強奪して、芸術作品へと変える事は……出来なかった。

背負ったパラディアが、先程よりも倍以上に重く感じた。

途中、民家を横切る辺りで、彼を呼び止める何かの鳴き声が聞こえた。

それは、シゼロイが飼っていた、白蛇のラルドだった。

「……………。お前も来るか？」

ベレットは呟く。

白蛇は、当然、といったように舌を伸ばしていた。

†

出入り口の警備員達を死体に変えて、ベレットは難なく、クレーターを後にした。

何もかも虚無だ。

彼は酷く疲れていた。

何十キロ、何百キロ、歩いたのだろうか。

この辺りは平地が続いていた。丘陵もあった。

夜になると、彼はクレーターの中で物色してきた缶詰などを開けて口にした。牛や豚、野菜の漬物とされているが、元の形は考えたく無かった。それにしても、クレーターの中からは、色々なものを店などで、かすめ取ってきた。白蛇は、彼の後を這いずり付いてきた。背負っていた荷

物は二つだった。一つは食糧などを入れたショルダー・バッグ。もう一人は布に包まれた大切な友人だった。

彼にとって、自分以外の存在は無価値だった。せいぜい、自分の創り出す“作品”を見て、賞賛を与えてくれる者だけが有意味だった。

死体アートの制作者ではないベレトを好きだと想ってくれた友人……。

林が見えてきた。

彼はその中へと入る。

林の奥を進んでいくと、いつの間にか深い森になっていた。

鳥が木々の上にとまっている。

夜だった。

静寂だ。

白蛇のラルドは、ゆっくりと横たわっていた。

闇色の森の中で、星と月が煌々と輝いていた。

虫達の声が聞こえた。

一体、どれくらいの距離を歩いたのだろうか？ 彼には分からなかった。

下水や井戸の中でも、空気を固定して、汚水などが掛かるのを遮断していたが、今や、彼が纏っているドレスやビスチェは酷く汚れていた。特に長いドレスの方は、木の枝などに引っ掛かって、ボロボロになっていた。

彼はショルダー・バッグを開いて、シャベルを取り出す。

此処の土は柔らかい。

此処に、友人の死体を埋めようと思った。

数日の間、放置していた為に、布を開くと、完全なまでの腐乱死体が出来上がっていた。眼球は虫に食われ溶けて、首の腹の孔にウジが集まっている。全身から異臭を放っていた。完全なまでに、彼は死んでいた。見るに耐えられず、再び、布に包んでいく。

ベレトはシャベルを地面に突き立てる。

「じゃあな、パラディア。お前といた数日間。悪くなかったぜ」

ベレトは、もう涙を流さなかった。

用途を終えたシャベルを、彼は墓標のように突き立てる。

「行こうか、ラルド」

彼は、その場を後にした。

……………。

木々がざわめく。

空を見る。

ふと、紫と緑の光が空を走ったように見えた。

ずずっ、と。

背後から、何かが蠢く音が聞こえた。

土が盛り上がっている音だ。

ベレトは振り返る。

すると、地面から腕が出てきた。

腕の下も這い上がってくる。

虫がぼとり、ぼとり、と落ちていく。

全身が腐り果てて、生前の面影が何も無いパラディアが、そこに佇んでいた。

ベレトは完全に言葉を失っていた。

「ゾンビなのか……………」

紫と緑の二つの光が、無数に空を駆けていた。

パラディアは何か呻き声を上げていた。

次の瞬間。

周辺の森の木々が大渦に襲われ、木々や小鳥や、虫達が渦に飲み込まれていく。そして、その渦はパラディアを覆っていく。

ベレトには、一体、何が起きているのか分からなかった。

理解出来る筈も無かった。

「おい、なに、だよ……………」

戦慄だけがあつた。

思考が追い付かない。

しばらくすると、服こそ泥で汚れているが、生前のパラディアがそこには立っていた。首の孔も完全に塞がっていた。傷痕さえも残っていない。

数分の間、二人は沈黙していた。

先に口を開いたのは、パラディアの方だった。

「俺は……、死んでいたのか？ ……いや、蘇ったのか？」

彼自身が、何が起きているのか、分からないみたいだった。

それに対して、ベレトは更に混乱する。

「何故、生き返れた？ お前はゴードロックに撃ち殺されたんだよ。心臓が止まり、死後硬直が起こり、腐乱が酷くなっていった……………」

「そうなのか？ 俺は生き返ったのか…………？ ベレト……、俺に今、何が起こったのかを、教えてくれないか？」

ベレトは、彼が見た、ありのままの状況を、パラディアに話す。

それを聞いて、パラディアは蒼褪めた顔と、恍惚とした顔を同時に行っていた。

「俺は、……俺は人間なのか？ 生き返る？ 俺は不死身なのか？」

パラディアは自嘲を始める。

「そう言えば、フルカネリの配下が言っていた。“もし、お前が死ねば。お前の大切なモノを犠牲にして、お前は再び命を得る。”あるいは、”大切なモノの大切なモノ“を犠牲にして蘇る”と……………」

「どういう事だ…………？」

「“等価交換”なんだろう。俺は複数の能力を、フルカネリの配下から貰った。強大な力も同時に欲しかったからな。……ベレト、多分、本当はお前を生贄にして、俺が蘇るルールだったん

だよ」

「おい、……何故、黙っていた？ ふざけるなよ。どういう事だ？」

「“命の運命”を操作する能力の付随だと言っていた。ベレト、お前、誰か周りで大切な人間が死ななかったか？ それも少し不自然に」

ベレトは頭の中を整理する。

……………、シゼロイは運が悪過ぎた……。悪過ぎて死んだ……。

………どういう事だ……？

「なあ、ベレト。俺のバイクどうしたんだよ？」

パラディアは少し億劫そうに言う。

「エーイーリーの宮殿に置いてきた……………」

「マジかよ！？ ……なあ、おい持ってこいよ。俺、あれのローン、後、沢山あるんだぜ。……更に座席の下に財布を入れていた。……最悪だ。色々なカードとかも入っていたし。作り直すの面倒臭せえ……………」

彼はその事で、かなり煩悶しているみたいだった。

周りの森は大きく、荒廃していた。

草木は枯れ、この周辺だけ、ありとあらゆる生命が死に耐えている。どうやら、パラディアが肉体を修復する為に、生命エネルギーを吸い取ったのだろう。

「なあ、此処はどこだよ？ クレーター内部じゃないようだけど。なあ、一緒に宮殿に戻って、バイク取りに行かないか？ ローンがホント、多く残っているんだよ……、それにとってもお気に入りだし」

「………………。……もう破棄されているんじゃないかねえの？ 行くんなら一人で行けよ。俺は疲れた……………」

「冷てえなっ！」

パラディアは叫ぶ。

「あー、そうだよ。畜生、栄光の手の奴ら、ブチ殺してやる。今からやろうぜ。あの軍服野郎に再戦して、今度こそバラバラに焼き切ってやるっ！」

「パラディア……、俺は少し疲れた……」

……………しばらく、彼の顔を見たくなかった。

……“大切な人間を犠牲にして復活する契約？ あるいは大切な人間の、大切な人間を犠牲にして復活する契約？”

ベレトは、頭で理解を追い付かせようとしていた。

フルカネリ……。

メビウスが絶対的な敵として、悪の化身として追っている存在。

生命を操る、造物主……。

「パラディア。……お前はどんな悪魔に魂を売って、その身体を手に入れたんだろうな？ そして力を……………」

パラディアは、ひたすらに、バイクを無くした悔しさと、栄光の手への敵愾心に憤慨している

みたいだった。

ベレトはパラディアの言葉を頭の中で、反芻していた。

……“俺の大切な存在”はあのガキだったのか？ 俺に大切な存在がいなかったら。あのガキの代わりに、俺が死んでいた？ この男は何を言っているんだ……？

等価交換、と言ったか。

ベレトは思考を追い付かせようとしていた。

それにしても、こいつは隠し事ばかりだった。

まだ、何を隠しているのか分からない。

こいつは、フルカネリの配下から貰った力の全貌を、ベレトに語らず、はぐらかし続けてきた。……信用出来ない。そんな言葉が頭を過ぎった。

「なあ、ベレト。それにしても、俺もお前も服が汚ねえよ。どっかで服を調達してこねえ？ 寝床もさあ」

「……………俺は泥棒……怪盗だ。基本的には、金は持たず、ぶんどるのがポリシーだ。服なら盗むし、宿なら流石に金が必要だな。金を盗む。余分な金はお前にやるよ」

「そっか、すげえ、イイ奴だよな、ホント、お前って。財布無いから、今、本当に文無しなんだよ」

パラディアは、ベレトの両手を強く握り締める。

そう言えば“恋人”だった。

今、どんな感情で、彼を見ているのだろう……？

「栄光の手はいずれ、皆殺しにする。でもなあ、パラディア。……今は、一人にさせてくれないか？ 金と服は盗んできてやる。……だが、その後は、しばらく一人にさせてくれ」

「……なんだよ？ 冷たいな。一緒にいるって決めただろ。パートナーだって……」

ベレトは。

持っていたナイフを、パラディアの喉に突き立てていた。

「これ以上、この俺に近寄ったら、再び同じ孔を開けてやる」

パラディアは困惑していた。

「なんだよ……、何か機嫌悪くしたんなら謝るよ」

こいつは……。

……………こいつは、一体、何を考えている……？

ベレトは理解に苦しんでいた。

パラディアの言っている意味も、その力の全貌も、フルカネリの配下の意図も、彼にはまるで理解が追い付かなかった。

一人になりたかった。

とにかく、一人になりたかった。

頭がおかしくなりそうになる。

「行くぞ、ラルド」

ベレトは白蛇を背負う。

白蛇は、彼の身体を守護するように巻き付く。

そして、ベレトは自らの周辺にマスター・ウィザードの固定の壁を張り巡らせる。近付くな、という意思表示……。

「なんだよ、ホントに……。お前、女っぽい姿だもんなあ。女心強いのかな？ 女脳なの？ ホント、機嫌直してくれよっ！」

こいつの明るい声は、うんざりだった。

腐敗から、脳は再生しなかったのか？ 脳は腐ったままなのか？ と皮肉を言おうと思ったが、余りにも疲れていたので止めた。

ベレトは白蛇を連れて、パラディアを置いて、森であった荒廃した場所を立ち去る事にした。

2

「あれ？ なんで、私は生きているんだ？」

エンプティは、自分の無傷の肉体をまじまじと見ていた。服だけがボロボロに張り裂け、自身の血液らしきものが黒く凝固している。

どうやら自分がいる場所は簡易的な死体安置所みたいだった。

この場所の管理人と思われる者の白骨が服を来たまま転がっている。

彼は、死体安置所の外に出る。

すると、樹木は枯れ果てて、沢山の服を来た肉を綺麗に削ぎ落としたような、血の一滴も付着していない、白骨死体が転がっていた。

彼は自身の額に指先を当てる。

すると、どのような現象が起こったのか、頭の中で映像となって現れる。

「成る程……。パラディアが蘇生したのか。……。運良く、私の力の射程内だったと……。うーん、もう少し、あの二人が離れていれば、私の復活は無かったな。私は運が良い、これもパラディアの能力をトレースしたからか……」

彼は疵(きず)だらけになっていた通信機を手にする。どうやら、まだ使えるみたいだった。そして、仲間達に任務の失敗を報告する。

「すみません。やはり私は御使いの中では、かなり無能なんですね」

エンプティは、まったくすまなさそうにしていない、といった表情で、通信機の向こうの相手に謝罪の言葉を述べる。

「……………、えっ、それよりも……」

その情報を知って、彼は狼狽し、遺恨の感情を込める。

気付けば、涙を流していた。

「彼が死んだんですか……？ ……事故死……？ ……そうですか。ええっ、私の大切な友人でしたよ。理解が出来ない……。そうですか、私は本部に戻ります」

エンプティは通話を終わらせる。

そして、壁にもたれかけ、空を見上げる。

しばらくの間、彼は呆然としていた。

「私も生き残ってしまったのか……。パラディア、お前、これからも他人を不幸にしていくんだろう？ この私も巻き添えにしがたって……」

エンプティは少し、フルカネリの力に嫌悪感を持つ。

そして、自身のナイトメア・サイクルが、パラディアと関わらないように、この場所から出来るだけ遠く離れる事に決めた。

3

世界は複雑だが、単純明快で、そしてどうしようもないくらいにまるで良くならない。どうすれば、希望に辿り着けるのだろうか？

この世界に対して、諦める事が一番の選択なのだろうか？

この世界は邪悪なるものの方が、絶対的で圧倒的に強い。

理想や正義が脆く、邪悪さに飲み込まれ、踏み躪られていく。

栄光の手のメンバー達が行っている事は、無為でしかないのかもしれない。

†

現実はとてつもなく、厳しく、辛い。

けれども、力の無い市民達は、ただ無感動に、あるいは他人事のように灰色の世界の中を生きている。他国の戦争、自国の猟奇事件、過剰な自殺者数、情報統制、あらゆるものから眼を背けて生きている。

生きている、と言えるのだろうか？

発狂の代償に手に入れたのが“平穏な日常”という名前の“ファンタジー”なのだろう。

†

「ゴード、なんで貴方って困難な道をあえて選ぶのかしらね」

ズンボはそう言いながら、此処に来る途中、今回の仕事で得た報酬の半分を、戦災孤児を支援する為の募金に使った。

日が照り、暑い。

二人は難民キャンプにいた。

彼はそこで炊き出しや、テント設備なども手伝っていた。

ズンボはゴードロックの行動に、興味と呆れを混ぜながら見ていた。

難民キャンプに入る際に、彼が軍服を着ている、という事を警戒された。彼は必死に弁解する。

……人を作る自己は内面の方に宿るのかもしれない。けれども、自分の内面の意志表示として、俺はこの服じゃなければいけないのだと思う。俺は戦争に行って、罪の無い人間も撃ち殺したし、家族のいる貧困層の兵隊をバラバラにした。俺は退役軍人である、という事実は、俺の“

意志表示”なんだ。だから、軍服を私服にしている。

最初、住民の一部は混乱していた。

だが、彼に敵意が無い事は、難民キャンプの者達には伝わったみたいで、ひとまず、上着だけでも脱ぐように言われた。子供達が怯えるから、と。それに対しては、ゴードロックは快諾した。

ゴードロックを見ながら、ズンボは手伝う事を断った。

段取りが分からないからだ。

彼が営む姿を見ていようと思った。

それにしても、と、ズンボは考える。

自分達の纏う制服は“スティグマ（消えない傷）”だ。

終わる事の無い、痛みや罪の結晶なのだ。

彼女は巫女装束を私服にしている。

それは、彼女にとって家系からの呪詛であり、終わらない苦しみと戦う事を余儀なくされた者なのだと、自分を現した刻印なのだ。

自分達は似ている……。

やってきた要職に対しての失望を感じて、生きている。……そして、それ故に、スティグマのイメージを自ら纏うのだ。

しばらくして、思考を止めた後に。

彼女は、彼の行動力を見習って、素直に炊き出しの手伝いを覚える事にした。子供達の笑顔が温かった。

†

帰りの飛行機の中だった。

空は夕闇が美しかった。

「指輪を買っていいかしら？」

「うん？」

「えと……、婚約指輪……………」

「いいよ」

隣り合った座席で、二人は手と手を重ねて、握り締める。

……………。

“儀式”によって、ズンボの子宮はズタズタだった。なので、子供は産めないと言われている。けれど、もし子供を授かる力を手に出来れば、彼の子が欲しいと思った。

END